
向日葵は太陽に魅せられて

立花 美月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

向日葵は太陽に魅せられて

【Nコード】

N7965V

【作者名】

立花 美月

【あらすじ】

結華はすべての責任と自分の人生を捨て祖父の別荘へ移り住んだ。ただ静かに、その日が来るのを待つだけの時間を黙々と過ごしていた結華だが、ある日思いがけない訪問者が現れ動揺する。扉越しに「やっぱり、いるんだ」そう言ったのは紛れもなく「元」婚約者の貴史だった…。***HPにて先行連載中作品の転載です。続きを知りたい方はそちらをどうぞ。***

花は美しいから見てもらえるのだ。

咲いていく過程と、咲き誇った後の姿は誰にも見られず、人知れずひっそりと枯れていく。まるで今の私のようにだと自虐的に笑って空を眺めた。

ああ、この空をあと何度見ることができるようだろう。私はあの花のように大きく咲くことができたのだろうか。いや、もうそんなことはどうだって構わない。私のすべては私が決めたのだから。

「結華^{ゆづか}さん、食事の用意ができました。起きてこられませんか？」

「いえ…食欲がありませんから…今は結構です」

「ですが…朝も…いえ、昨夜も何も召し上がってはいないでしょう？ 少しでもいいので手をつけてくださいませんか？」

扉の向こうで遠慮がちに言う、その言い回しが気に入らなくて私は部屋から出る気にすらなれなかった。世話係として連れてこられたメイドの彼女は「私の心配」ではなく「私の世話ができない」「ことを気にしているのだ。」

「気が向いたらただきますので、置いておいてください」

おそらく私の心中など察していないだろう、ここに置いてますのでというと早々と廊下へ消えていった。どうせ言われたとおりには作られた料理、そして言われたまま運んできたものに興味もなければ期待もしていない。

私は渋谷ベッドから立ち上がり扉を開けて隣のリビングに出た。テーブルの上には何人前なの？ と聞きたくなるような量の料理が並んでいた。

とても食べる気にはなれない、かと言って処分するのも面倒だ。結局手付かずのそれはまた時間が来れば誰かが下げに来るだろうと、再びベッドルームに戻った。

祖父の別荘に来たのは今から一ヶ月ほど前になる。

私が両親に「行きたい」と頼むと、今は使っていないからダメだと断られた。それで諦められるはずもなく私は条件を出して無理やり承諾を得た。

これでひとりになれると思ったのにそんなに甘くはなかった。両親はシェフとメイド、執事の三点セットを用意して送り込んできた。おかげで私は二階から出る気になれず、リビング・書斎・ベッドルームが扉続きになっている一番広い部屋に閉じこもる羽目になった。

もともと外出する気はなかったし別荘でひとり、何をするわけもなく過ごす予定だったのだ。それなのに誰かがいては監視されているようで気が休まらなかった。

ベッドに横たわっても眠れそうにない私はバルコニーへ出て外の空気を吸いソファに座った。

青い空を見ていると心が落ち着いた。

だが、同時にいろんなことが思い出されて結局のところ落ち込むことになるのだが。

彼はどうしているだろうかと、ふと気になる。

私には彼のことを考える権利はない、彼から逃げ出したのは私のほうなのだから。

私は、私の責任をすべて投げ出してここに来たのだから、そんなことすら考えるのはお門違いだ。

彼と最初に会ったのもこの別荘だと覚えていた。まだ小さい頃だったが、その頃は祖父も生きていて毎年夏になると避暑と称して家族で集まった。祖父は現役を引退していて会長職に退いていたが、慕ってくれる人が多く、家族の集まりと言っても結局は横の繋がりを求めて一族が集まってしまふのだが。

その日立食パーティーが行われるということで庭続きになっている一階のリビングに顔を出した。私と同じ年頃の子どもは少なく、兄弟さえいぶん大人に近かった。

やっぱり退屈だ、そう思っていると見たことない少年 いや青年と言ったほうが正しいか が目に入った。兄弟なのだろうか歳は近い感じだが雰囲気はまるで違っていた。

栗色の髪はクルンとカールしていて黒目が渋い緑色でとても日本人には見えなかった。彼らは祖父らしき人に連れられて私の両親と祖父母に挨拶をしていた。目が合ったとき微笑まれて思わず目を逸らした。それが出逢いだった。

大人たちが会話しているとき、私は目の行き場に困ってそわそわしていた。ドキドキしていてこんな気持ちは初めてだった。もしかこれが初恋というものなのだろうか？ そう考えていると彼は私の前に歩み寄り自分の名前を名乗った。そのとき私の想いは無残にもへし折られたのだ。

「はじめまして、来栖くるすたかふみ貴史きふみです。よろしく、結華さん」

「え？ じゃあ貴方が私の…？」

誰も頼んでいないのに、生まれたときから決まっている婚約者だった。

梅雨が明けたからかバルコニーを通っていく風が気持ちよく、いつの間にかとうとうとしていたようだ。子供の頃、彼に出会った頃の夢を見ていた気がする。

ああ、あの頃はまだ良かった。
何も知らないふりをしていればまだ救われたからだ。

ぼんやり空を眺めていると扉をノックする音が聞こえた。手をつけていない食事を取りに来たのだろうか、メイドと顔を合わせるのは億劫だと思つてベッドルームに入ろうとしたとき、扉越しに用件を伝えてきた。

「結華さん、お客様がお見えです」
え？ 客が来た？ 誰が、どうして？

ここに来ていることを知っているのは両親と姉、それとあの人のだけだ。身内なら「客」とは言わないはずだ。ではあの人に来たのだろうか？ いや、そんなはずはない。ここへ来るとき居場所は教えたが会わない約束をしたはずだ。

「入っていただいてよろしいですか？」
「え？ ちょっと待って。そこにいるの？ 誰か訪ねてくるなんて聞いてないわよ」

焦っていた。そのことが声に出していたのだろう。私の声を聞くなり「やつぱり、いるんだ」と言つて不躰に扉を開けた。それは聞き覚えのある声、見覚えのある顔。

どうしてここにいるのだろうか？ それ以外のことは何も思い浮かばなかった。涼しげな笑顔を向け立っていたのは紛れもなく「元」婚約者だった。

「どっ…どうして、ここにいますかっ!？」

明らかに動揺していた。無理もない、彼はここに私がいることを知らないはずなのだから。両親が伝えたのだろうか、いやまさかそれはないだろう。婚約を破棄したのは私のほうで両親も彼には顔を合わせにくいはずだ。では、あの人が？ まさかそれはないと信じたい。

あれこれ考えている私を横目にすたすたとバルコニーへと足を運んだ。さも自分の部屋かのようにソファに座るとメイドに「お茶を頼むよ」と言っ出て行くよう促した。

待て、ふたりきりにされても困る。今さら何も話すことなんてないのだ。だいたいこの人は何の用があつてこんな山奥まで足を運んだのだろう。

「久しぶりだね、結華さん」

「ええ、そうですね…」

もちろんその後の言葉は出てこない。彼はとりあえず座ればと合図する。当然の訪問にすっかり相手ペースだ。立っいても仕方がないのでとりあえず正面に座る。何よりも立っているのが正直辛いのだ。

帰って欲しいがそうも言えずお互い黙ったまま。しばらくしてメイドが入ってきた。ティータイムのためかワゴンの上にはアールグレイティーと焼き菓子が乗せられていた。今の私にはその強い香りが耐え難い。顔を背けテーブルの上と彼を見ないような姿勢になった。

「わざわざ来たと言うのに、その態度は冷たいんじゃないの？ 仮

にも元婚約者なんだし。もう少し嬉しそうな顔をしてくれてもバチはあたらなと思うなあ」

「私は、元婚約者に平然と会えるほど凶太くはできていませんので……できない相談ですわ」

こんな言い方しかできない。いや、こんな風にしかできなくなつてしまったのは紛れもなく彼の所為だと思つのだが。彼もまた本心はまったく読めない。

「それにお忙しいんじゃないんですか？ 貴史さんは役員になられたと聞きました。こんなところで油を売ってないで会社に戻られたほうが有意義に過ごせますよ」

一度口を開いたらもう止まらない。言つてはいけないと思つほど嫌味しか出てこない。それでも、どんな形でもいいから彼がここから立ち去つてくれれば私はそれでいい。

「僕のことなら気にしてもらわなくてもいいよ。会社には言つてきてあるし、それに今は休暇中だ。僕がどこで何をしようが君にとやかく言われる筋合いはないと思つけど？ たまにはこんな静かなところでのんびりするのも悪くない。ああ、そうだ。部屋空いてるよね？ メイドに言つて用意させて、僕が泊まる部屋。とりあえずベツドルームがあればいいから」

あまりにもさらさらと言つので内容を理解するのに時間がかつた。

え？ 泊まるって？ ここに？

私の頭は混乱していた。一秒でも早くいなくなつて欲しいのに彼は帰るつもりはないということか。ダメだと言つたら諦めてくれるだろうか。そう顔に出ていたのか彼はたたみかける。

「ああ、ダメとか言つても無駄だからね。ここに泊まることは許可

を得てるから。君に帰れという権利はないはずだよ。ここは君の持ち物じゃないんだからね。そういうことでよろしく」

許可を得てる？ では祖母のところへ行つたのだろうか。先ほどからほとんど表情が変わらないため彼が何を考えているのかわからなかった。とりあえず私に決定権はないようだ。観念して部屋を用意させることにした。

「大丈夫、もう婚約者じゃないから何もしないよ。安心して」

「あ、当たり前ですつ！！！ そ、そもそも貴方が言い出したんですよつ！！！」

「ああ、あのこと？ それは君だって同じように思っていたはずだよ？ 結華さん」

凶星をつかれてそれ以上反論することは拒まれたような気がした。

小学校に上がった頃だっただろうか、両親に連れ立たれて祖父母の家に向かったのは。母の実家 父が婿養子なのでつまりは本家は地元でも有名な名家だ。母は四姉妹の長女で結局男子に恵まれなかったため父が婿として跡を取った。私には兄がいるから跡を継ぐことは回ってこない。幼心にそう思った記憶がある。最初に男子が産まれて母はホツとしたことだろう。

兄妹とは十歳以上離れていた。このころもう兄は成人していて姉も大学生だった気がする。祖父母の家に行くときに兄妹が揃ったことはないが、この日は別の雰囲気を感じていた。

部屋に入ると「よく来たね」といつものような挨拶を交わしたが両親は違っていた。何か大切な話があるのだらうと察することは容易だった。ここにはいけないのではないだろうか、そう思った

が「今日は結華に話があるんだよ」と言われ驚いた。

「おじいさま、なんででしょう?」

「結華、学校は楽しいか? 何か困ったことはないか?」

そんなことを聞くためにわざわざ呼んだわけではないだろうと思っただが質問には答えた。

「とくにありません。先生もお友だちもよくしてくれます」

「そうか。家庭教師がいると思うが、そちらも問題ないか?」

「はい、とてもいいねいに教えてくださいますので、だいじょうぶです」

この頃私には家庭教師がついていた。と、言っても一般的な勉強を教えるわけではない。この家、長谷家のすべてを教えられていた。古い歴史から現在まで。とても小学生に理解できるはずもないだろうが、物心ついたときから周りがいろいろ噂しているのを聞いているから漠然とわかる。

「そうか、ならわかるな? 結華にも決まった相手がいることを理解しているな?」

黙ってコクツと頷いた。反論しても仕方がないことだ。古い歴史の中で嫁ぐ先は産まれる前から決まっていることを。自分に婚約者がいると言う事実を、子供ながらに知らされたのだ。

特に驚きはなかった。

ようやくこの日が来たのだと実感しただけで、それ以外は何も変わらぬ。

実際、婚約者の存在は知らされたが顔を合わせたわけでもないし、相手のことは何もわからない。ただ名前を聞かされて、どういう家に嫁ぐか、それだけは理解できた。

「相手は来栖家の次男、貴史君だ。我が家にとって来栖家がどういう存在かはわかってるね？ 顔見せはまた機会を設けることにしよう。結華、お前も今までどおり長谷家の人間として恥をかくことがないように気をつけるんだよ。わかったね？」

それだけ伝えると私には用がないのか、両親と別室へと消えていった。仕方がないので庭に出て祖父が飼っているシェットランド・シープドックのレオンと遊ぶことにした。と、言ってもただ横に座ってぼんやり景色を眺めているだけなのだが。

婚約者か、と考えるだけで憂鬱だった。

自分の決めた人でなければ愛があるわけでもない。お互い家のために結婚するのだ。時代錯誤もいいところだと思いが誰も反論しないからその風習は変わらない。

昔は婚約の儀を幼少の頃に済ませ嫁ぐほうは相手の家に住み、そこから学校に通ったり稽古を習っていたりしたそうだが。だから他の人と恋をする間もなく何も不思議に思わずに夫婦となったのだろう。

相手がどういふ人かは興味がもてなかった。

それはおそらくお互いさまだろう。相手もこちらの家庭事情は把

握しているだろうし私も同じだ。

来栖家は長谷家と同じく名家であるが本家ではない。時を重ねていくうちに幾らかの分家ができた、そのうちのひとつに過ぎない。ただ戦前までは華族の称号を受け継いでいたのでいまだにその名残が残る。

来栖家は医療系を得意とする家系で新規事業が好調らしく、うまく長谷家に取り入った形だ。こちらも土地や人材は豊富にあるから利害は一致する。それを確固たるものにするため婚姻を結ぶのだろう。

おまけに私は長谷家の次女で、ともすれば行き先が決まらない場合もある。両親から見れば早々に引き取り先が見つかって安心、といったところだろう。所詮私は駒なのだ。

自分の育った環境の所為か幾分冷めていて、立場を冷静に分析していた。だから自分は間違っても恋なるものに落ちるなど夢にも思っていないかった。

「それにしても婚約破棄だなんて驚いたよ。まさかそれが聞き入れもらえるなんてね。だったら僕のほうからもっと早くに言えばよかったよ、だったらこんなに気分を害されることもなかっただろうし。君のほうはさぞかし気分爽快だろうね？ ああ嫌味を言ってるわけじゃないよ。ただ想定外だったもんだからね、僕の立場を考えて欲しかったなあ……ってね」

ここは黙っておいたほうが身のためかもしれない。反論する気も言い訳する気もない、それよりも気分が悪いのだ。早くベッドルームに戻りたいがそう言うわけにもいかないだろう。

「私との婚約がなくなつて清々したんではないですか？ こちらの勝手であつてしまつたけれどお互いの為にはこのほうが良かったんですから。さうでしょう？」

「それは結果論だろう？ 君には結局人を思いやる心がなかつた、つてことになるのかな？ 長谷家の人間ともあるう君がまさかそんな人だつたなんて、がっかりだよ？」

「そんな思つてもいないこと言つていただけなくて結構ですわ。貴方は最初から私には何の期待もしていなかつたでしょう？ がっかりだ、なんておっしゃらないでください」

売り言葉に買い言葉もいいところだ。だが、お互いが婚約者だという立場で知り合つてからこれだけは変わらない。変えることができなかつた。

彼の本心はわからない。今言つていることが本音なのかもしれない、でもただの嫌味にも聞こえる。私の頭が都合よすぎるのだろうか？ たとえ気持ちが悪くても嫌われたくはないとどこかで思つているのだろうか。いやそれはないと首を振る。私の想いは別のところにある。

「さうだね、僕は最初から君に期待なんてしていなかった。そもそも親の決めた相手なんて僕は認めない、認められないんだから」

この男はまだ言うのか。

最初に紹介されたときも笑顔で同じことを言つてのけた。それは私だつて同じだと言おうとしたが、いつても始まらないと言葉を飲み込んだ。

あのときの彼の顔を今でも覚えてる。なんて自分勝手な男だろうと内心腹が立っていた。幸い両親や祖父母はその台詞を聞いていなかった。彼が聞こえないようにしたのだろう。ので、そのことを知っているのは私たちだけだ。

とはいえ、婚約を解消した今となってはどうでもいい話だ。これ以上言い合いをしても疲れるだけだと私は再び黙り込んだ。

「結華さん、そろそろお時間ですが…どうされますか？」

会話が途切れた頃メイドが入ってきた。いつもなら煩わしい彼女もこの状況だと味方に見える。そしていつもはこの時間が一番憂鬱なのに、ひとりになれるのかと思うと心が弾んだ。

「すみません、貴史さん。人が来ますので席を外していただけますか？ ああ、お泊りになるのは結構ですがあいにく私はお相手できません。何かありましたら執事かメイドに申し付けください。それと日中は一階のリビングをお使いください。どうしても私に話があるときはそちらで伺いますので」

滞在することは拒否できないが顔を合わせたくないと言えば彼も首を縦に振るだろう。さして興味のない顔をして「ああ、そう」とだけ返事をした。

まさか彼が一ヶ月もの長期休暇を取っていることなど、このときは知る由もなかった。

「気分はいかがですか？ 何かありましたら言ってください。くれぐれも安静にお願いしますよ」

主治医は何度も念を押すように言つとベッドルームを出て行った。右手首の辺りに刺された針は痛みを感じていたがそれももう慣れた。少しずつ落ちてくる点滴を見つめながら時間の長さを感じていた。

安静につて…この状態でどうしろと？

点滴が楽なのも最初のうちで一時間もすれば体がだるくなる。終わるまで軽く三時間はかかる。気分は落ち込むし次第に吐気が襲ってくるので憂鬱で仕方がなかった。

だがこれを拒むわけにはいかない。

一ヶ月前、ここに来ることを許してもらつ条件の一つとして「治療すること」を提案された。それを拒めば家からは出さないと言われ渋々承諾した。

「えっ？ もう一度…お願いします」

「ええ、ですからがん細胞が見つかりました。結華さんの場合子宮体がんです。それもかなり進行が進んでいると考えていいでしょう。もう少し詳しく検査してみないとなんとも言えませんが…かなり悪化していると考えてください」

少し前から体調が悪くないと思っていたため主治医に相談していた。

もともと生理不順だったため産婦人科にかかっていたのだが、最

近は問題なさそうだったので病院から足が遠のいていた。ところが月経にしては間隔が短いと思い始め、徐々に腰まわりが痛み出した。立ち上がるうとしたときなど激痛が走るので、これはいかなものだろう？ と再び来院した。

主治医は最初の診察のときに顔をしかめた。そして難しい顔で「詳しい検査をしましょう」と言ったのが二週間前。そして思いもよらない台詞を聞かされたのだ。

「来週、超音波とCT、MRIの検査を予約しておきますので詳しいことはその後で説明します。すべての結果が出ましたらご両親にも説明しますのでそのつもりで」

主治医の言葉は耳に入ってこなかった。

まず気になったのはがんの進行度よりも自分がこの先子供を産めるかどうかだった。

手術はするだろう。それがどの程度のものかわからない。

仮に子供が産めない体になったら…おそらく婚約は白紙に戻るだろう。そして私は永遠に行き場を無くしてしまう。そのことが急に恐くなった。

だが、検査が終わってみると考えていた以上に事態は最悪の方向へと向かっていた。

「思っていた以上に進行が早いです。リンパ節への転移も確認されましたので、外科手術は困難な状態です。放射線と抗がん剤治療で様子を見ていくしかないと思われます」

「それは…もう治らない、と言うことですか？」

「完治は難しいと思います。治療の効果は人それぞれですのでなんとも言えませんが、最悪の場合も考えていてください」

「そうですね。では、私は…後どのくらい生きられるのでしょうか？」
間があつた。私の態度が冷静だからだろうか迷っているようにも見える。せひとも教えて欲しいと、主治医の目をまっすぐに見た。

「…半年、ということでしょうか」

気が付くと点滴は三分の一ほどになっていた。眠っていたなんて珍しい、よほど彼との一時が疲れを誘発していたのだろう。誰も来ない今の時間は痛みに反して幸せな時間だった。

しかしそれもすぐに主治医の登場で壊される。不意に溜め息が漏れた。

「なんですか？ 溜め息なんて吐いて。気分はどうですか？ どこか気になることは？」

「…特には」

「そうですね、では針を抜きますね。そういえば結華さん、食事されてないってシェフが嘆いてましたよ。せっかく作ってくれてるのだから食欲がなくても一口くらい食べないと失礼ですよ。みんな心配してますよ」

みんな、という台詞に引っかけた。誰が心配しているというのだろうか。

ここにいるスタッフは父に言われ仕事だからと割り切っている。祖母は何も知らないから仕方ないとして、両親は私がここに来てから一度も顔を出したことがない。使えない私に割く時間も興味もないのだ。唯一心配しているとすれば目の前の主治医だろうが、それは医師としての責任があるからだ。

「先生に心配していたただかなくても結構です」

「そうもいかないですよ、ご両親から任されているんだから。心配してましたよ？ まあ経過は私のほうから報告させてもらってるのでいいんですが、たまには連絡してあげてくださいよ」

「どうして、私から…そもそも心配だと言うのなら見舞いに来ればいいだけのことでしょう？ それをわざわざ先生から聞き出すなんて…なんとも思っていない証拠じゃないですか。放っておいてください」

ベッドに潜り込み早く帰れと意思表示した。だがそれくらいで引き下がるような人ではない。私の治療をしていてこんなことは日常茶飯事なのだから。

「そういえば今日は珍しくお客さまが来てましたね。なんでも結華さんの婚約者だとか？ こうやって見舞いに来てくれるなんて優しい彼じゃありませんか」

「かつ…彼は、元、婚約者ですっ！！！ それに優しくもありません！！！」

「そんなことないでしょう？ 私の顔を見て、先生結華がお世話になってます、今日もよろしくお願ひします、って言われたんだから。気になって仕方がないんですよ」

思わず主治医のことを凝視した。

何か聞き逃してはいけないことをさらりと言っただけのけた気がしたからだ。

どうして彼はそんな風に言ったのだろうか？

この人が主治医だと、私がここで治療していると、それを知っていたのだろうか。

彼の意図が読めない

私の頭は少々混乱気味だった。

その日の夕食は彼に付き合わされた。

と、言っても私は食欲がない。先ほどまでの点滴が効いてきてもそんな気分になれなかった。それでも失礼があつてはいけないと吐気止めだけは飲んでおいたが。

彼は黙つたまま食事をしていた。こんなことなら私を呼ばずひとりで食べればいいのに、食べようとしない顔色の悪い女を目の前に置いたところで気分を害すだけだろう。どうも彼の意図が読み取れない。

仕方なくスープを一口飲んでみたがやはりそれ以上は進まなかった。

「そう言えば、おじさんはここには来ていないんだつてね？ まあ忙しいから無理もないのかなあ？ それにしても娘をこんなところに置いてても気にならないなんて…僕には信じられないなあ。それより結華さんはいつまでここに居るつもり？」

「ちつ…父は…仕事が一番ですから。それに、貴方には関係ないことでしょうか？ 私のことと私の家のことも放つておいてください」
では、と言つて席を立つた。これ以上同じ空間にいるのは息が詰まりそうで耐えられそうにない。それに一刻もひとりになりたかつた。父のことを聞かされるのは、彼といることよりも不愉快なことだったからだ。

「結華、来栖家との縁談だが解消された。今後のことは主治医と相談して決めるとしよう」

治療計画が立てられる前、父に呼び出された私は結果だけを聞かされた。

私と彼のいないところで話し合いがされたのだろうと容易に想像できた。婚約も解消もすべて本人たちの知らないところで交わされる。私たちの意志など何も取り上げられず、お互いの利害だけで動く人たち。わかっていたが腹立たしかった。

だからだろうか、なぜか父に反論しなくなったのは。

「私：治療を受けるつもりはありません」

「何を言ってるんだ、結華。そんなわけにはいかないだろう？ ちゃんと治療してくれないと困る。それに治療せずにどうするんだ？

結華がゆっくりと治療できる病院は手配してある。少し狭いが特別室を用意してるんだ、いやだと言うなら理由を聞かせてもらおう」
父の手回しの良さに驚いた。いや、私が侮っていただけでこの人ならこの程度の事は朝飯前なのだろう。私が治療しないと困るのは父のほうなのだ。もう私をこの家に置く気がない父は治療と称して私を引き取ってくれるところを探したただけなのだ。

父を納得させるだけの台詞は思い浮かばなかった。それでも思い通りになるのも避けたい。そこで無理を承知で提案した。

「あの、お祖父さまの別荘で過ごしたいのです。お願いします」

「あそこはもう何年も使っていないし、使用人も今はいないからダメだ」

「病院へは行きません。でしたら私はこの家を出て行ってひとりで過ごします。今までありがとうございました」

「結華、待ちなさい。別荘で…そこで治療すると言うなら使えるようにしよう。このまま出て行くことは許さん。いいか？」

交渉と言うより半ば強制だ。それでも私は条件を飲んだ。

今まで父に何か頼んだことも反論したこともなかった。最初で最

後の願いは聞き届けられたことになるのだろうか。このときはかりは勝ち取った気がした。

ただ実際に別荘へ入る日程が決まったのは二ヶ月以上経ってからだった。おそらく父も私の気が変わることを期待していたのだろうが、私は譲る気はなかった。

主治医と担当看護師が来ている以外はひとりで好きなように過ごせると思っていたのに使用人がいることで楽しみは半減してしまった。それでも家にいるよりはずいぶん肩の荷が下りた気がしていた。婚約を解消したことを知らない兄妹は「長い夏休みだ」と皮肉を込めて言った。言い返す気にもなれず大げさに笑顔を見せて家を後にした。

気分が悪いと目が覚めたのは明け方、四時頃だった。

珍しく長く眠れたほうだと思ふ。抗がん剤を点滴した夜は強い吐気に襲われてなかなか寝付けず、仮にうとうととしてもすぐに痛みが私を苦しめる。

実際には何度か目を覚ましているのだろうが覚えていないだけだったようだ。サイドテーブルに置かれていた水は半分ほど減っていた。途中私が飲んだ証拠だ。

真つ暗な部屋で体を起こそうとしたとき不意に気配を感じた。目が暗闇に慣れていないためか顔がぼんやりとしか見えない。だが、使用人でないことだけはわかった。と、すればひとりしかない。

「…何してるんですか？ 貴史さん…」

「あれ、ばれちゃった？ 結華さんって結構無用心だよ、部屋の鍵開いてたよ？ 眠れないからさ、話相手にでもなってもらおうと

思ってたね。ノックしたんだけど返事がないから戻ろうとしたんだけど、扉が開いたからね。思わず入ったはいいけど寝てるもんだから起こすわけにいけないし、そのうち起きるかと思ってたんだけど……ほんと、警戒心が薄いよね」

こんな状態でも軽口を叩ける彼が少々羨ましく思えてきた。

鍵をかけていないのは治療があった日だけだ。夜中に何かあっても使用人がすぐに入れるようにするためだ。そもそも彼が来るまでは鍵の心配などしていなかった。気にしなくても誰も入ってこないからだ。

「それで……ずっと起きて私のことを見てたんですか？ 結構悪趣味ですね。気が済んだのならご自分の部屋に戻ってください」

「まあ、言われなくてもそうするよ。もういいみたいだし。じゃ、おやすみ」

結局何をしていたのかわからないままだった。

彼が私のことを心配して様子を見ていたと知るのはもっと後になつてからだった。

薬の副作用の所為か、彼に対する気疲れのためか、私は一週間ほど熱にうなされほとんど起き上がることができなかった。昼間少し熱が下がり、また夜になると体調を崩すといった感じだ。

その間彼の顔を見ることがなかったので帰ったものだと思っていた。気分も良くなり主治医も「もう大丈夫でしょう」と診断したので久しぶりにバルコニーへ出た。少しだが食欲が出てきたので軽食を持ってきてもらうことにした。

「来栖さまでしたら、まだいらっしやいます。毎日午前中はお出かけされていますが、午後には戻ってお部屋で仕事をなさっているようです」

彼はいつ頃帰ったのかと尋ねると予想外の返事が返ってきて困惑した。

まだここにいると言うのだ。しかも部屋で仕事をしている？ やはり忙しいのだ、だったら帰ればいいのと思う。その会話を聞いていたのかと思うほどタイミングよく彼は部屋に入ってきた。

「結華さん、気分が良くなったんだって？ あ、そのサンドウィッチおいしそうだね、僕にもちょうだい ああ、それとコーヒーいれてくれるかな？ もちろんブラックでね」

「か、勝手に入ってこないでください！！！　そもそもどうしてまだここにいますか？　って、人の話聞いてください！！！」

彼は私の話を聞く気がないのか、コーヒーを持ってきたメイドと楽しげに話していた。ここへ来たときはメイドも難しい顔をして彼に接していたのにいつの間に打ち解けたのだろう。

いや、私が寝込んでいる間はいくらでも時間があつただろう。それにしても私に対する態度とは大違いだ、ふたりとも。私に対する嫌がらせなのだろうか。せつかくの食欲も失せてしまいそうだ。

思わず漏れた溜め息を聞き逃さなかつた彼はメイドに席を外すよう指示した。これでは誰が主人かわかつたものじゃない。

「…貴史さん、お仕事忙しいんでしょう？ そろそろお帰りになつてはいかがですか。部屋で仕事するくらいなら会社へ戻つたほうが都合がいいでしょう？ ご自身の会社のことが気にならないんですか？」

「君も意地悪な言い方をするね、僕は一役員であつて会社は「僕」の会社ではないよ。それくらい知つてるだろう？ それに仕事をことを気にしてもらわなくてもいいし、第一、あつち兄さんがあるから僕はいてもいなくてもどちらでもいいさ。僕の役割なんてたかが知れてる」

兄の名前を出す羽目になつたからか、彼にしては投げやりな言い方をした。

彼が勤めている会社は来栖家が経営する医療系の会社だ。

彼には兄がいて次期社長候補として勤めている。それに対して貴史さんはこのまま役員でいるか子会社のひとつを任される程度だろうと噂で聞いたことがある。

ここへ来る前、兄の裕臣ひろみさんが専務に昇格したと聞かされた。しかも本人から。

そう、私はここへ来る前に裕臣さんに会つた。どうしてもあの人にはだけは会つておきたかつたから。

「久しぶりだね、結華ちゃん。ちよつと痩せた？」

貴史さんとの婚約が解消され、来栖家に入入りしなくなった私はおそらく半年振りくらいに裕臣さんの顔を見たように思う。相変わらず優しい声で私を「結華ちゃん」と呼ぶ。それが心地よかった。が、すぐに我に返る。今日は大事なことを伝えなければならぬ。そしてそれが何を意味するか、昨夜はそればかり考えていてほとんど眠れなかった。

「裕臣さんこそ顔に疲れが出ていますよ？ 忙しいんじゃないんですか？ なのに来てもらって…ありがとうございます」

「いいんだよ、たまには息抜きしないと参っちゃうからね。それに基づいぶん結華ちゃんが家に来てないから気になってたんだ。貴史とはどう？ うまくいってる？」

やはり何も知らないんだと思った。貴史さんも私との婚約が解消になったことを話してないらしい。もともと兄弟の仲が良いわけではないので当たり前と言えばそれまでだが。

まだ心の整理ができていない私は「まあ」とあいまいな返事をしただけで、裕臣さんの話に切り替えた。

「私たちより、裕臣さんはどうなんですか？ まだ結婚式はしないんですか？」

「そろそろ、とは思ってるけどなかなか忙しくてね。それに先月、僕が専務に昇格して今はそれどころじゃないかな。相手には待たせてしまつて申し訳ないと思ってるよ」

「え？ 専務に昇格されたんですか？ おめでとうございます、私つたら何も知らないで…」

「いや、今回の人事は役員会議で引継ぎだけして終わったからね。会社の連中もいつの間、って驚いてたよ。彼女もその辺りの事情はわかってるだろうから、何も言つてこないし。まあ、それに僕が甘えてるだけだね」

自分から振った話とはいえ、裕臣さんの相手の話は辛いものがあった。やはり無意識なのだろうが嫉妬に近い感情が沸いてくる。裕臣さんの相手が私だったら…と、ありもしない妄想を抱いてしまうのだ。

こんなに優しい人に愛される彼女とやらが羨ましくて仕方がなかった。私が病気にならなければ義理の姉となる人だが、今となってはそうならなくて良かったと思っっている。

仮に「お義姉さん」と呼ばなければなくなっても私は笑顔を向けられるか自信がなかった。

私の初恋相手は裕臣さんだった。

あの日、この人に心を奪われ、そして一瞬で叶わない想いだと突きつけられた。

婚約者の存在を知らされてからいずれ顔合わせがあるだろうと察していた。それもそう遠くない未来に。だからだろうか、お祖父さまの別荘で関係者を集めてパーティーをすると聞かされたとき、もしかしてこの日がそうではないのかと思った。

案の定、そのほとんどが大人たちばかりで目の前に現れた青年が私の相手なのだろうとすぐにわかった。だが予想外にも私の前に現れた青年は「ふたり」いた。

(なんてキレイな人なんだろう…)

栗色の髪に渋い緑色の瞳。

日本人とはかけ離れたその人を見たとき、私は初めて恋に落ちた。そして親が決めた縁談が、心無いものではなく愛しい人とのものであればどれほど幸せだろう、と淡い期待をよせた。

大人たちの意識がお祖父さまに向いたとき、そばにいたもうひとりの青年が私に声をかけようと近づいてきた。よく似ているが髪の色が少し黒い。そして瞳の色がさらに淡い色をしていた。

そしてその名前を聞かされたとき、私の心は一瞬で闇へと落とされた。

「はじめまして、来栖貴史です。よろしく、結華さん」

「え？　じゃあ貴方が…？」

眩暈がしそうなほど息苦しかった。私が心を奪われた人は婚約者ではなかった。

「…えっと、今お祖父さまと話してるかたは？　どなた？」

「ああ、あれは兄の裕臣だよ。何？　兄さんが気になるの？」

「そ、そんなことはありませんっ」

明らかに動揺していた。だが、彼にそれを見せることは許されない。

婚約者である彼に、私とその兄のほうに気を取られたなど、知られていいはずがないのだから。

「それにしてもすごい人の数だね。さすが来栖家と長谷家の顔合わせの場ってかんじ？　子供の婚約発表の場にしては大層だよ。ほんと、時代錯誤もほどほどにしてほしいっていうか。大人が考えることなんてわからないね」

「…それでも、仕方ないことですから」

「へえ、結華さんはずいぶんものわかりがいいんだね？　そう教育されてきたから仕方がないのかな？　もうちょっと大人になれば同じような疑問を抱くよ」

このときすでに高校生となっていた彼にとって私は子供であり、あからさまにこの顔合わせを嫌がっていることを匂わせた。私だつてそこまで子供ではない。疑問を抱いても反論する機会はなく理解しているふりをしなければ余計に辛くなるだけだったのだ。

なのに、彼はそれをあっさり認めてしまう。

「だいたい、僕は親の決めた縁談なんて認めない」

軽口を叩いていたときは表情が違っていた。

私に対して何か怨みでもあるのだろうかと思うほど、秘めた怒りを感じ取れる瞳をしていた。

恐かった。

初めて会ったはずの彼のことが無性に恐くなって、私はその場か

ら逃げ去った。

その背後で彼が静かに微笑んでいるようで、振り返ることはできなかった。

どうして、彼なんだろう。

どうして、恋した相手が婚約者ではないんだろう。

そればかりが心を覆いつくし、私は二度と彼に心を開くことができなかつた。

その後何年かは彼と会う機会がなかつた。

だから私も裕臣さんへの恋心は消化できていると思いつ込んでいた。幼い頃の淡い思い出、一時的に大人に見えた彼へ憧れの気持ちを抱いただけだと。

ところが高校を卒業する頃になって父が結納をする時期を持ち出してきた。

来栖家のほうもそろそろ、と考えているらしく私が口出しできるようなものではなかつた。結局いつも相談と持ちかけて事後報告なのだ。

そのとき初めて来栖家に足を踏み入れた。いくら抗ってもこれは変わりようのない事実で、ここが自分の嫁ぎ先なのだと思居を超えた。

「結華ちゃん、久しぶりだね」

たまたま廊下で鉢合わせた裕臣さんに声をかけられて私はドキツとした。あの日焦がれた想いはまだ私の中でくすぶっていた。そしてそれは彼に会ったことで徐々に燃えはじめていた。

そう、どうすることもできないのに。

恋すればするほど自分が辛くなるだけなのに。

義兄に想いを寄せて、愛のない婚約者と夫婦になる。

結納の儀、その最中私は彼の顔を直視できなかった。初めて会ったときに私を認めないと言った男。あれからあの言葉がどうしても許せなかった。

自分たちが望んだ結婚ではないのだから、それだけは言うてはいけない一言。なのに自分の気持ちだけぶつけ、私の気持ちは僅かにも考えてくれなかった彼をどうして許せよう。

彼のほうも終始不機嫌な顔をしていたと、後から耳にしたが当然だろうと思った。

それから事あるごとに来栖家に呼ばれたが、貴史さんと話すことはほとんどなかった。

代わりに裕臣さんがいろいろと気遣ってくれていたので、いつの間にか相談事を持ちかけるようになっていた。すると彼はいつも笑顔で返してくれた。

「貴史は結構頑固だからね、親父に似たのかな？ でもほんとはいい奴だから、結華ちゃんも気長に付き合っただけ。僕はこんなに可愛い妹ができるの、楽しみにしてるんだから。貴史と仲良くしてやって」

私の想いが届くことはなかったが、それが小さくなることもなかった。

日に日に募る想いをいつか断ち切らなければ、いつか裕臣さんにも迷惑がかかる。そう思っていた矢先、私は残酷にも余命宣告をされた。

だから最後に、私の想いを消化させなければと、あの日あの人だけにはすべてを伝えた。

「裕臣さん、私…もう長くは生きられません。明日、祖父の別荘へ
移り住みます。そこで最期を迎えるつもりです。あそこは私の思い
出の場所ですから…裕臣さんと初めて出会った場所です。あの日か
ら…私はずっと貴方のことが好きでした。好きになってはいけない
人なのに…でも私は貴方に会えて幸せでした。だから今日でお別れ
です、裕臣さん…ありがとう」

幸せになってね、そう心の中で呟いた。

あの日、すべてを断ち切ったつもりだったがそう簡単に切り替えられるものではなかった。

いつか裕臣さんが私を訪ねてくるんじゃないかと期待したりもした。だが、そのすべては私の願望であると同時に幻想でもあったのだ。

だから貴史さんがここへ来たとき、一瞬彼を裕臣さんと勘違いした。ここに私がいることを知っているのは両親と裕臣さん。だからなぜ貴史さんなのか見当がつかなかった。

「今日の夜は一緒に食事、できるよね？ さすがにこの一週間、ひとりで食事するのは寂しかったなあ。よく結華さんは平気だね？ 慣れってやつ？」

「…あいにく私は食欲がありませんので、おひとりどうぞ。それに…お相手はできないと申したはずですが？ それが気に入らないと言つのなら帰られてはいかがですか。だいたいもう一週間もここにいらつしやるでしょう？ 休暇にしては長すぎると思いますか？」
「あれ？ 言つてなかった？ 僕はとりあえず一ヶ月の休暇をもらつてるんだけど？ だからまだまだ帰るつもりはないから」

聞き間違えたかと思った。

一ヶ月も休暇？ どんな理由でそれが通つたのだろうか？

仕事の面では厳しいと噂がある裕臣さんでも、弟のわがままなら聞いてしまうということなのだろうか。もしくはここへ来ることを知っているから承諾したのだろうか。

「きつ…聞いてません!!! そんなことっ!!!」

「そう、じゃあ今言った。それに僕は相手して欲しい、って言った覚えはないけど。ただ食事は一緒にできるかって確認しただけ。どうせ結華さんも食べるんだから、それなら同じ時間に食べたほうが作るほうも一度で済むんだし。別に黙っていても僕はいつこうに構わないよ?」

正面に座っているだけでいいという彼の真意がわからなかった。

黙って食事するくらいならひとりほうが気が楽だと思うが、と言いかけて言葉を飲み込んだ。

実際のところ、私も一ヶ月ここにひとりでいるうちに寂しくなってきたのかもしれない。ずっとひとりならそう思わなかったのかも知れないが、一度誰かということに慣れてしまうとそうもいかないらしい。だから彼に口では「帰れ」と言ってもこうやって一緒に同じ時間を過ごしてしまう。

婚約時代はこんなに会話しただろうかと疑問に思う。あの頃はお互い目を合わせることも少なく、隣に座っていても会話は最小限、彼の笑顔など見たこともなかった。

それはおそらく彼もそうだと思うが、ふたりの間には常に見えない壁があるような気がして、お互い別の空間で生きている感覚だったのだ。

ふたりきりで過ごす時間がもっと昔にあったなら、私たちの関係は少しは違っていたのだろうか。いや、私が裕臣さんに心惹かれていた時点でそれは無理な話だったのだろうか。

ふと、彼はそんな私の行動や言動に気が付いていたのではないかと疑問が浮かんだ。今まで考えたこともなかったが、知っていたとしても不思議ではない。とはいえ確認することはできないが。

「ところで貴史さん：私がおりにいると、誰から聞いたんですか？
このことはごく僅かな人しか知らないはずですが」

「え？ ああ、それはまあ企業秘密ってことで。こう見えて僕は結構広いネットワーク持つてるんだよ？　あまり見くびらないで欲しいなあ」

「そうですか：近しい人から聞いたわけではないんですね？」

それに対して返事はなかった。

無言の肯定、と言うべきか。信じたくはないが裕臣さんが彼に話したと考えるのが妥当なようだ。私としてはもう一言一言嫌味っぽい言葉が返ってくると思構えていたから、彼の態度に面食らった。それ以上この会話は続ける気がないと無言の圧力を感じ、何も言えなくなってしまった。

いつもこうだ。一方的に会話を終了させてしまう。ほんの僅か、心の隙間を垣間見た気になってもまたすぐに閉じられてしまう。いつまでたっても彼の心は読めないままだった。

それから何日か、本当に黙って向き合うだけの食事の時間を過ごした。私がおか話し出すまで彼は黙って食事をし、適当な時間に部屋に戻っていた。

しかしそれも時間が経つにつれ少しずつ変化してきた。彼のほうから話しかけてくれるようになっていたし最初ほど嫌味っぽい言い方もしなくなっていた。食欲こそなかったがイスに座って彼の顔を正面から見ていると、今まで知らなかった彼の一面が見えてきたような気がした。

「結華さん、散歩にでも出かけない？」

ある晴れた日の午後、彼が唐突に部屋に入ってきたかと思うと誘うような口ぶりで私を見た。

「いえ：さすがに散歩は無理かと：せっかく誘っていただいたのに、

すみません」

「ええ？ 誰も歩けなんて言わないよ？ ほら、そこに車椅子があるからそれに乗って。僕が後ろを押していくから、それなら問題ないだろ」

車椅子は隠していたつもりだった。

彼の言葉に一瞬動揺したが、そういえば夜中寝ている間に何度か出入りしていることを考えれば、その存在に気が付いていたとしてもおかしくはない。

半ば強引に私は外へ連れ出された。ここへ来て実に一ヶ月以上家の外に出ていないことを実感した。来た頃はまだ初夏の陽気で風もいくらか冷たく感じていたのに、今では少し汗ばむ陽気だ。

どこへ向かうとも告げず、彼は無言で車椅子を押し続けた。前にいる私は彼の顔を見ることもできない。たとえ見ることができても何を考えているのか読み取ることにはできないだろうが。

別荘が立ち並ぶ舗装された道路から離れ、辺りは草原が広がりにつあった。横切る風が夏を乗せてくる。青い空の下黙々と歩きやがて民家が見えなくなつた頃「着いたよ」と声をかけられた。

目深にかぶっていた帽子を上げると視界の先には、懐かしい景色が広がっていた。

『向日葵畑』

幼い頃ひとりよく遊びに来ていた場所だった。

この日の向日葵畑はまだ茎が細く花も小さく咲いていただけだった。もう少し暑い日が続けば大きく、そして空へと向かう花が咲き乱れるだろう。

ただ、私としては懐かしい気持ちが増えて花の状態は正直気にならなかった。少しでもあの太陽に近づこうと必死に背伸びしている姿をじつと見ていた。

幼い日もこうやって黙って見上げていた。向日葵の花は私になど興味がなくなただただ青い空を求めていた。それが自分自身と重なって同じように太陽を見つめていた。

兄妹と歳が離れている所為かほぼ一人っ子のような扱いを受けて育てられた。

身内に同世代の子供は少なく、小学生になるまでひとりで過ごす時間のほうが長かったような気がする。母はずいぶん私のことを可愛がっていた。いや、今にして思えばあの可愛がりようは自分の子供に対するものではなく、新しいおもちゃを与えられた少女のようだったのかもしれない。

私に嫉と言えるような行動をとることもなく、ただ自分の欲望をぶつけていただけだ。私は母の「お人形」だったのかもしれない。

母は言うなれば「専業主婦」であるため家で過ごすことが多い。おまけにその家には使用人が何人が住み込んでいる。そのためか特にすることもなく時間を持て余している母はお祖父さまの別荘によく出入りしていた。そして私は当然のように頻繁に連れてこられた。兄妹が忙しいから私はちょうど良かったのだと、母の口から聞いたことがある。

しかし最初こそ相手になつてくれるものの、次第に大人たちの会

話に入れなくなる。頃合を見計らって私は誰に声をかけるわけでもなくその場を抜け出す。ここへ来た頃は物珍しいものがたくさんあり退屈もしなかったが、回数を重ねるうちにすることもなくなる。そうしてあの日、はつきりとした目的はなかったが外へと歩き出した。

大人たちは集まるとすぐに近況を報告しあう。そしてお世辞を言いながらそれでも自分たちのほうが上なんだと言わんばかりに自慢する。子供の私には正直どうでもいい世界だった。

周りの大人たちが私を見る目も何を意味するかわかっていたし、末妹になど興味が薄いだろうことも知っていた。だから私が姿を消してもすぐに気が付く者がいないことも納得できる。

「あー、たいくつー!!! 何かおもしろいことないかなあ」

別荘を抜け出し誰もいないことを確認すると大声で叫んでみた。

これが案外気持ちよく、自分が今まで抑圧された空間で育ってきたことを実感した。

何か物珍しいものはないかと歩いていたが、舗装された道路脇に整然と並ぶ別荘が見えるだけで興味を惹くようなものはなかった。それでも私には「帰る」という選択肢はなくどんどん進んだ。

やがて舗装された道路が途切れ、農道に変わり辺りは別荘どころか民家すら見えなくなった。目の前に広がるのは青い空、緑の草原。山の上のほうでは鳥の鳴く声が響いている。

そうしてたどり着いたのが「向日葵畑」だった。

誰かの手入れがされてあることは一目瞭然だった。

雑草はキレイに取り除かれ、向日葵の花は一直線に並んでいた。中へ入ると茎に囲まれ花の先がどうなっているのか良く見えなかった。思わず「わー、すごいっ!!!」と叫んだ。

大きな花びらは傘の役割を果たしていて、太陽は見えなかった。それでもこんなに関近で見る向日葵の大きさに感動して空を眺めていた。

以前姉に読んでもらった絵本に「ひまわりは太陽に恋をしている」というエピソードがあった。そのときは良くわからなくて姉にどういふことが問い詰めた気がする。

でも今目の前で見ていると、その意味もなんとなくわかる気がする。すべての花が我先にと背伸びをしているのだ。恋しい太陽に少しでも届くように。

その姿が自分に似ていると思った。

両親や兄姉に認めてもらいたくて背伸びしている、でもあの人たちは私ひとりだけを見ることはない。多くの人にとっての太陽であるあの人たちは私だけのものではないのだ。

今頃私がいけないことに誰か気が付いているだろうか。母は私がいなくなつて心配しているだろうか。そう思うと突然笑いがこみ上げてきた。なんて子供らしくない発想だろうか。

「あはははははー」

次の瞬間、ガサガサつと花が揺れる音が聞こえてきた。誰かいたのだろうかと思つたが姿は見えなかつたので何かの動物でも迷い込んでいたのだろうかと気に留めなかつた。

日が沈みかけた頃、遠くで私を呼ぶ声が聞こえてきた。

ようやく探し出すことができたようだ。最初に私の姿を確認した

のが誰なのかわからなかったが、その集団の中に母の姿がないことだけはわかった。結局、こんなときでも人任せなのだと言いついた。

別荘ではお祖父さまが心配していたようで「無事でよかった」と抱きしめられた。母は私に声をかけることもなくずっと不機嫌な顔をしていた。家に帰ってから怒られたのは母のほうだったようだ。よほど気にいらなかったのか、それ以来私を連れて出かけることはなくなった。

「…キレイね」

「気に入ってくれた？ この間ちょっと散歩してたら見つけてさ、ずっと部屋にこもって出てこない結華さんに見せたら喜ぶだろうと思ってる。驚いた？」

驚いた。

いや、ちょっと散歩で見つかるような場所ではないだろうし、そもそも私のため、とか言う彼が気持ち悪い。昨夜何か変わったものでも食べたのではないだろうかと思ってしまう。そうしていつものごとく心を読まれたようだ。

「今、気持ち悪いと思った？ 大丈夫、何も変なもん食べてないから。いたって正常、いつもどおり。僕もここへ来てちょっと心が広がったみたいだよ？ やっぱり都会で人混みにまみれて暮らしていると性格歪むかもね。こんな田舎でのんびり過ごすのも悪くないかも。休暇の延期届け、出してみようかなあ」

「や、やめてください…」

「あはは、冗談だよ。気が済んだら言って、連れて帰るから」

いつもと違つと調子が狂つ。そんな風に笑わないで、とそれ以上
顔を見ていることはできなかつた。

ただ向日葵の花だけを見ていた。その背後から感じる気配はまるで別人のようだった。

私の知っている貴史さんではないような気がする。そもそも私は彼のことをどれほど知っていただろうか。彼が何を望み、何を欲しているのか。今まで知ろうとすらしなかった自分。

彼に拒絶されていた十数年、もしかしたら拒絶していたのは私のほうだったのかもしれない。

(いまさら、そんな顔しないで…)

優しく微笑まれると、まるで私が意地悪な人になったような気分になる。いや、そんなことないと思いを改める。最初に攻撃を仕掛けてきたのは彼のほうなのだから。もしかしたら今さらそれを後悔してるのだろうか。それとも悪いことをしたと？

余命わずかな私にとってはそれすら、もうどうでもいいことのように思えた。何を聞かされても何をされても私の人生はもう変わらない。時すでに遅し、なのだ。

「…もう、いいわ」

さすがに炎天下の中、長時間いるのは厳しいのか、目の前がクラクラしてきた。このままでは脱水症状で倒れてしまうかもしれない。一刻も早く部屋に戻らなければ…。

そこまでしか記憶にない。どうやらそのまま気を失ってしまったらしく、彼が私を呼ぶ声にも反応できなかった。どうしようもなく不安な表情で私を見つめていたことを、知ることはできなかった。

「ねえ、結華ちゃん。本当に家を出るの？ 何も別荘じゃなくても治療できるよね？ それに余命宣告されてからでも何年も生きてる人がいるって聞くし、やっぱり病院でちゃんと治療してもらったほうがいいんじゃない？」

「…もう、決めたんです」

婚約が解消された今となつては、裕臣さんと私を繋ぐものは何もなく、こうやって会っていることはおそらく不謹慎なのだと思うたが、これが最後だと自分に言い聞かせた。

私が裕臣さんに対する想いを告げたことについては深く追求されなかった。そのことよりも「余命宣告された」という事実のほう为重く押し掛かったようで、あれこれと心配された。

「だいたい、そんなことで婚約解消なんて…人をなんだと思ってるんだろ？ 貴史はこのこと知ってるの？ ちゃんと相談した？」

「いえ…このことは両親と…裕臣さんしか、知りません。貴史さんは婚約解消のことは知らされたと思います。理由までは知らないと思います。私も言つつもりはありませんし…彼だつて知るつもりはないでしょうから。私たちはずっと前から交わることのない道を歩いてたんです。だからこうなつてよかつたのかもしれない。あのまま何事もなく婚姻が済んでも…きっと私たちはどこかで破綻していたでしょうから。元々縁がなかつただけなんです」

「そんなことは…」

そう、すでに諦めていた関係。

修復すると言つ以前に、原形すらなかつた私たちの関係は、結局最後まで形作ることにはなかつた。

「今まで散々相談に乗ってもらっていたのに…すみません。すべて

は私が悪いんだと思います。もっとちゃんと貴史さんと向き合っていればここまで溝は深くなかったと思いますし…裕臣さんの優しさに甘えて、彼に何も相談しなかったことも原因だとわかってます。もっと話し合っていればって…今になって思います。もう遅いですけどね…」

裕臣さんはもう何も言わず、私の言うことを黙って聞いていた。内心どう思っていたかはわからないが最後まで心配そうに、そして悲しい表情で私を見ていた。

貴史さんには言わないでください、と念を押そうと思ったがやめた。何か約束させるということは裕臣さんに負担をかけてしまうことになる。彼が知ったとしても、それは私がいなくなった後になるだろうと思っていたからかもしれない。

「良かった、目覚めた？」

首元がひんやり冷たいと目を開けると、貴史さんがベッド脇で私のことを覗き込んでいた。どうしてここにいるのかわからなかったが、徐々に記憶が思い出されて何があったのか整理した。

「…確か、向日葵を見に出かけて…帰ろうとして、その後…覚えてないわ」

「いきなり意識失うもんだからびっくりしたよ。ちよつと無理させたかな？ 今度はもう少し涼しい時間に散歩しないとね。気をつけるよ。じゃあ、僕は自分の部屋に戻ってるから、何かあったら呼んで」

水を入れ替えていたメイドに声をかけると彼はベッドルームを出ようと腰を浮かせた。その一瞬の動作を見ていた私は、自分でも信じられないような行動に出た。

「1、2、3…行ってください」

立ち上がった彼の腕をとっさに掴んだ。

彼は驚いた表情を見せたが、すぐに「いいよ」と優しく微笑んだ。

この数日間、彼がどうしても嫌なら離れることもできたのに、それでも私はここに居続けた。

彼と同じ空間で、同じ時間を過ごしたのはきっと後悔していたからだ。

拗ねた子供のように、彼に言われたことをずっと根に持って、彼と歩み寄ろうとしなかった私の行動に対して。もう遅いと思いながらも彼が何か起こしてくれるのではないかと、どこかで期待していたのかもしれない。悪いのは私？ それとも彼のほう？ もしかしたらそれは「悪いのは私じゃない」と自分の行動を正当化したいだけのことかもしれないけれど。

それでも彼の瞳に、私がどう映っているのか知りたいと思ったのも確かだった。たとえ残された時間が少なくても、私は彼のことをわかりたいと思ってしまったのだ。

ただそばにいるだけの時間が過ぎていった。

呼び止めたものの、話すことはなく会話が始まってもすぐに終わってしまう。質問して返事して終わり、逆も然りだ。今までなら一言も二言も多い嫌味の言い合いだったが、それすら出てこないのが不思議だった。

本当は聞きたいことは数え切れないほどあったはずだ。どうしてここへ来たのか、私とことをどう思っているのか、私のことをどこまで知っているのか。そして貴方の本当の想いは…？

そのどれもが知りたいはずなのに、知っても仕方がないと思えるものばかりで結局何も言い出せないでいた。静かな空間で黙って過ごすのも案外悪くないと思っていたから余計かもしれないが。

次の日から、私の体調を見ながら向日葵畑へ散歩に行くことになった。

相変わらず貴史さんは午前中外出をしているのか、部屋で仕事をしているのか、私が遅めに起きていくと会えないことが多かった。だが、午後にはふたりでアフタヌーンティーを楽しみ、日が沈みかけた頃出かける。夕食の後はふたり何をするわけでもなく、私が寝るまでそばにいてくれる彼。まるで長年そうしてきた夫婦のように自然で、周りから見れば婚約解消した者同士には見えないだろう。いつしか私の心は信じられないくらい穏やかで、何かに満たされていた。

「最近、顔色がいいですねえ。やっぱりそばで支えてくれる人がいると違っつてことですか、食事もとれるようになって良い状態が続いているので私も安心です」

「そうですか？ 私的には何も変わってないと思いますけど？」

「いやいや、そんな風にごまかしてもダメですよ。貴史さんが来てからずいぶん変わりましたよ、結華さんは。やっぱり私が思ったとおり優しい人ですね」

認めたくはないが、確かに彼は優しくなった。

主治医はなぜか最初から彼に対して好印象を抱いている。最近特に彼を褒めるが、何を言われても受け流すだけだ。しかし私の彼に対する心情は筒抜けのようだ。決まって最後には「治療の効果が出てるから良いことだ」と付け加える。

今回の点滴はさほど苦しくなかった。気分的なものか体が薬に慣れてしまったのか、なんとも言えないと主治医は言った。そろそろ新しい薬に変更しようかと提案されたが、それがどういことなのか私にはわからなかった。

「ねえ、先生？」

「何ですか？ 改まって…いつもの結華さんらしくないですね」

「…その一言はいららないと思いますが。その…彼は私のことをどの程度知ってるんでしょうか。病気のことというか…私の寿命について」

「そうですねえ、なんとも言えませんね。まったく何も知らないということはないと思いますけど、だからと言って全部知っているかとなると、疑問ですね。結華さんが何も言わない限り彼も黙ってるんじゃないですか？ 私としても勝手に話すわけにはいかないので、本当のことを知りたければ結華さんが直接聞かないと。私に相談してる暇があったら聞いてみれば良いと思いますが」

そんなことは言われなくてもわかっている。

それができればわざわざ主治医に話したりしない。おそらく彼について知っていることがあるのだから話が話すつもりはないらしい。

やはり自分のことは自分でしななければならないと言うことか。

話す機会がなかったわけではない。きっかけが欲しいと言えばそれまでだが、ここへ来る前の父の言葉が引っかかっていたから余計に話せなかったのかもしれない。

「結華、別荘へ行く前にひとつ言っておくことがある。お前はもう来栖家とは縁の切れた人間だ、仮に貴史君が訪ねてきても真実を言うことは許されない。彼には彼の人生があるのだから、お前はもうそこには踏み入ってはいけないのだ、わかるね？」

「…はい、わかっています」

「主治医の言うことはちゃんと聞くように。それと何かあったら連絡してきなさい」

父が私を見る目に親としての愛情は感じられなかった。実に事務的に機械を相手に話してるのではないかと思うほど無機質なものだった。

父の頭にあるのは来栖家に迷惑をかけたのではないかという体裁のみ。実際には婚約解消後も両家の取引は問題ないらしい。それなのに私のことよりも彼のことを気にかけるなんてなんて薄情だろうと改めて思った。

父に呼び出される前に裕臣さんに会っておいてよかったと思う。が、今改めて彼の名前を出したところを見るとそれもすでに知られているのかもしれないと思った。

父と会うのはこれが最後になるだろう、家を出たときにそれは感じていた。ここへ戻ることもない、家族と会うこともない、次に対面するとき私はもう動かなくなっている時なのだ。

お祖父さまが亡くなってからお祖母さまはすっかり元気がなくなつた。この別荘で雇っていた使用人全員に暇を出し、今では母屋の奥、離れで静かに過ごしている。

おそらく彼は直接離れに会いに行き、別荘へ泊まることの許可を得たのだらう。未だに父が何も言っていないことを思うと、お祖母さまはこのことを言っていないということになる。だが、離れに人がいない訳ではない。誰が見ているかわからない状態で、使用人の誰かがうっかり彼のことを口にしたら？ それこそ私はここから連れ出されるかもしれない。

病院になど行く気はない。どこにいてもひとりであることに変わらないのなら、最期の場所くらい自分で決めたいと思う。今は彼がいるから余計にそう思ってしまうのかもしれない。

「明日の朝、ここを出るから」

それは唐突だった。

持っていたスプーンを思わず落としそうになり、慌ててテーブルに置いた。

夕方出かけたときは何も言っていなかった。いつもと同じようにただ黙って静かに向日葵の花を見つめていた。それなのになぜ？ いつからそのつもりだったの？

「…そう、ですか」

そう答えるしかなかった。

まだ何も話せていない、そう思ったがそれも言葉にはならなかった。その後はふたりとも無言で、同じ空間にいることさえ苦痛で仕

方がなかった。夢であって欲しいという気持ちの片隅にあることを、このときは気付くことができなかった。

何も考えられなかった。

ひとりの時間がこんなにも長いなんて、思いもしなかった。

朝目が覚めると、そこに彼の姿はなく、「早々にお帰りになりましたよ」と言ったメイドが憎らしかった。元の生活に戻っただけだと言いつけながらも、部屋に戻ってから外を眺めてばかりいた。

後悔していた。これでもう会うことがないのかと思うと自分の愚かさ、腹が立っていた。どうして意地を張って何も言わずにいたんだろう。なぜ一言「もう長くない」と言えなかったのだろう。言い訳にしかならないと思っていた。今さら彼が本当のことを知っても意味がないと決め付けていた。

それがどうだろう？ 彼がいなくなつて真つ先に思つのは「聞けばよかったと」そのことだけ。

「…何してるんだろう？ 私…ばかみたい」

自分のことしか考えなかった結果がこれなのだ。

傷つきたくなかったから、自分を守るために私は自ら殻の中に閉じこもってしまったのだ。願わくばもう一度彼に会いたい。そして今度こそ本心を聞いてみたい。しかしそれはもう叶わないだろうと必死で想いを抑えた。

今頃彼は日常に戻っているだろう。彼にとってここは非日常であり、本当に束の間の休息だったのだ。それなのに、ずっと一緒にいる間に錯覚を起こしてしまった。あの時間が、永遠に続くものだと思い込んでしまったのだ。

なんて愚かなんだろう…と自分の浅はかさに思わず笑いがこぼれ

そうになった。

どこかで、ほんの少し好かれているのではないかと自惚れた。今まで散々嫌味の言い合いをしてきてそれこそ都合のいい話かもしれないが、何かを感じていたことは確かだ。でもそれは思い過ぎしだったらしい。

彼は私のことを思っただけでここへ来たのではないのかもしれない。裕臣さんからたまたま話を聞いて、元婚約者を邪険に扱ったまま死なれたくないと思っただけかもしれない。

最期に私に優しくすることで、彼はほんの少しでも優越感に浸り自分は自分のできることをやって見せたのだと思いたかったのかもしれない。

そこまで思っただけで自分の性格の悪さに嫌気がさした。自分を悲観するあまり彼を悪人にして、自分の身を守ろうとしている。最低の人間だ。

気分を変えようとバルコニーから空を眺めた。憎らしいほど青い空は眩しいほど輝いていた。太陽の光が恋しいと思っただけでここへ来て初めてではないだろうか。思わず手を伸ばさず、届くはずもない太陽に向かって。

「…届くわけがないのに」

ふと脳裏にあの向日葵の花が浮かんだ。届くはずのない太陽に向かって必死に伸びようとすると花たち。子供の頃その花に自分を重ねたが、それ自体間違いだっただけではないかと思っただ。

私は向日葵のように手を伸ばしたことがあるだろうか。最初からすべて諦めていた私は手を差し出すことすらしなかったのではないだろうか。

手に入らないから努力しない？　そもそもそれが私の愚かさの証かもしれない。

普段使うことのない呼び出しベルを使うと、慌てた様子のメイドが部屋に入ってきた。無理もない、今までどんなに気分が悪くても耐えて使わなかったものだ。何があったのだろうと思うのが普通だろう。メイドの顔は今までに見たことのないような表情をしていた。

「今すぐ外出許可を取って、時間がないの、早くっ！！！」

「え？　結華さん、急にどうされたんですか？　と、とりあえず落ち着いてください、今先生を呼びますから」

普段無表情の彼女が狼狽していた。今はこうして座っている時間すらもどかしい。

会いに行かなければ…彼に会ってすべて話そう。そして知りたかったことのすべてを聞こう。もっと早くにこうしていれば、ここまですれ違うことはなかったのに。

いくらでも修正する機会があったのに、自らそれを潰していた。恐かったから、再び彼にはつきりと拒絶されるのが恐かったから。でも今はもう何も失うものはない。すべてをさらけ出すことができる気がする。

「結華さん、急に外出したいなんてどうしたんですか？　夕方の散歩なら許可を出しているでしょう？　それとも家に帰りたい…なんて言うんじゃないでしょうね？」

「そうじゃありません。行きたいところが…会いたい人がいるんです。先生、お願いします。時間がないんですっ！！！」

「その体でどこへ行くつもりですか？　結華さんはひとりで動ける体じゃないんですよ？　長距離の移動は主治医として認められませんか。もしものことがあったらどうするんですか」

「お願いです、ひとりがダメだというなら…誰か付き添いをつけてください。先生っ！！！」

私が何を言っても主治医は首を縦に振ることはしなかった。夕方まで大人しくしていなさいと、鎮痛剤を打たれた。幸い強いものはなかったため眠気は弱かったが、それでも一瞬にして夢の世界に引き込まれた。

目が覚めたのは午後、まだ日が高い時間だった。

フラフラとした足つきでバルコニーへと出た。主治医が言っていた、私はもうひとりで歩くことすらままならないのだ。手すりにつきまわり空を見上げながらどうにか立っていた。

「ちょっと、そこから飛び降り…なんてするなよ」

不意に声が聞こえてきて驚いた。振り返るとそこには帰ったはずの彼が扉にもたれかかり微笑んでいた。

夢でも見ているのかと思った。

そこに立っている彼の姿は昨日までと何ひとつ変わらない。ずっとここにいたような顔をして私のことを見ている。あまりに自然な態度が私を混乱させる。

「そ、そんなことしませんっ!!! それより、帰ったんじゃないんですか? どうしてここに…」

「ちよつと仕事でどうしても出て来いと言われたからね。思ってたより早く終わって今着いたところだけど? ああ、ついでに休暇の延期届け出してきたからまだ当分ここで世話になるよ…って、結華さん!？」

へたへたと座り込んでしまった。

どうしてこの人はいつも人を驚かすんだろう。前もって言うてくれればよさそうなものなのに。いつも言葉少なであいまいな伝え方をする。本人はそれでも悪気はないのだろうか。

「…だったら、最初からそう言うてください。貴方はどうしてそうなんですか?」

「え? ああ、すぐに戻ってくるつもりだったから言わなかったんだけど?」

特に悪びれた素振りも見せずさらりと saying のけた。

いつもそうだった。結納が終わってから来栖家に入りするたび彼の隣に座っていても表情からは何も読み取れなかった。だからといって口数が多い彼は最低限のことしか言わない。

それを聞いて相手がどう解釈するか、きっとそこまでは気にしていないだろう。言わなくても伝わるだろう、もしかしたら私はそん

な風に思われていたのかも知れない。

「貴方はいつだってそうです、どうしていつも肝心なこととは言ってくれないんですか？ なんでも勝手に自己完結してしまつて…少しは私の気持ちも聞いてください」

「…ごめん」

「謝らないでください。そんなことが聞きたいんじゃないんです、貴方は何を考えてるんですか？ どう思つて、どんな思いでここへ来たんですか？ どうして何も言ってくれないんですか？ なぜいつも本心は隠したまま私の前に現れるんですか…それじゃあ、それだから私だつて本当のことが言えないんです。貴方に何も聞けないんじゃないですか！…！」

気がつけば涙を流していた。

いつもどんなに冷たくされても泣いたことなどなかった。それはおそらく何も期待していなかったからだろう。相手に感情をぶつけるほど何かを思ったことはないし、ふたりの間にどんな感情も生まれていなかったからだ。

でも本当はその感情に気がつかないふりをしていただけなのだと思う。あの頃の私は素直になれず優しい態度で接してくれる裕臣さんのところに逃げ込んでいたのだ。自分が誰かに好かれている、という安心感が欲しかったのかもしれない。

だが、もう気付いてしまった。自分の気持ちに、どうしたいのか、何を求めているのか。彼の本心が知りたい。今ならわかる、私が聞けば彼はちゃんと答えてくれたのだらう、と。本心を隠していたのは私も同じなのだ。

「貴史さん…どうしてここへ来たんですか？」

それは一番知りたいことだった。

彼は黙ったまま私の顔をじっと見つめていた。言うことをためらっているようにも見える。もしかして裕臣さんに頼まれて渋々来たのだろうか。そんな嫌な予感がよぎる。何を言われても取り乱さないようにしようと思ったが、すでに私の心拍数は尋常ではないほどに跳ね上がっている。

無言で向き合っている間、大きく深呼吸した。彼も同じように息を吐き口を開いた。

「そうだね…今さらこんなこと言って図々しいかもしれないけど、結華さんにどうしても会いたかったんだ。会って謝りたかった。今まで僕がしてきたことのすべてを…でもなかなか言い出せなかった。言うタイミングが見つけれなかったって言えば都合がいい話かな。本当は恐かったんだ、今さら何謝ってるの？ って言われるのが。それに顔を合わせればついついいらないこと喋っちゃうし」

謝りたい？

それは何に對してだろう。確かに初めて会ったときに拒絶されたが、そのことについてだろうか。それ以降は会ってもたいした話はないから改めて謝らなければならぬほど悪いことはしていないはずだ。どちらかといえば態度が悪かったのは私のほうで貴史さんに落ち度はないと思う。

「それは…私を認めてない、と言ったことに対してですか？ それとも他にあるんですか？」

「その両方…かな。でも僕は「君のこと」を認めていないと言った覚えはないよ。あくまで「親の決めた相手」を認めていないだけだ。まあ確かに誤解を招く言い方だよな」

「え？ でもあのときの貴方はそんな言い方では…だって私は貴方に嫌われてるんだと…初めて会ったとき貴方のことが恐くて、それで逃げ出したんです。貴方は私のことを嫌ってたのではないんです

か？」

今でも忘れられない。

初めて憎しみのこもった表情を目の当たりにしたからだ。あのとき確かに私は敵意を向けられた。今彼が言ったようなニュアンスでなかったことだけはわかっているつもりだった。

「そうだね…まず、そこが違うんだ」

それは想定外の台詞だった。てっきり自分を否定されるか、別の優しい言葉をかけられるか、そのどちらかだと思っていたから。

違うって、何が？

貴史さんは「どこから話そうか」とためらいがちに話を始めた。

この後私は呆然と彼の話を聞いていた。質問することも返事をすることも忘れて、聞かされたことを理解することに神経をとられた。

彼の話が本当なら、私はとんでもない勘違いを起こしていたことになるのだから

自宅を出てから二時間以上経っているだろう。高速道路を下りて閑静な住宅街を抜け、人も疎らな山奥へと入っていった。この山道を抜けると別荘地が広がっている。もう何度も通った道だ、迷うことはないが目的地である「あの」別荘へまっすぐ向かう気にはなれなかった。

おそらく自分は歓迎されないだろう。最悪顔を合わせてもらえない可能性だつてある。そのためにいろいろ保険はかけておいたが果たしてそれがどの程度効果を成すだろうか。

ひとまず叔父が所有する別荘へと向かった。自分が計画した予定が狂わないことを祈るだけだ。

「貴史さま、待ちしておりました」

「急にお邪魔してすみません、叔父さんたちは今年もここを使うでしょう？　なるべく迷惑がかからないようにしますから」

「いえ、お部屋なら十分用意できますし、旦那さまも気を遣われないように仰っていましたから。ああ、でもいらっしゃるのは今日一日だけでしたね」

「そうだね、僕の予定が狂わなければ…だけどね」

玄関で立ち話もなんだと部屋へ案内された。ここに長く滞在するつもりはないので一番小さい部屋を用意してもらっていた。執事は「申し訳ないから」と言つて広めの部屋を勧めてきたが、それとなくやんわり断つておいた。

ここを使えるようにしておくのはあくまで保険だ。目的地へ行つて「泊められない」と言われたときのために。今日一泊するのも気分を落ちつけたかったからかもしれない。

兄さんに休暇を申し出るとあっさり認められた。おそらくあの話があったときから自分がそう言い出すことは予想できていたようだ。休暇届を出し仕事を片付け急いで準備してここまで来たが、あれからもう一ヶ月も経っていた。最悪の事態に陥っていないことを祈るだけだ。

専務に昇格した兄さんと顔を合わすのは久しぶりのことだった。自分の忙しさとは比べ物にならないほど走り回っていて、自宅でもその姿を見ることはなかった。一体、いつ休んでいるのだろうと思うほどだ。

そんな兄さんが「話があるから」と予定を合わせてきたことに驚いた。自分のほうはどうとでも都合がつく、そう伝えると翌日専務室へ呼び出された。

「専務室って案外狭いんだね、まあ文句は言えないよね、ここだつてすぐに別の人間が座ることになるんだろうし」

そう嫌味を言いながらソファに座った。秘書が紅茶を持ってきたが兄さんは早々に追い出した。秘書に聞かれたくない話でもあるのか？ だったら自宅で話せばいいのに。それとも何か？ 親にも聞かれたくないことができたのだろうか。

「忙しいところすまないな、わざわざ来てもらって」

「忙しいのはそっちだろ？ こっちは気にしてもらわなくても構わないさ。で？ 改まって話して何？ 義姉さんとなんかあった、とかじゃないだろう？ 揉め事に引張られるのは勘弁してくれよ」
「ああ、まあ汐梨しほじは関係ない。そうだな、お前は揉め事が苦手だったな」

兄さんは言いにくそうに言葉を濁した。なかなか本題に入ろうとしないことは見て取れた。義姉さんのことじゃないとすれば何だ？ 自分には見当がつかなかった。

「お前：結華ちゃんと最後に会ったのは…いつだ？」

「はあ！？　なんで彼女の名前が出てくるんだよ、もつとっくに縁切れただろ？」

「いつだ、と聞いてるんだ」

どうやら婚約解消したことを説教するつもりなのかとうんざりした。あれに関してはこちら側から言い出したことじゃない。自分としては被害者だと思っていた。

「いつって…婚約破棄される前だから…結構経ってると思うけど？」

「いつだったか正確には覚えてない」

「そうか…」

「そうかって、何？　説教でもする気？　あれは向こうが言い出したんだ、兄さんにとにかく言われる筋合いないと思うけど？」

兄さんは黙り込んでいた。何か言ってくれよ、と思った矢先「実は」と重い口調で話し始めた。

「先週結華ちゃんに呼び出されてね、てっきりお前のことを言われると思っていたよ。でも…彼女は別のことを伝えるために俺に会ったんだ。お前、婚約解消の本当の理由、聞いてないだろ？」

「なんだよ、本当の理由って…」

彼女兄さんに言い訳を言ったのかと思うと腹が立っていた。なぜいつも自分に言わないんだらう？　どうしていつも兄さんにはばかり相談するのだらう、と。

「それをお前に言う前にひとつ約束しろ、今から俺が言うことを誰にも言わないと。両親はもちろん、結華ちゃん本人にも、だ」

「…それは話次第だな。内容によっては彼女に会いに行くかもな」
「まあいい、お前なら話さないだろう。彼女なら今別荘にいる、お前も行ったことあるだろう？ 叔父さんの別荘からそう遠くないところにある、あれだ。先週、そこへ移り住むと言ってた」

自分との婚約を勝手に解消しておきながら、別荘暮らしなどずいぶんお気楽なものだ。それを許した両親の神経もいかなものかと思う。

だが、その理由は自分が考えていたものとは大きく違っていた。

「…彼女は、そう長く生きられないらしい」

何かの冗談かと思った。

そんな嘘までついて自分から離れたかったのかと思ったが、兄さんの顔はいたって真剣だった。たちの悪い冗談などではなく、それが真実なんだと思い知らされた。

詳しい様子を語っていたが、そのどれも自分の頭には入ってこなかった。もう関係ないと思っていた彼女のことを聞かされて、こんなにも落胆するなど思ってもいなかったのだ。

まるで時間が止まっているかのような気がした。

兄さんはそう言ったきり何も喋らなくなつた。ここで自分から何も聞かなければ兄さんのほうも言う気がないのだろう。だが、すぐには聞けなかつた。たぶん、知りたいという気持ちともう関係ないという気持ちが入り混じって、自分でもどうしていいのかわからなかつたのだと思う。

時間にすれば数分がとてつもなく長い時間を感じられた。

ベッドに横になつていたが気分が落ち着く気配はなかつた。

今頃彼女はどうしているだろうかと考えるが、まったく見当もつかない。医師と看護師が別荘に住み込みで看病していると聞かされたが、肝心の彼女の容態は兄さんも教えてくれなかつた。それだけは自分の目で確かめたほうがいいということなのだろう。

以前の彼女を思い浮かべる。が、思い出せるのはいつも自分を避けるような態度を取り笑わない彼女の顔。その瞳は自分のことなど見ていない、どこか寂しそうな目をしていた。

自分はずいぶん嫌われている、それが長い間心を支配していた。

彼女は兄さんに何でも相談していた。それが好意を持つていると気がつくまでそう時間はかからなかつた。兄さんと楽しそうに話す彼女を見て自分の存在が疎ましく感じたこともある。

自分の所為で彼女に悲しい想いをさせているのだ、と。だから自分の想いは気付かれてはいけない、だんだんそう考えるようになり彼女と距離を保つことで自分を抑えていた。

「…会えたらなんて言おう」

今さら。

どんな顔をして会いに行けばいいのだろう。

「貴史、婚約相手が決まりそうだった？」

兄さんはおもしろい話題を持ってきてやったぞと言わんばかりに話しかけてきた。もちろんそんなものに興味はない。相手がどうこうという問題ではない。小学生相手に縁談話なんてどうかしてる、と冷静に傍観していたからだ。

「まだわからないよ、何せ相手はまだ産まれてないんだから。そもそも僕はそんなことに興味はないし母さんがどんどん話を進めてるだけだよ」

「そうは言っても今回はかなり有力だろ？ お前もそろそろ覚悟したほうがいいぞ」

「あ、そう。他に用がないなら出て行ってよ、勉強の邪魔だよ」

もう少し話していたそうな兄さんを廊下へ追い出し、本の続きを楽しむことにした。だが、思っていた以上に動揺していたのか、内容は一切頭に入ってこなかった。

自分への縁談相手は今までも何度か持ち込まれていた。だがどれも実現することはなくそのたびに安堵していた。お互いの家のために婚姻を交わすのだ。肝心の家の状況が変われば話は百八十度違ってくる。そう簡単に相手など決まらないだろうと思っていた。

そんな中持ち込まれたのが今回の話だ。長谷夫人が身ごもったということで、そのときから候補に拳がっていた。おかしい話だ、産

まれてくるかどうかもわからない子との縁談なんて。

だが、無事産まれそうだと聞かされた母はいそいそと準備し始めた。これで産まれてきた子が男の子ならいい笑い話だが、それでもその子が女の子だと言う可能性は高いと見ている。

長谷家は代々女系だ。かなり前から婿を迎えているが、久しぶりに男の子が産まれたと聞いている。その後すぐに女の子ができたと聞いていたが、それから十年以上経つての懐妊だ。あの家にとって男の子が産まれるのは奇跡に近いものらしい。だから今度も女の子だろうと予想しているらしい。

そううまくいくものか、と思っていたが後日女の子の誕生を聞かされいよいよかと覚悟した。

長谷結華。それが婚約者の名前だった。

自分から会いに行くつもりはなかった。それに相手はまだ婚約者の存在を知らないと聞かされていたから勝手に話すわけにもいかない。彼女は産まれる前から相手が決まっていると聞かされてどう思うだろうと考えた。自分はまだいい、少なくともこの歳まで好きに生きてこられたから。

ただ彼女は産まれたそのときから嫁ぐ家のことを優先され、教育されるのだ。そう思うとまだ見ぬ彼女が不憫に思えてきた。きっと彼女も納得はしていないだろう。親の決めた縁談だからと話が勝手に進むなんて認められない、認めたくなかった。

しかし、初めての顔合わせの日彼女は自分の前から逃げ出した。よほど気に入らなかったのだろう、それから結納まで一度も彼女と会うことはなかった。

「ああ、貴史君。ずいぶん立派な青年になったね。今日はよろしく頼むよ、結華は少し緊張してるみたいだからしっかりフォローして

やってくれ」

結納が行われるこの日が二度目の出会いだった。

当主の後ろに立っている彼女に挨拶をしようとしたとき、彼女は自分のことを見るなり無言で頭を下げ、すぐに目を背けた。

彼女からは「話しかけないで」オーラが漂っていて、隣に座っていてもなぜか壁を作られているような気がしていた。話しかけると返事はするがそれ以上会話が広がることはなかった。

「つたく…なんだよ、あの態度」

「珍しいな、貴史がそんなに怒ってるのって」

「彼女だよ、長谷結華。気に入らないんだったら勝手に縁談決めた親に文句言えつての!!!」

「まあまあ、落ち着けて。そのうちあの子も自分の置かれてる立場を理解するだろ。この間まで高校生だった子だ、大目に見てやれよ」

今思えば、あの頃兄さんのように寛大な態度がとれば良かったのだろう。だがそんな器用なことができるはずもなく会うたびに溝が深くなっていることだけはわかった。どこかで修正しないと取り返しのつかないことになるとわかっていても、自分からは行動できなかった。

このまま結婚することなんて考えられない、そう思っていた矢先、予想していなかった台詞を聞かされた。自分呼び出した父は唐突に「長谷家との縁談は白紙になった」とだけ伝えた。

父から理由は聞かされなかった。ただ事実だけを伝えられ、自分の消化しきれしていない気持ちをどこにぶつけていいのかわからなく

なっていた。

彼女は承諾したのだろうか。自分との繋がりは切れてしまったのだろうか。会ってもう一度それを確かめたかった。

「じゃあ、また来ます。お邪魔しました」

「いえ、こちらこそ大したおもてなしができません…申し訳ありません」

朝食をとった後車に乗り込み別荘を後にした。昨夜は昔の夢でも見ていたのかあまり眠れなかった気がする。距離はそう離れていない、寝不足気味の目をこすりながら車を走らせた。

彼女が滞在しているという別荘が見えてきた。人がいるかどうかはわからない。もし誰もいなければ自分は間に合わなかった、ということになる。

わき道に車を停めて建物を眺めた。しばらくするとバルコニーに人が出てくるのを確認した。それが彼女だとわかるまでそう時間はかからなかった。

思わず笑みがこぼれる。とりあえず第一段階はクリア、ということになるのだ。すぐに車に乗り込み駐車場へいれると扉のベルを鳴らした。

「来栖さま、お待ちしております」

意表をつかれた。

まさか執事が自分のことを知つてるとも思わなかったし、ここへ来ること連絡済だと考えてもいなかったからだ。あの祖母さんも食えないところがある。まさか彼女にそれが伝わっていないだろうかと質問すると「結華さんは何も知りません」と返ってきた。

兄さんから話を聞かされて真つ先に思ったのは、一刻も早く彼女に会いに行つて誤解を解かなければということだった。

今さら遅いのかもしれないがそれでは自分の気が治まらない。彼女にどう思われても自分が今までしてきたことを謝りたいと思った。そしてずっと後悔していたことを伝えたかった。

そのためにはまず彼女に会いに行かなければ。病院で治療はしていないという、別荘にいるということは緩和ケアを受けている可能性が高い。早くしなければ自分は一生彼女と会えなくなってしまう。

「あらまあ、よく来てくれたわね。ごめんなさいね、皆出払つていて今はわたくししかいないのよ」

「いえいえ、お祖母さまにお会いしたくて来たんですから。お構いなく」

「ではお茶をたてるわね、こちらへどうぞ」

茶室へ通された。

この日、長谷家には先代の妻である佐夜子^{さよこ}夫人だけが残されていた。実はそれを事前に調べ知っていたからわざわざこの日に足を運んだのだが。他の人間がいれば自分が離れに立ち寄ることも夫人と話すこともできないだろう。

目的は世間話をするわけでもなく、お茶を楽しむためでもない。

「ところでお祖母さま、結華さんがおひとりで別荘にいるんですが…僕もそちらにお邪魔してもいいでしょうか？ できれば彼女を驚かせたいので、このことは誰にも言わないで欲しいんですが」

「あら、わざわざわたくしに許可を得なくてもいいですよ。もう他人ではないのだから遠慮なさないで。結華もきつと驚くわね」
その光景を思い浮かべたのか、夫人はうふふ、と笑った。

ありがとうございます、と頭を下げた長谷家を後にした。どうや

ら夫人は彼女が病に侵されていることも自分たちの婚約が解消されたことも知らないようだ。そのおかげであっさりと約束を取り付けることができたといえればそれまでだが。

念のため承諾を得たという書類をお願いしたとき怪訝な表情を見せていたが、まだ婚姻前ですものねとあっさりサインしてくれた。

「結華さんでしたらお部屋でお休みになってると思います」

「ふーん、行っても大丈夫かなあ？」

「…一応、お声はかけますが」

メイドは彼女と相当折り合いが悪いとみた。というか、無関心といったほうが正しいかもしれない。おそらく期間限定で急ぎよこへ連れてこられたといったところだろう。

「ちょっと待つて。彼女の部屋は後で案内して」

何よりも早く彼女の部屋に向かいたかったが玄関を入っていく人影が見えたので後回しにすることにした。メイドの表情はさほど変わらなかつたため何を考えているのかわからなかつた。

「先生」

背後から声をかけられたことに驚いたのか返事まで間があつた。

無理もない、彼は自分のことを初めて見るだろうしそもそもその存在すら聞かされていないはずだ。

にっこりと笑って相手の警戒心を解き、ゆっくりと話しかけた。

「…ああ、不躰に呼び止めてすみません。はじめまして、結華の婚約者で来栖と申します。いつも彼女がお世話になってます、今日もこれからですか？ よろしくお願ひしますね」

「え？ ああ、はい。こちらこそすみません、何も知らないで…失礼しました。そうでしたか、結華さんの婚約者で…ではお見舞いに

「？」

初めて見る自分のことが珍しかったのかじろじろと眺めている、その目は何かを詮索しているようだった。その視線をさらりとかわし「まあ、そんなところですよ」とその場を去った。

詳しい病状を知らない自分としては余計なことを言っただけを掘ってはいけない。最小限の言葉にとどめていればあの医師から彼女へそれとなく伝わるだろう。自分のほうから根掘り葉掘り聞き出すのはいかなものかと思っただけに彼は何かと役に立ってくれそうだった。

さて、今日一番の正念場はここからだ。

ここをつまぐ乗切らなければ自分がしてきたことはすべて泡と消える。気を取り直してメイドの後をついていった。何度か扉をノックしているが中から返事はない。仕方ないのでその場で用件を伝えてもらうことにした。その分拒絶される可能性が高くなるがそのときは強行突破しかない。

「結華さん、お客様がお見えです。入っていただいてよろしいですか？」

次の瞬間、中から彼女の声が聞こえてきた。困惑しているように聞こえたがここは気にしている場合ではない。会いたかった、という台詞を飲み込み無理やり扉を開けて部屋の中へ入っていった。

『どうだ？ 結華ちゃんとはちゃんと会えたか？』

「ああ…無事別荘に泊まることができたよ」

『なんだ？ その返事は…まさか、また余計なこと言ったんじゃないだろうな？ ったく、それじゃあ何のために行ったのかわからないだろ。ほんと手が焼けるな、お前は』

夜になって兄さんから連絡があった。

案の定、彼女の顔を見るなり散々嫌味を言ってしまった。反省してももう遅い、明日以降追い出されないように気をつけなければいけない。

自分が思い描いていた予定は、あっさりと自分の言動で崩れてしまった。本当ならさりげなく病状のことを聞きだし、婚約解消になったことも気にしないで伝え、今までの非礼を謝るつもりだったが、だが、彼女のあまりの困惑っぷりに自分が「招かれざる客」だと思知らせれつい、売り言葉に買い言葉で終始終わってしまった。

『とりあえず…お前には時間をやる。好きなだけそこにいればいい。ただし、ちゃんと仕事はしてもらうぞ。資料はメールで送っておいだから。結華ちゃんも体調が優れないだろうから、お前のペースに合わせるなよ』

「…言われなくてもわかってる。それより…本当のこと、言っているのか？ 兄さんの立場が悪くなるだけなの？」

『それはもう決めたことだろう？ 今さら何言ってるんだ、俺のことは気にしなくていい。ちゃんと話して、お前のことをわかってもらえ。いいな』

そう言うと一方的に電話を切った。兄さんもこのことばかりに時

間を割けないのだ。一日でも早く彼女に本当のことを話して報告したい。それが自分の、兄さんのためになるのだから。

「長く生きられないって…どういうことだよ」

彼女のことは何も知らされていなかった。婚約が解消されたことも母から言われ、理由を聞いたが教えてはくれなかった。この縁談に一番乗り気だった母の態度の変わりように驚きもした。

「ガンだそうだよ、しかもかなり進行が早く手術はできない状態だそう。別荘でゆっくり治療するつもりなんだろ」

「そんな…」

今さら事実を知って何になるのだろうと思った。

兄さんの意図もわからない。このことを自分に告げたからと言って何か変わるとでも思っているのだろうか？ 最初から自分たちには縁がなかったのだ。病気になったのはきっかけで、どんな形でもいずれ破談になっていたと思う。

「彼女は…兄さんには相談するんだな。結局、彼女にとって必要なのは兄さんだけだったんだ。ほんとずいぶん嫌われたもんだよ。まあ、婚約解消の理由がわかって清々したよ。あのまま何も知らされてなかつたら一方的に断られたと思って、腹立ててただろうし。これですっきりしたよ」

それなら仕方がないと思えてきた。恋人同士で互いが望んでいる結婚ならともかく、家同士で決めた話だ。相手側から断りの話がなくとも彼女の病気が明るみになったところで断るだろう。幼い頃から何度も聞かされた「今回は縁がなかった」と、話は片付けられてしまっただ。

母のあの態度の変化も納得だ。今頃代わりの相手を躍起になって

探していることだろう。せいぜい困ればいい、たまには思うようにならないことがあると知っても罰は当たらない。

「待て、貴史。まだ話は終わっていない」

部屋を出て行こうとしたところ呼び止められた。自分としてはもう用はないものと思っただけに驚いた。これ以上何を話すことがあるのだろうか？ 理由を聞けば自分としては彼女のことは一日も早く忘れてしまいたい。形だけの婚約者、彼女だってそんな過去は思い出したくもないだろう。

兄さんの呼び止めに応じず、乱暴に扉を閉めて部屋を出た。エレベーターに乗っている間も仕事に戻ってからも彼女のことを頭から離れなかったが、無理やり追い出し忘れようと違うことに没頭した。

寝ようと思っただけでベッドに入ってみたが、眠気が襲ってくる気配がなく時間を持て余していた。昼間治療をした彼女の様子が気になつて仕方がないということもあるだろう。

こんな夜遅くに訪ねればまた嫌な顔をされるかもしれない、そう思いながらも足は自然と彼女の部屋に向かっていた。

何度か扉をノックしてみたが中から返事はなかった。もう寝ているのだろうかとドアノブに手をかけるとあっさり開いた。いけないとは思いつつもなぜか引き返すことができなかった。

(…ヘタすりゃ、訴えられるな)

ベッドルームからは僅かな光が漏れていた。そこでも念のためノックしてみたがやはり反応がない。こうなると湧きあがってくるのは不安と焦りだ。勢いで部屋の中へ入った。

目に映った光景は彼女の寝顔だった。だがホツとしたのもつかの間、彼女は突然起き上がりベッド脇に頭を下げた。苦しそうな嗚咽が漏れたかと思うと、そばにあった水に手を伸ばし一口二口飲んだ後再びベッドに潜りこんだ。

どうやら自分があることに気が付いていないらしい。おそらく気分が優れないためそれどころではないのだろう。一人掛け用のイスを寄せて彼女の顔を覗き込むようにして座った。

苦しいのだろうか、息遣いが荒い気がする。灯りが小さいため顔色まではわからないがかなり辛そうに見える。何度も寝返りをする彼女の髪をそつと撫で、タオルでその顔を拭っていった。弱々しく呼吸をする彼女のことを愛しく感じた。

もっと早く、こうしていれば…そんな後悔ばかりが募り、できることならやり直したいと考えていた。今こうして手を握っている間はそれが可能なのではないかという錯覚に陥っていた。

翌日、彼女にどう顔を会わせようか迷っていたがどうやら取り越し苦労のようだった。朝食はひとりで、と言われたので仕方なく従ったが昼食の席にも彼女は現れなかった。

「結華さんなら、気分が優れないとかで…今主治医の方に診てもらっています」

容態が悪化したのかと思われたが、実はそうではないらしい。薬の副作用で熱を出し寝込んでいるだけのようだ。しかもこれはいつも引き起こす副作用のようで、メイドはいたって平然とした表情で「それが何か？」と言わんばかりの態度だった。

二日もすれば良くなるだろうと聞かされたので、とりあえずは安心した。が、それまで彼女と会うことはできない。今のうちにできるだけ仕事を片付けてしまおうと用意された自分の部屋に戻った。

「来栖さま、お食事の用意ができました」

「これが片付いたら行きます」

扉の外にいるはずのメイドから返事はなかった。どうやらよほど嫌われているらしい。もしかしたら自分は思っている以上に女性に好かれない性質なのだろうか。

彼女の誤解を解く前に、使用人と打ち解けるほうが先なのではないか。ここには長くいる予定だ。あまり険悪な状態は好ましくないだろう。

「よかつたら一緒に食事しない？」

扉を開けメイドの後姿に声をかけた。驚いたのか無言で自分の顔をじっと見ていた。だがすぐに「禁止されていますので」と短く答えて廊下から立ち去ろうとした。

「じゃあ、ここに持ってきて。あんな広いダイニングでひとり食事

するのは嫌だからね、頼んだよ」

「…かしこまりました」

手のかかる男だと思われただろう。無表情だがそれくらいは読み取れた。正直、佐夜子夫人の人選ミスだなと思った。あれでは世話をしてもらっている彼女がかわいそうだ。

部屋はとりあえずベッドルームがあればいいと伝えておいたが「そういうわけにはいきません」と執事が気を利かせてくれた。そのおかげで仕事をしたり食事をする事ができるのだが。

「食後のコーヒーはブラックで入れてくるかな」

あまり気が進まなかったが、メイドを部屋に残したまま食事をすることにした。途中何か話しかけられたりするだろうかと待っていたが、食器を片付けたり水を入れたり、仕事に徹底していた。

態度はいかなものかと思うが、まあ仕事はできるらしい。終始無言で部屋は食器の音だけが響いていた。やはり自分から話さなければ何も変わらないようだ。

「君、名前なんていうの？　ここの仕事は初めて？　以前はどこに勤めてたの？」

よくよく考えれば不躰な質問だ。こたえる気がなければ黙っているだろうと思ったが、予想に反してメイドは口を開いた。

「澤村真帆さわむらまほみと言います。この仕事はここが初めてです。なにかお気に召さないことがありますか？　不手際がありましたらおっしゃってください」

「いや、そんなことは言っていないよ。そうか、初めてなんだね。仕事はちゃんとできてるし問題ないんじゃないかな？　ちょっと冷たい気がするけど」

「冷たい？　私が？　どなたに対しておっしゃってるのですか？」

どうやら自覚はないらしい。メイドの仕事が初めてで、おまけに

結華さんと面識がないのだからあの態度も仕方がないのか。彼女は仕事と割り切って、ただ言われたことをそのまま実行しているだけなのだ。

佐夜子夫人はあえてそういった人物を選んだのだろうか？ いや夫人は結華さんの病気のことを知らないはずだ。では彼女を雇った人物は当主の宗仁かすひと社長か。だとすればこの人選にも納得がいく。おそらくここに集められた人間は結華さんの最期を看取るために集められたのだ。

そのため情にほだされやすい人間はふるい落とされたのだろう。彼女の苦しむ姿を見ても「自分の仕事はここまで」と割り切っていないければ体がもたない。

「僕に対してはもうちょつと自然に接してくれていいんだよ？ 君の雇い主は長谷家の当主であつて僕ではないからね。結華さんが寝込んでいる間はすることも少ないんでしょ？ だったら話し相手にくらいなってもらつても構わないよね？」

「…」

「とりあえず結華さんの体調が戻るまで食事はここに持つてきてもらつていいかな？ で、君は僕の話し相手になる。ああ、それと。食後はコーヒーをブラックで、後夜食の用意をしてもらつても構わないかな？ メニューはシェフに任せるよ」

「…かしこまりました」

渋々といった感じではあつたがメイドは了承した。

まだ明日も彼女の容態は変わらないだろう。担当の看護師に一応聞いてみたが熱が下がらない限り起き上がれないだろうし、抵抗力が落ちるためしばらくは安静にしておいたほうが良いと言われた。

今のうちにおこななければならぬことがある。ここへ来た目的はもうひとつある。明日の午前中はそれに時間を費やすことしよう。午後からはまた会社から会議報告や資料が送り込まれてくる。

周辺の地図を見ながら明日の予定とルートを確認した。

「昼食は用意してもらわなくてもいいです。外で済ませてきますから」

車に乗り込み昨夜見た地図を再確認した。徒歩で行けない距離ではないが、どこへ行っているのか勘ぐられないようにするため、あえて車を走らせた。

目的地に着くとすでに先方は待っていた。急いで車を下りると「お待たせしてすみません」と頭を下げた。日に焼けた老人は実年齢より若く見えた。

「そろそろお見えになる頃だと聞いていましたので。なんとか間に合いそうです」

「そうですか、兄が無理を言ったではありませんか？ 突然言い出したと聞きましたから」

「いや、こちらもできないことは引き受けませんよ。では案内いたしましょう」

老人は岩城いわしろと言う。この辺りの地主で別荘が立ち並ぶ以前から住んでいる。歩きながら「この辺りも昔とは変わってしまった」と思い出話を聞かせてくれた。高度経済成長期には今の倍以上の別荘があつたという。時代の流れで無人の別荘が増え、それに伴い人口も減り老人ばかりが残ってしまったと、自分たちの状況を自嘲気味に話した。

「ひまわり畑？」

「ああ、そうだ」

彼女の別荘へ行くことと決まってから兄さんに呼び出された。また説教されるのかと思つて来てみれば聞いたことのない場所を聞かされた。あの辺りにそんな場所あったらどうかと記憶を巡らす。だが特に思い当たることはなかった。それでも兄さんは当然知っているかのように話を進める。

「場所はこの地図でわかるだろう。結華ちゃんの体調を見て連れて行ってやれ、お前が行く頃にはちよつと良い頃合だろうからな」

「ちよ、ちよつと待つてよ、兄さん。なんでいきなりひまわり畑なんだよ？ そんなところに連れて行って何かあるのかよ」

そこまで言つて知らなかったのか、と改めて説明された。自分の知らないことでも兄さんは知つている。相変わらずだと思つ反面、自分との差がどこにあるのか腹立たしいときもある。だが、それも育てられ方の違いの所為だろう。兄さんは立場上、知らないことがあつてはいけないのだ。

「別荘地の奥に岩城家が管理する土地があるのは知つてるな？ その一角に向日葵畑があつたんだ。昔は花祭りとかで季節ごとにいるんな花を育て、観光客を呼んでしたらしい。俺たちが子供の頃はその祭りがまだ残つていたはずだ。時代とともに下火になつて今では趣味程度に花を育てているそうだ」

「で、そこに何の意味があるんだよ」

「…話は最後まで聞け。結華ちゃんの子供の頃、その向日葵畑に行つてる。偶然見つけたものだろうが、相当気に入つてたようだ。あの別荘に出入りしなくなつてからは見てないだろうから、連れていつてやれば喜ぶだろう。きつと今は治療の毎日だろうから、気分転換くらいにはなるだろう？」

そう語る兄さんは自分のことなど見ていないようだった。本当に彼女のことを想い可愛がつてきた証拠だ。義姉さんがこれを聞いた

らどう思うだろうかと心配するが、兄さんのことだからうまく立ち回るのだろう。

どうして彼女の相手が兄さんではなかったのだろうと考えるときがある。そうであれば最初から誰も傷つかなくてもよかったと思う。彼女が悲しい想いをするのもなかっただろう。

「でも今は趣味程度って…思い出と違ってがっかりするかもしれないだろう？」

「ああ、だから岩城氏には連絡してある。今年だけは当時の向日葵畑を再現してくれるように頼んであるからまあ心配ないだろう。念のため一度下見には行って欲しいけどな」

どこまでも準備は完璧だ。自分が心配する隙など微塵も見せない。結局自分は兄さんの描いた道をただ歩くだけなのだろうか。彼女に会いに行つて何かが変わるのだろうか。

自分には自信がなかった。

彼女に会いたいと思う気持ちが強くなればなるほど、拒絶されたときのことを考えてしまいに進めない。ただ今行かなければ確実に後悔することだけはわかっている。

だから行つてからのことはすべて自分で決めたかった。だが彼女のことを何もわかっていない自分にできることは少なく結局兄さんに頼ることになってしまふ。一度だつて彼女と向き合っていない証拠だ。

「これが当時の写真だ」

広大な敷地には一面、鮮やかな黄色のひまわりが咲いていた。これを彼女は幼い日に見ていたのか。その風景と小さな彼女が重なり、心が洗われるような気がした。

「兄さんは行ったことあるの？」
「…ああ、一度だけ行ったことがある。初めて結華ちゃんを見た場所だ」

岩城氏は歩きなれた様子で前をどんどん進んでいた。

さすがに外になれていない自分には少々きつい。降り注ぐ太陽の熱で汗ばんでいるのがわかる。たまには運動でもしておかないとまずいなと思った。

時間にしてみればそう長くはない。車を降りて十分、十五分というところだろう。別荘から歩いたとしても三十分程度とみている。

午前中は気温が上がる一方のため彼女を連れてくるわけにはいかない。やはり一度下見に来ていて良かった。

「着きましたよ」

そう言われて顔を上げた。

広い田畑の真ん中に突如現れた黄色いひまわり。これから太陽の光を思う存分浴び大輪の花を咲かせるのだろう。兄さんに見せてもらった写真と何ひとつ変わらない風景が広がっていた。

それを見たときの彼女の姿を想像してみた。たぶんそのときに初めて彼女の喜ぶ顔を見ることになるのだろうと思うとなぜだか嬉しくなった。

自然の花をこんなにも見たことは今まで一度もなかったように思う。会社や自宅に飾られている花を横目に見ることはあってもじっくりと鑑賞したことはない。多くは造花であり美しいものではあるのだろうが、それ以上は何も感じない。

だが、今は違う。目の前の花には生命力を感じるし力強さと優しさを感じ取ることができる。彼女に早く見せたいと思う。自分だけが見ているなどもつたいないと思ってしまうほど惹かれた。

「一週間も経てば見頃になるでしょう。一カ月程度は楽しめると思えますよ」

今はまだ満開ではないという。これでも十分キレイだと思うが育てている本人が言うのだからそうなのだろう。できれば一番きれいな状態を見せてやりたい。

岩城氏に礼を言つてその場を後にした。車の中でどうやって彼女を誘おうか考えている自分が可笑しかった。今まで考えもしなかったことだ、考える必要がなかったからと言つたほうが正しいかもしれない。

自分の意思で会いたいと思つたのは一度だけ、最初の顔合わせのときだ。それ以降は個人の意思で会う、ということにはなかったように思う。必要だから会う、家に来てもらうということがほとんどだったのだ。婚約していたにも関わらずふたりでどこかに出かけたことはないし、誘つたことももちろんない。恋人同士ではなかった関係、それが何よりも問題だったのだ。

別荘に帰つてすぐに彼女のことを尋ねたがまだ部屋で休んでいる

と言われた。熱は少し下がったらしいがまだ安静にしているほうがいいと、主治医が判断したそうだ。

ああ、そうだ。彼女を誘う前に断りを入れなければならないのだ。「真帆さん、先生は部屋にいるのかな？ ちょっと話があるんだけど」

「今製薬会社のかたがお見えですのでお会いになるのは無理だと思います。伝言はしておきますので時間が決まりましたらお知らせいたします」

「…そう、ありがとう」

部屋の窓から外を眺めると見覚えのある会社名が印字された車が止まっていた。来栖グループの傘下にある製薬会社だ。薬の補充にただだけかと思ったが、その社用車の横に見慣れない車が止まっているのが見えた。担当の営業が来ているだけではないのか？

様子を伺うように覗き込んでいると外に出てくる人の気配を感じた。じっと見ていると営業担当と見られる小柄な男といかにもエリートといった風の男が出てきた。その後ろから出てきた姿を見て一瞬戸惑った。が、先に体が動いていて気が付くと一階まで下りていた。

「…由紀恵、どうしてここに…？」

呼び止められて彼女はゆっくりと振り返った。

同行していたふたりの男に「先に行つて」と言うにつこりと笑いながら自分に近づいてきた。そして久しぶり、と頭を下げた。

「ずいぶん驚いた顔してるわね。あたしがここにいるのがそんなに不思議？ これでも一応社員なのよ」

「ああ、そうなんだけど…現場を回るような立場じゃないだろ？」

「失礼な言い方ね、外に出るのだから時と場合によるわ。今回は特別かしら？ 大事なクライアントが長谷家のお嬢様ですもの、他人に任せるわけにはいかないでしょ？」

言いながら二階の窓を眺めた。今はまだ休んでいる結華の部屋だ。立ち話もどうかと思いい部屋に案内した。向かい合わせに座ると不思議な感じがする。まさかこんなところで再会するなど思ってもみなかったことだ。

滝澤由紀恵たきざわゆきえは幼なじみでもあり、結華との婚約が決まるまでは彼女が候補に上がっていた。当時タキザワ製薬は国内でもトップメーカーであり業績も好調だった。だが、バブル崩壊と同時に負債が膨らみ、来栖グループが救済を申し出た。

立て直しには成功したものの、来栖グループの傘下に入るようになった滝澤家との縁談が進むわけもなく彼女は候補から消えていた。子供心に「大人の事情」というものを知ってしまったのだ。

「で、あなたは どうしてこんなところにいるのかしら？ 婚約は白紙になった、って聞いたけど？ 今さら彼女のお見舞い？ 何も知らなかったというのにずいぶん思い切った行動に出たわね」

「…いいだろ、別に」
「そう？ まあさしずめ裕臣さんの入れ知恵つてとこかしら。それで？ 彼女にはもう会ったの？ 部屋まで用意されてるんだから会ってるわよね。それにしてもあなたもずいぶん身勝手な人ね、少しは相手の気持ちを考えてみたらどうなの？」

その笑顔をはうらはらに嫌な言い方をする。どうやら自分の状況は筒抜けのようだ。工作上兄さんとよく会っているからそのときにも聞いたのだろう。こちらから言うことは何も無い、彼女は知っているながらそんな言い方をするのだ。

「僕だって勢いで来たわけじゃないさ、ちゃんと考えてる。彼女の体調が良くなったらいろいろ話そうと思ってるし、しばらくは休みをもらってるからここにいてるつもりだ」

ここへ来るまでかなり時間を要した。その間に気持ちが変わることもなかったし、時間が経てば経つほど会いたくて仕方がなかった。だから他人にとやかく言われる筋合いはないと思っていた。

だが、彼女からは溜め息と一緒に落胆したような言葉が出てきた。

「その程度なら、今すぐ帰ったほうがいいわ」

彼女の表情から笑顔は消えていた。まっすぐに自分を見つめる視線がなぜか痛いほど突き刺さった。

夜になってまた彼女は熱を出したと聞かされた。仕方なくひとりで食事をしているとメイドの真帆が珍しく話しかけてきた。

「昼間の方とはお知り合いなのですか？」

「え？ ああ、幼なじみなんだよ。とは言っても会うのは久しぶりだったんだけどね。まさかこんなところで会うとは思ってなかったから驚いたけど…それがどうかした？」

「いえ、初めて来られた方なのでどういう方なのかと思ひまして」

彼女の言葉に引つかかった。由紀恵は「大切なクライアントだから他人に任せられない」と言っていたはずだ。だが、今まで一度も顔を出していないとなると話が違ってくる。やはりわざわざここへ来たのだ、自分のいるときに。でもどうしてだろう？

昼間の話を思い出していた。彼女はわざわざここへ結華のことを言いに来たのだ。それも自分の意思ではないだろう。誰かに指示されて、となればひとりしかない。

「由紀恵にそんなこと言われる筋合い、ないと思うけど？」

「そうかしら？ あなたも医療に従事するものならもっと考えてもいいはずよ？ とは言っても無理かしらね、書類ばかり相手にして肝心の人の事は他人任せですのものね」

反論はできなかった。確かに彼女の言うとおり自分は医療に携わっているという実感がない。いつも目にするのは書類のみ。企画書と数字の羅列を見比べる日々だ。製薬会社の人間はまだ大学や病院を回ったりする分人と接しているといえるだろう。それに患者を目

の当たりにすることも多々ある。

「あなたは自分の都合だけを考えてここにいるのよ。彼女の気持ちなんて考えないでね。自己満足のためだけに来たのだったら今のうちに帰ったほうがお互い傷つかないで済むの。だってそうでしょう？ 彼女の命は限られてるのよ。中途半端に優しくしてどうするの？ それであなたは気が済んだら帰るの？」

ハツとした。

確かに休暇は取った。だがそれも一カ月程度だ。彼女に自分の気持ちをぶつけて満足した後、どうするつもりだったのだろう。実際そこまでのことは考えていなかった。由紀恵に言われたとおりだ。彼女には残された時間が少ない。ここで静かに穏やかに過ごそうとしている彼女に波風を立てたのは自分だ。

「…厳しいこと言うようだけど、彼女を最期まで見る覚悟がないならここへ来るべきではないのよ」

翌朝、やはり結華の容態はよくならなかった。

改めて自分の考えの浅はかさに気付かされた。彼女の病状を軽く考えていたわけではないが、元気な彼女の姿を見たためかどこかで「すぐに良くなるだろう」と思っていたのかもしれない。

仕事はまだかなり残っていた。朝メールを開くと兄さんからの指示はいつも以上に入っていたし資料の添付も多かった。だがどうにも手につかない。朝食を済ませ車に乗り込んだ。

なぜか急に見たなくなったのだ。大きく咲くひまわりの花を。

車を止めシートを倒し窓の外に見える花を見ていた。とても静かだ、聞こえてくるのはせみの鳴き声と風の音。世間から切り離されたような空間で自分自身と向き合っていた。

由紀恵はおそらく兄さんに頼まれてここへ来たのだろう。自分が一カ月程度しか休暇を取らなかつたことに対して不満を漏らしていた。その時点で兄さんは自分の考えの甘さに気が付いていたのだろう。もっと長く休んでもいいと言われたが仕事を理由に断つた。それが妥当な選択だと思い込んでいたのだ。

ところがどうだろう。自分の選択は間違っていたことに気付いた。このままではいけない、何も変わらない。もう二度と彼女を苦しめたくないと思つて来たのに、自分はどこも成長していない。

覚悟が必要だった。

すべてを背負う覚悟が。大切なものを二度と手離さないために。

ひまわりの花と同じように空を眺めた。自分の手には届かないと諦めていた彼女。今もなおその手は遠い。それでも、自分もあのひまわりと同じように背伸びをしようと思う。

彼女を最期まで守るために。届くことはなくてもせめて近くまでいけるように。そう胸に刻んでその場を後にした。

「ああ、先生？　ちょうど良かった。今お時間よろしいですか？」

車を下りて玄関を入ろうとしたところ主治医に偶然出くわした。どこかへ出かけるのだろうか、いつもの白衣姿ではなく普段着だ。帰ってくるのがもう少し遅ければ入れ違いになっていただろう。

「これからランチにでかけようと思つてたんですが…よければ一緒にどうですか？　無理にとは言いませんが」

「そうですね、それもいいですね。先生に話したいことがあります。しかし、ここより外のほうが都合がいいかもしれませんからね」

彼女のことは診ていなくて大丈夫なのだろうかと思っただが、聞くより早く「今は状態が落ち着いてますので」と特に心配はいらないようだった。看護師がそばについているから何かあれば連絡が入るようになっていられるらしい。そのためそう遠くには行きませんが、と付け加えられた。

自分の車に乗り込もうとしたとき「乗りませんか？」と言われたがやりわり断った。だが駐車場が広くないのだの、一台のほうがいいの言われ仕方なく助手席に座ることになった。

「それで、私に話して何でしょう？　質問によってはお答えできないこともあります」

彼女の病状については一切答えないという意味だろう。兄さんからある程度聞いているためわざわざ質問する必要はない。話というよりお願いといったほうが正しいかもしれないと言っと、主治医は予想していなかったのか首を傾げた。

彼女を連れて行きたいところがある、そう切り出すと主治医は一瞬表情を曇らせた。どうやら自分は難題をふっかけたらしい。慌てて言い直した。

「連れて行きたいと言っても散歩程度です。そうですね、歩いて三十分ぐらいなんですが。何も今すぐに、とは言いません。容態が落ち着いてる時だけでいいんです。どうでしょうか？」

「…そうですね。来栖さん、あなたは結華さんの病状をどのように理解していらつしやるのですか？」

自分が質問したのに、逆に質問で返されて困惑した。

余命短いことは知っている。だが、それ以外に自分は何を知っているのだろうか？ ふと夜中に苦しむ彼女の姿が思い出された。最初ここへ来たときに会った彼女とは別人のように弱々しい姿。今もなおベッドから出られない彼女の容態が落ち着くなんて有り得るのだろうか。

黙っているとそれが返事だと思ったのか、主治医は小さな溜め息を漏らしながら話を続けた。

「結華さんには、ひとりで歩いてどこかへ行けるほどの体力は残されていません。三十分の散歩も彼女にとっては相当負担がかかります。ただ…車椅子が部屋に置いてありますので、それに乗ってというなら承諾しても構いません。しかしそれでも大丈夫だという保障はありません。もし結華さんが倒れたり容態が悪くなったとき、あなたには正しい対処をしてもらわなければなりません。そこまです責任を持てますか？ 彼女を守る自信がありますか？」

昨日、由紀恵に言われたことがフラッシュバックした。

主治医が言っていることはもつともで、ここでも自分の覚悟が試されているのだと思った。でももう迷いはない。主治医の顔をまっすぐ見て「覚悟はできています」と短く答えた。

自分の気持ち伝わったのだろうか、後で看護師に説明させますと言ったときその話題は終わった。承諾を得られた安心感が心を満たしていた。

だが、当の彼女は一向に良くなることなく自分でも苛立っているのがわかった。もう間もなく見頃を迎えるであろうひまわりの花。早く見せてあげたいと焦るばかりだ。だからと言ってただ待っているだけでは何も変わらない。彼女と一緒にいられない時間は仕事と看護についての勉強をした。

「え？ 本当に？」

夜食を持って来た真帆が何気なく発した言葉に反応した。メイドは最近になってようやく自分から話し出すようになり、こちらが何も聞かなくても彼女の情報を教えてくれるようになった。

「ええ、今日先生がおしゃってましたから。明日ぐらいから食事ができるようになるだろうからシェフに伝えておいてと言われました。そろそろ落ち着いてくる頃ではないですか。以前も熱を出したことがありますでしたがそのときと同じことを聞かされましたから」

今夜は熱が出ていないという。主治医によればこのままいけば大丈夫だろうという見解だそうだ。どうやら血液検査の結果も問題無しとしているらしい。

長かったがようやく彼女と再度対面できる日が来るのだ。今度こそ失敗はできない。どんなに迷惑がられても一緒に過ごすことから始めなければ。嫌な顔をされても無言でもいい、ただ彼女と同じ空

間にいたい。前のような壁は作らずに。

翌日、彼女が寝室から出られるようになったと聞き仕事もそこそこに部屋を飛び出した。気持ちが抑えられるか自信がなかったが、彼女の部屋に向かう足取りは軽かった。

視界に入った彼女はまだ顔色が優れなかったが、食事をしているのを見て安堵した。自分がまだいることに驚いているようだったが構いはしない。一ヶ月の休暇をもらっているということも伝えたが、今すぐ帰れとは言われなかった。だが、やはり兄さんのことを気にしているらしい。

おそらく自分がここにいるということが誰から聞かされたのか考えているはずだった。だがいくら考えても兄さんしか出てこないはずだ。信頼していたからこそ彼女は病気のことを打ち明けただろうに、それが弟である自分の耳に入ったのは予想外だっただろう。

「ところで貴史さん：私がここにいると、誰から聞いたんですか？このことはごく僅かな人しか知らないはずですが」

「え？ ああ、それはまあ企業秘密つてことで。こっに見えて僕は結構広いネットワーク持つてるんだよ？ あまり見くびらないで欲しいなあ」

「そうですか：近しい人から聞いたわけではないんですね？」

これに対しては肯定も否定もしなかった。

彼女は知っていてあえてこんな風に聞いたのだ。自分に話した兄さんのことをどう思っているのだろうか。それとも自分が無理に聞き出した、とまっているのではないだろうか。

まだ本当のことを言うには時期が早い。彼女の心を開き打ち解けてから出ないと否定されて終わってしまう。それだけはどうしても避けたい。

「…兄さん、今何て言った？」

一瞬間聞き間違えたかと思うほどの衝撃を受けた。まさかそんなはずはないと信じたい自分がいる。だが兄さんは淡々と話を進めた。

「結華ちゃんを初めて見たとき、言葉にはできない感情が生まれたよ。こんな一目惚れみたいなのが存在するなんて思いもしなかったよ。俺にはもう汐梨という決まった相手がいた、だから誰かを好きになっても変えられることはできなかつたんだ。でも自分の気持ちに嘘はつけない。叶うことはなくてもそつと彼女のことを想って過ごそつと決めただ」

自分の目には仲睦まじい兄さんと義姉さん。自分もあんな風になつて誰かを幸せにしたいと思っていた。理想のふたりだと思っていた。だが、当の兄さんは心に別の人を想っていたんだ。それが自分の元婚約者だなんて笑い話にもならない。

運命はなんて残酷なんだろう。

想い合っている同士が一緒にいられないなんて、いや実際自分と彼女が婚姻を済ませていたらもつと残酷な日常が待っていたに違いない。だが、兄さんは自分が考えていることは違うことを話し始めた。

「俺は…本当は結華ちゃんから愛情をもらうべき人間ではなかったんだ。それなのに彼女から十分すぎるほどの気持ちをもらった。本来ならお前が受けるべき愛情を、な」

愛情をもらうべきでない？

どういう意味かわからなかった。彼女が誰を想うかは自由なはずだし、それを喜んでこそ申し訳なく思うのはお門違いだと思った。

よほど自分は不思議そうな顔をしていたのだろう、兄さんは小さく笑うと「あの日」のことを静かに話し始めた。

その日の夜、彼女と無理に食事を一緒にとる約束はしたものの、何を話していいのかわからず終始黙ったままだった。このままではいけないと思いつつも会話が見つかからない。まさか体調のことを聞くわけにもいかず黙々と食べ続けた。

彼女のほうはそう食欲もなくなさそうな表情で俯いてた。だが、自分が食べ終わるまで席を立つことはなかったで、完全に拒絶されているわけではないんだなどどこかで安心していた。

「…この食事はお口に合いますか？」

「え？ ああ、とてもおいしく頂いているよ。ちょっと味付けが薄い気がするけど、結華さんのついでに作ってもらってるからね、贅沢は言えないよ」

「いえ、それならシェフに伝えさせます。遠慮なさらなくてください」

気にかけてもらえていると思うと嬉しかった。だがどう返事していいのかわからず黙っていると執事呼び寄せ何か話していた。なぜ一言「ありがとう」が言えなかったのか、この日寝るまで後悔していた。

彼女の夜は早い。食欲がないためか長時間起きていることが辛いのだろう。仕事が片付き少し話し相手になってもらおうと部屋を訪ねても返事がないことがほとんどだった。

ベッドに横たわる彼女の顔をもう何度見ただろう。

こんなに近くににいるのに何も知らない。何もわかり合えていない。会話の糸口が見えず黙って食事をしているときも彼女のほうから話しかけられた。慎重になればなるほど言葉が出ない。

本心をさらけ出すのが恐いのだろうか。自分はずっと壁を作って彼女と接してきた。その内側を見せて彼女はどう反応するだろうか？

「結華さん、僕はここにいていいんですか…？」

返事が返ってくるはずもなく、眠っている彼女の手を握りながら自問自答した。

ひまわり畑に彼女を連れて行くことに主治医は許可を出さなかった。まだ抵抗力が落ちている時期なので次の血液検査まで待つて欲しいと言われ保留になったままだった。

仕方なくひとりで出かけ、戻ってきてから部屋で仕事をしていた。

だが、これでは彼女とすれ違いの日々が続いてしまう。そう思い仕事を午前中に片付け、彼女が寝室から出てくる昼食から寝るまで、なるべく一緒にいるよう心がけた。

嫌な顔をされるかと思っていたが、最初ほど同じ部屋にすることを拒まれなくなっていた。とは言っても無言の時間のほうが長い。聞きたいことは数え切れないほどあるのに、どれも切り出すことができず当たり前障りのない質問になってしまう。

そんな些細なことでも初めて知ることが多かった。これまで長い間彼女と顔を合わせてきたというのに一度も知ろうとしなかったことが浮き彫りになった。そう、自分は彼女の好きな食べ物も気に入った映画も知らなかった。学生時代どんな風に過ごしていたのかもここで初めて聞いた。

彼女からの質問は思っていたより少なかった。自分に興味がないということなのかもしれない。そう考えると気分は落ち込むが沈んでいる場合ではない。彼女はまだ自分の後ろにいる兄さんのことが気になって仕方がないのだろうか。

「結華さんは花が好きなんだね」

この日は体調がいいのか昼食後に花を生けていた。華道、というよりアレンジフラワーといった感じだろうか。小さな籠にいろんな種類の花を挿してはバランスを見ていた。

「好きというより…子供の頃からひとりで行えること以外は無理でしたから」

「へえ、でもピアノとか踊りも習ってたんだよね？ それはやめちやったの？」

「…他の習い事は先生が来てくださってるときはいいけれど…ひと

りになると誰も聴いてくれないし観てくれませんか、かえって寂しくなるんです」

初めて知ったかもしれない。

彼女が寂しい思いをしていたなど考えたことがあつただろうか？
生まれたときから自分という婚約者が決まっついていて不憫だと同情したことはあつた。だが、それだけだ。裕福な家庭、両親と兄弟がいて可愛がつてくれる祖父母がいて、周りから見れば恵まれた環境にいた彼女は、人知れず哀しんでたのだ。

本当なら自分がそれを分かち、埋めていかなければならないというのに。ひとりで彼女は何を思ったのだろうか。自分はなんて気楽で無力なんだろうか。

「それ、もらつてもいい？」

彼女の手で生けられた花籠。自分のために活けたわけでもなければ目的があつて作られたものでもない。ただ彼女の息吹が感じられるその花をそばに置いておきたいと思い申し出た。

予想していなかつた言葉に驚いたようだったが、「こんなものでよければ」と差し出してくれた。

数日後、主治医から血液検査の結果を聞かされ容態が安定していることを確認するとさつそく彼女の部屋を訪れた。この日は昼食もそれなりに食べられたようで見ていて安心した。

夕方に近づくとつね曇るとなっていたので予定を早めることにした。さて、どう切り出そう？ 連れて行きたいところがある、こう言つと身構えてしまうだろう。外へ出かけよう、どこへと返事されそうだ。

「結華さん、散歩にでも出かけない？」

突然何を言い出すのだろうか、といった表情でじっと見つめていた。

案の定、彼女からは断られたがそれで諦めるわけにはいかない。隠してあるつもりだろうが寢室の一角には車椅子が置いてある。それを指して自分が押すというと驚いた様子で黙ってしまった。

「大丈夫、先生にも許可をとってあるから。いい気分転換になると思うよ？ 僕がここに来てから結華さんが外に出かけるの見たことないからね」

ほらほら、と言いながら強引に車椅子に座らせた。隣の部屋では真帆が外出の準備を始め彼女は渋々頷いた。面白くなさそうな表情をしていたがそれも今だけだと自分に言い聞かせて玄関を出た。

外は思っていたよりも暑く彼女の体調が心配になった。

帽子を深くかぶり俯いた彼女はどこへ向かっているのかまったくわかっていないだろう。早く見せてあげたいと気は焦っていたが、車椅子は思っているより振動を拾う。彼女に負担がかからないよう気を配り慎重に歩いた。

道中は無言だった。何度か水分を補給させるために話しかけたがそれだけで会話らしいものはなかった。外へ出ることがかえって体の負担になっていないだろうかと気になっていたが、顔色をうかがうこともできなかった。

「着いたよ」

ゆっくりと車椅子を止めて声をかけると彼女は顔を上げた。

今、その瞳にどう映っているのだろう。懐かしいひまわり畑、しばらく黙ってその花を見つめていた。

本当なら見頃を迎えていて大きな花を咲かせているはずだったが、連日の天候不良に気温が上がらず写真のような風景は広がっていなかった。岩城氏は申し訳なさそうに謝っていたがそればかりはどうしようもない。

もう少し待ってから連れてこようかとも思ったが、いつまた彼女の容態が変わるとも知れない毎日の中でそれも難しい話だった。

黙っていたので気に入らなかつたのだろうかと言っていると表情が少し緩んでいた。過去の思い出に浸っているのだろうか。嫌な思いをしていないことだけは確かのようにホツとした。

そのうち彼女が「キレイね」と呟いたので慌てて取り繕った。だがあまりに不自然だったのだろう。彼女の表情から「何、気持ち悪いこと言ってるの？」と読み取れて茶化してその場をやり過ごした。

「休暇の延長届け、出してみようかなあ」

「や、やめてください…」

「あはは、冗談だよ。気が済んだら言っつて、連れて帰るから」

本心だったか冗談だと思われたようだった。

ここへ来る前には休暇を一ヶ月として受理してもらった。だが、それではずつと彼女のそばにいられない。延長届けを出すことは簡単だろう、だが、受理してもらえると話とは別だ。

自分の実家に経営者がいるとはいえ自分は一社員だ。普通なら一ヶ月の休暇すら通らないだろう。現に自分はここで仕事をしているから実質、休暇扱いにはなっていないと思う。兄さんがどう立ち回っているのかわからないが、親が何も言っつてこないことをみると自分が出張扱いにでもなっつているのだろうか。

そんなことを考えていると彼女の息遣いが荒くなっつてくるのを感じた。弱々しく「もう、いいわ」と言っつとそのまま目を閉じた。

「結華さん！？　しつかりして！！！」

その声をかけたが彼女から反応はなかった。

暑さの所為か、外出の所為か、彼女の体力は自分が思っている以上に消耗していたようだ。看護師に聞かされたとおり処置をして急いで連れて帰った。万が一のことを考えてひまわり畑のそばに車を待機させていた。後部座席に寝かせ、その手をじつと握っていた。

「先生、お願いします！！！」

「結華さんをすぐにベッドへ連れて行って。それと点滴を用意してあるから、すぐに採血するよ。急いで！！！」

別荘へ戻ると連絡を聞いた主治医は看護師に指示を出していた。

酸素マスクを取り付け、彼女の細い腕に針を刺し点滴を始めると同時に採血をした。寝室ではいくつかのモニターが用意されており血圧、心電図と順番に映し出された。

自分は何もできなかった。

ただ見ているだけでそれすらも辛くなっていた。由紀恵の言葉が思い出される。覚悟しているはずだったのに実際に気を失った彼女を見ると手が震えた。動揺してここへ連れて帰ることだけで精一杯だった。

処置が行われている間、隣の部屋で待つことしかできなかった。時間が長く感じられる。立ったり座ったりと落ち着かない行動をとっていると、主治医が寝室から出てきた。

「軽い貧血と熱中症を引き起こしたようです。落ち着いてきたのでもう大丈夫でしょう。点滴が終わるころには目を覚ますと思いますよ」

礼を言い、頭を下げると寝室へ向かった。

先ほどまでのような酸素マスクやモニターは外されていて静かに眠る彼女の腕を通る点滴だけが残されていた。ベッド脇に座って彼女の手を握る。その温かさに触れていると平常心が戻ってきた。

よかった、彼女の意識が戻ったら今まで以上にそばにいよう。そしてもつともつといろんな話をしよう。いや、その前に今日のことを謝らなければいけない。

そんなことを考えていると彼女が目を覚ました。思わず「よかった」と口に出た。どうやら記憶があいまいなようで何か思い出そうとしている。ひまわり畑から帰ろうとしたところまで思い出して口ごもった。気を失ったことを伝え今度からはもう少し涼しい時間に散歩に出かけようと提案したが返事はなかった。

「じゃあ、僕は自分の部屋に戻ってるから、何かあったら呼んで」

そう言ってイスから立ち上がった瞬間腕を掴まれた。

一瞬、何が起こったのか把握できなかったが、すぐに彼女に掴まれたのだとわかった。こんなことは初めてだ。何を言われるのだろうかと身構えていると彼女は俯きながら口を開いた。

「じ、ここに…いてください」

驚きを隠せなかった。

動揺していたがそれを隠し笑顔らしい表情で「いいよ」と答えた。顔が引きつっていなかったか気になったが彼女は自分の顔を見ていなかった。彼女を寝かせ、その手を握ったまま自分はイスに座りなおした。

思いもしていなかった彼女から呼び止められて嬉しくなったが、それをどう表現していいのかわからなかった。何か気の利いた言葉でも言えればいいのだがそんな器用なことが自分にできるはずもなく。こんなときに兄さんならどうするだろうと考える。その時点で自分は自分の不甲斐なさを痛感する。

いい加減、兄離れをしなければならぬ。今までどれだけ甘えて育ってきたか、そんなことを考えることもなく好き勝手生きてきた。自分は変わらなければいけない。でも変わるのだろうか？

「：貴史さん、あの：向日葵畑には、前にも行ったことが？」

「いや、今回ここへ来て初めて行ったんだけど、どうかした？」

「いえ：なんでもないです」

彼女は何か言いたそうな表情をしていたが口を開くことはなかった。

偶然見つけた、という言葉はやはり嘘っぽかったのだろうか。だが、自分はその場所を知らず今回初めて行ったことは嘘ではない。ただ本当のことを言うということは兄さんの名前を出すことになる。まだ、それは隠しておきたかった。

「結華さんは？」

「え？」

「行ったことあるの？ あのひまわり畑に」

知っていながら聞いた。だが彼女は「いえ」と小さく答えただけで肯定とも否定とも受け取れる返事をした。知られたくないことなのだろうか。幼い頃訪れていたということらしいがそれ以外に何か

思い入れがあるのだろうか。

気になるのになぜか聞くことはできなかった。大切な思い出に土足で踏み入るような真似はしたくなかった。彼女の過去を気安く聞ける立場ではないのだと思い込んでいた。

その後無言の時間が続いた。それでも彼女は部屋から出て行けとは言わず、自分が手を握っていても振り払おうとはしなかった。もう何年もこうして過ごしている夫婦のような錯覚に陥って、心地よい温かさに悪い気はしなかった。

「来栖さん、ちょっとよろしいですか？」

数日後、製薬会社の車が止まっているかと外を眺めていると、珍しく主治医が訪問してきた。

こここのところ毎日のようにひまわり畑へ散歩に出かけている。そのことで何か話があるのだろうか、それとも彼女の身に何かあったのだろうか？ どちらにしても自分には良くない知らせだ。

仕事の手を止めて主治医を招き入れた。お茶でもと真帆を呼ぼうとしたが「すぐに終わるので」とやんわり断られた。どうやら見られたくないらしい。

「何ですか？ 改まって僕に話なんて」

「結華さんのこと以外にありませんよ。彼女が気にしていました、あなたがどの程度知っているのかと。まあ私から言えることはない」と濁しておきましたが

「…それで？」

そんなことを言いにはわざわざ来たわけではないだろう。遠まわしに言葉を繋ぐくらいなら単刀直入に言われたほうがいい。

「あなたはすべて知っているんでしょう？ それを前提でお話します」

「……」

「最近の結華さんは体調が良いように思えます。ですがそれは薬の副作用が軽減されているせいだと思われます。薬を切り替える時期はとつくに過ぎてますが…このことの意味がわかりますよね？」

最近投薬の後でも気分が悪くならないようにで安心していたが、どうしたら見当違いだったようだ。

抗がん剤はある程度投与すると抗体ができ効き目が弱くなる。そのため定期的に薬を変えろのだが新しい薬が体に合うとは限らない。おそらく次の薬に切り替えたいのだろうが、この言い方からするとそう簡単な問題ではないのかもしれない。

「…使える薬がないかもしれない、ということですか？」

「さすがに飲み込みが早いですね。かなり難しい状況です。いくつか試してみているのですが結華さんの体が受け付けられないらしく副作用が酷いです。彼女のほうもそれほど治療に熱心ではないので、副作用が強くと途端に拒絶してしまうんです」

わからないことはない。よく会社で患者の体験談など記載した社報など読むが、副作用は相当辛く何度もやめたくないと、多くの人が思うらしい。何より治る見込みがあればこそ耐えられるのだろうが、余命僅かな彼女にしてみればそこまでして何の意味があるのだろうかと思っても不思議ではない。

自分に何ができるのだろうかと考えた。まさか説得したところで応じることもないだろう。少しでも長く生きて欲しい、そう思うのは自分のエゴなのだろうか。

「…幸い、今はあなたのおかげで結華さんもがんばれるようですよ」

「え？」

「自覚はないようですね、まあそれは結華さんも同じみたいですが。無意識かもしれないませんが、彼女は確かに変わりましたよ。何に対しても投げやりでどこか排他的だったのに、少し前向きになりました。だから：あなたにはここにいてもらわないと困るんです」

主治医の言葉を聞いて驚いた。彼女がそこまで心を開いてくれるとは思ってもいかなかったからだ。前のような壁はなくなっていると思うようにはなっていたが、それすら自惚れかもしれないと首を振った。

こんな自分でも彼女の治療の励みになるのであれば力になりたい。それが自己満足だと言われても自分のエゴだと思われても。一日でも長く彼女と一緒にいたい。

そう思った矢先、予想外の電話が鳴った。

相手は兄さんだからつきり仕事の話でもあるのだろうかと気楽に通話ボタンを押した。だが第一声で自分の浅はかさ思わず舌打ちした。

『急用だ、明日戻って来い』

理由を聞ける状態ではなかった。兄さんからは無言の圧力がかかっていて従うほかなかった。

彼女にどう伝えようか悩んだが結局要点だけ話した。用が済んだら戻ってくると言おうと思ったがやめた。主治医の言い分では自分は決して嫌われているわけではないのだろうが、そこまで自信が持てなかった。戻ってくる、と伝えて嫌な顔をされたらどうしようかと考えるととても言い出す気分にはなれなかった。

早朝、彼女の顔を見ずに別荘を後にした。

高速道路を下りて会社へ向かおうとしたとき電話が鳴った。相手は兄さんだ。後二、三十分で会社に着くと言つと、「家に戻って来い」といつもとは違った言い方だった。

家ということは仕事のことと呼び出されたのではないということだ。嫌な予感がよぎったが今さらどうこう言っても始まらない。とりあえずは事の成り行きを見守るしかない。

「ただいま戻りました」

久しぶりに踏み入る家はどことなく緊張の糸が張り詰めているように思えた。無理もない、普段ならこの時間いない父がいるだけで使用人の様子も落ち着かないようだ。

どうやら自分は待たれていたようで、両親と兄さんは席に着いていた。視線で「さっさと座れ」と合図され両親と向かい合う、兄さんの斜め横の席に座った。

「貴史、私は何も聞いてないぞ」

挨拶や世間話といった前置きなく父はいきなり本題に入った。

やはり自分が長谷家の別荘へ行っていることが耳に入ったらしい。兄さんがここにいるということはこのことに兄さんが絡んでいることも知っているのだろう。

下手に言い訳するのはしないほうがよさそうだと判断し、自分も兄さんも黙ったまま父の顔を見ていた。

「貴史、長谷家との縁談は白紙に戻った、と言っただろう。先方はお前のことを気にかけてくれてはいるがそれはお前個人のことを思

つて、ではない。両家の関係はうまくいつている。今さら長谷の娘に会う必要はない、それくらいのごことは理解できるだろう」

「…はい」

「少しは自分の立場というものを理解してもらわないと困る。裕臣、お前がついていながらどういことだ。弟だからと特別扱いしているとそこからひびが入る。ゆくゆくは自分の首を絞めることになるということを覚えておけ」

兄さんは返事をすることなく黙って聞いていた。何か反論するのだろうかと思っていたが、さすがに父に反抗するほど愚かではないらしい。兄さんにはうまく立ち回れなかったのだなと意外に思った。

本題はここからだ。おそらく長谷家の別荘へ行くことを禁止されるだろう。だが、今さら後には引けない。彼女の最期を見ると決めたのだ。たとえ父でもそれだけは邪魔されたくない。話はそれだけのだろう。父は黙ったまま自分たちを見ていた。こちらから話さなければこのまま解散、となってしまう。

「…では、許可をください」

「許可をもらえますか？」

少し間があったというのに、兄さんとほぼ同じタイミングで同じようなことを口にした。だが自分のほうは顔色をうかがう聞き方だ。こんなときまで兄さんより劣ってしまう自分が情けなかった。

父は黙ったままで肯定も否定もしない。自分がそう提案することは承知の上だったのだろうか、表情すら変わらず何を考えているのかわからなかった。

きつと自分はこういところ父親似なのだと思う。兄さんも内面は決して見せないが人当たりが良く当てに隙を作らせる。そこは母親似で加えて社交的だ。目の前の父を見ていて何も話せなくなる、

ふと彼女も自分に対してそうだったのではないかと改めて思った。

「…条件がある」

鋭く、冷静に話を切り出した父に反論する隙があるはずもなく、自分はその「条件」を呑むことでひと時の自由を手に入れた。後から思えばこれが仕組まれたことだとわかるはずなのに、このときは無意識に気が付かないようにしていたのかもしれない。

予定では午前中に別荘へ戻るつもりだった。

だが、仕事ではない呼び出しがそう簡単に終わるわけもなく、加えて気持ちの切り替えに時間がかかり高速道路を下りた頃、太陽は自分の頭上であり暑さと眩しさが視界を埋め尽くしていた。

もう彼女は起きてきて昼食をとっている頃だろう。きっと自分がいないことに気が付いているだろう。朝黙って出てきたことを怒っているだろうか。そもそも再び戻って嫌な顔をされたりはしないだろうか。

急に不安な感情がこみ上げてきてアクセルを踏む足を緩めた。そして行き先を変更し別荘地を通り抜けた。

ひまわりの花は満開だった。

青い空をひたすら目指し、あの太陽に少しでも近づこうと必死になっっている。

手を伸ばせば拒絶されるかもしれない。恋焦がれるほど失ったときにひどく傷つくのかもしれない。でも…それでも今の自分には彼女しかない。

決心を固め車に乗り込むと別荘へと走らせた。

玄関を入ったときいつもに増して静寂に包まれていることに違和

感を抱いた。呼び鈴に気が付いた執事が出迎えてくれたが、その表情はいつもより曇っている。何かあったのだろうかと首を傾げると「実は」と今朝の出来事を話してくれた。

聞き終わると同時に主治医の部屋に向かった。相手の返事も確認せずに扉を開けると、たいして驚きもしない表情で座っている主治医と目が合った。

「…どういう、ことなんです？」

「ずいぶん早いお帰りでしたね、今朝のことならもう耳に入ったのでしょうか？ そのまま、それが事実ですよ。私のところに来られても同じ話をするだけですが？」

彼女は今朝、会いたい人がいると外出を願い出た。それが誰だかは言わなかった。もしかして兄さんに会いたくなつたのだろうか。会って自分が来たことを聞きたくなつたのだろうか。

ほんの少し心を開いてくれていると思っていた。好かれるとまではいなくても、自分は彼女のそばにいていいのだと思ひ込んでいた。しかしそれはただの自惚れでしかなかったのだろうか。

「…まったく、手のかかる人たちですね」

黙ったままの自分に、溜め息交じりで主治医が口を開いた。

「どうしてすぐに戻ると、結華さんに伝えてあげなかったんですか？」

「それは…」

答えられなかった。

自信がなかったといえばそれまでだが、仮に言わなくても伝わるだろう、という自分の悪い癖が原因だ。彼女に自分の気持ちを察してもらおうなど図々しいにも程がある。

「昨夜でも、今朝でもちゃんと結華さんに伝えていれば、あんなに取り乱すことはなかったんですよ？ きつとあなたがもう二度とここへ戻ってこないと思ひ込み、あんなことを言い出したんでしょうから。私は言いましたよね？ 結華さんが治療をがんばれるのはあなたがいるからだ、と」

念を押すように言われた。

あの時、その言葉をもっと素直に信じることができていればこんなことにならなかったのかもしれない。彼女が「どう思うか」ではなく自分が「どう思って欲しいか」を優先すればよかっただけのことなのに。

「…僕は、ここにいていいんでしょうか」

「それは私にではなく、結華さんにおっしゃってください。ちゃんと言葉にしないと伝わらないですよ、人の気持ちなんて」

言われなくてもわかっている、とは反論できなかつた。そう気が付いたのはつい最近で、未だに行動に表せない。いや、今日こそ彼

女に本当の気持ちと話そうと戻ってきたのに、今朝の事態を聞いてまた決心が鈍りそうになっていた。

「彼女は、今どうしてますか？」

「結華さんなら鎮痛剤を投与したので今は部屋で眠っているでしょう。弱めのものを打っておいたので夕方までには目を覚ますと思いますよ。午前中は看護師がそばで看ていましたが落ち着いているよ。うなので心配はないと思います」

そう聞くと部屋を出て二階へと駆け上がった。

リビングから寝室へ続く扉は開いていた。まだ眠っているだろうと足音を消して中へ入ると、ベッドに彼女の姿はなかった。驚いて辺りを見渡すとバルコニーへ出る扉が開いていることに気が付いた。ソファに座って空でも眺めているのだろうかと近づくと、手すりに寄りかかり今にも下に落ちそうな体制で立っていた。

「ちょっと、そこから飛び降り…なんてするなよ」

冗談にならないが今はこうして声をかけることしかできなかった。彼女は驚いた表情で自分を見ると手すりにつかまり「そんなことしません」と力強く反論した。その声を聞いてホッとしたのも束の間、休暇の延長届けを出してきたと告げるとその場に座り込んでしまった。

「…だったら、最初からそう言うてください。貴方はどうしてそうなんですか？」

「え？ ああ、すぐに戻ってくるつもりだったから言わなかったんだけど？」

そう、すぐに戻るつもりで、そして彼女に断られるのが恐くて黙

って帰った。

そして彼女の言葉を聞いて自分の選択が間違っていたことに気が付いた。昨夜「仕事で少しだけ戻る」という言い方をすれば彼女を惑わすこともなかったかもしれない。

言葉が足りないのも、言い方が悪いのも自分の悪い癖で、それがいくつもの勘違いを生む。彼女に嫌われるようなことはしていないと、初めて会ったときから思っていたが、もしかすると無意識のうちには彼女を傷つけていたのかもしれない。

自分は嫌われていると思いつつと彼女を避けてきた。だから自分の気持ちをぶつけるなど考えたこともなかった。だが、彼女はそうではなかった。もっと聞いてくださいと、初めて彼女の本心を聞かされた。

そんな想いを聞かされて出た言葉は「ごめん」だった。謝って欲しくないと言われるのは当然で、それでも他に思い浮かぶ言葉は見当たらず、黙ったまま彼女の言い分を聞いていた。

冷静だと思っていた彼女が涙を流していた。

驚いた、という言葉では足りないほど自分の心は揺さぶられた。こんな風に気持ちをぶつけられたことは今までない。いや、彼女はずっと言いたかったに違いない。自分が聞こうとしなかっただけだ。そう、自分には何も言ってくれないだろうという思い込みだ。

「貴史さん…どうしてここへ来たんですか？」

ずっと聞きたかったことなのだと思う。

本当なら聞かれる前に自分から話さなければいけなかったのに、恐くてできなかった。彼女のためなどと言いながら結局は自分が傷つくのが嫌だったただけなのだ。だが、もう話さないわけにはいかない。

「そうだね…今さらこんなこと言って図々しいかもしれないけど、結華さんにどうしても会いたかったんだ。会って謝りたかった。今まで僕がしてきたことのすべてを…でもなかなか言い出せなかった。言うタイミングが見つけれなかったって言えば都合がいい話かな。本当は恐かったんだ、今さら何謝ってるの？ って言われるのが。それに顔を合わせればいついついらないこと喋っちゃうし」

彼女は不思議そうな表情で聞いていた。無理もない、自分が今何に対して謝っているのかわからないだろう。でも「本当のこと」を話す前に一言誤っておきたかった。許してもらおうとかそういう感情はもうない。

「それは…私を認めてない、と言ったことに対してですか？ それとも他にあるんですか？」

「その両方…かな。でも僕は「君のこと」を認めていないと言った覚えはないよ。あくまで「親の決めた相手」を認めていないだけだ。まあ確かに誤解を招く言い方だよな」

「え？ でもあのときの貴方はそんな言い方では…だって私は貴方に嫌われてるんだと…初めて会ったとき貴方のことが恐くて、それで逃げ出したんです。貴方は私のことを嫌ってたのではないんですか？」

やはり話はそこへ戻るのだ。

そう、最初から自分は彼女のことを見ていなかった。あの日からふたりは別の方向を向いてしまった。それが自分たちの意思でないことに気が付かないまま。

もうすべてを話さなければいけないだろう。彼女がどう思うか、どう判断するかは自分の考えることではない。彼女に気付かれないうように小さく息を吐いて決心を固めた。

「そうだね…まず、そこが違っんだ」

うまく話せる自信はなかった。それでもゆっくりと「あの日のことを話し始めた。」

彼女の表情はあまり見ていられなかった。

どう伝えれば誤解を招かずに事実を知らせることができるのだろうか、そればかり考えていてうまく喋れているかも不安だった。しかもその「事実」は自分だって聞いた話だ。

「初めてここで会ったときから、僕たちはすれ違っていたんだよ。祖父に連れられてこの別荘へ来て君を見たけど、挨拶をする前になくなってしまったからね。あの後いくら探しても結華さんは見つからなかった。結局自己紹介もできず困っていたんだ。祖父はまた機会があるだろうから気にするなと言った。でも次に来栖の家で君にあったとき、すでに僕は避けられてたよ。思い当たることがないくてね、ずいぶん嫌われたもんだと驚いたな」

自分が認識している「事実」を語ると、案の定彼女は困惑した表情を見せた。そんなはずはない、と言いたそうにしている。無理もない、今言ったことは彼女の中の「事実」と違っていているだろうから。

「…何言ってるんですか？　ここで貴方は名前を…」

続きを言いかけて彼女は口を噤んだ。後の言葉は聞かなくてもわかる、想像することは容易だ。兄さんから聞かされたことをそのまま話そうと、彼女言葉を否定した。

「あれは、僕じゃなかったんだ」

話は終わっていないと、兄さんから散々呼び出しを食らった。

彼女が自分との婚約を破棄した理由以外に何を話すことがあるの
だろうかと、疑問に思いながらもたいした話はないと決め込んでい
た。

だが、仕事と称して無理やり専務室に呼び出されたときにはそう
でないと思い知らされた。

「は？ 何言ってるんだよ、兄さん」

「だから、結華ちゃんは俺のことをお前だと思っている、と言っ
たんだ」

とつさには理解できなかった。

兄さんが自分で、自分が兄さん？ 言葉遊びのようないたずらな
台詞が混乱を招いていることは確かで何かの冗談だと思った。

「何、訳わかんないこと言ってるんだよ。そんなことありえないだ
ろ？」

「いや、確かに結華ちゃんの中では俺とお前が入れ替わっている。
と、言っても結華ちゃんに自覚はないだろうけどな」

「冗談を言っているようには聞こえなかった。だが、にわかには信じ
難い。」

自分と兄さんはよく似た兄弟だと、小さい頃からよく言われた。
子供の頃は背丈もさほど変わらなかったため双子と間違われること
もしばしばあったほどだ。だが、よく見れば大きく違う点がふたつ。
まずは髪の色、そして瞳の色だ。

ふたりとも色素が薄く、日本人には珍しいタイプの瞳の色をして
いる。初めて見た人は必ず第一声で「珍しい色をしている」と言う
ほど興味を惹くらしい。

特に兄さんのほうが淡い色をしていて遠めに見てもわかるほどだ
った。だが、大人になるにつれてその色も徐々に濃くなり、最近で

はふたりとも同じような色合いだ。

髪と瞳の色に差がなくなると、今度は二人の纏う雰囲気の違いが出てきた。だから今は「よく似た兄弟」という台詞も聞かなくなつた。

彼女はどこで自分と兄さんの認識を誤つたと言つのだろうか。

そもそも「入れ替わっている」という台詞自体がピンとこない。自分が知っている限り、彼女は自分を「来栖貴史」として接してきただけだ。そして、いつからかは定かでないが彼女は兄さんに好意を持っていて。

「わかるように説明してくれよ」

「そうか… やっぱり、お前は気が付いていなかったんだな。まあ疑問に思つたことくらいはあるだろうけど結局確かめなかったから今まで発覚しなかったってことか」

ひとりで頷きながら話す兄さんに「ひとりで納得しないでくれ」と言つと、謝りながら話を戻した。そして子供の頃にひまわり畑で彼女を見た兄さんは、初めて一目惚れというものを体験し彼女のことが頭から離れなくなつたと語つた。

はつきり言つて兄さんが誰かに心を開くなど思つてもいなかったことで正直驚いた。義姉さんのことも家のために仕方なく結婚するんだと思つていたし、仲良さそうに見えて本当の姿を見せていないという印象を受けていた。

そんな兄さんがよりによって義姉さんではなく自分の元婚約者に心を奪われるなんて信じられなかった。だが、その話と入れ替わりのことがどう繋がっているのか、不思議に思っていると「俺は愛情をもらつべきではなかった」と切り出した。

「俺は、あの向日葵畑で見た結華ちゃんのことは一生成心に留めて

生きていこうと決めた、はずだった。でもお前の婚約者と顔合わせをするに長谷家の別荘へ行ったとき、俺の決心はことごとく崩れ去ったよ」

そつだ。

あの日、自分は初めて婚約者を紹介されると知って兄さんについてきて欲しいと願い出た。父は仕事で外せないとふたりを連れていったのは祖父だった。一緒に行動しているつもりだった兄さんは途中でどこかへ行ってしまった。彼女の姿も見当たらないと探しているとき、兄さんに遭遇したが「何も知らない」と言われた。実はそうではなかったのだろうか。

「向日葵畑で見たのが長谷結華だと知っていたら、先に理性が働いて彼女のことを気にも留めなかったかもしれない。だからあの別荘で彼女を見たとき、正直どうしていいのか戸惑ったよ」

そうか、兄さんはどこの誰かもわからないひとりの少女に恋をしたのだ。

それが弟の婚約者だと知って複雑な心境になっただろう。想いは通じないのに一番近くで見えていなければならぬなんて、残酷すぎる。そんな自分の境遇をどう思ったのだろうか、と考えたところで思考が変わった。

兄さんは、自分に対してどう思ったのだろうか。

自分が想いを寄せる相手の婚約者が弟。その弟に対して何の敵意も持たなかったのだろうか？

「兄さん、僕のこと…憎いと思った？」

「…どうだろうな、ただ理性がどこかへ飛んだことだけは認める」

どこまで本気が読み取れないほど兄さんの表情は変わらなかった。ただ漠然と、自分は兄さんに敵意までとはいかない、好ましくない感情をぶつけられていただろうと想像できた。それでもそんな感情が自分に直接向けられることはなかったが。

いや、だからこそその「行動」だったのだろう。自分に向けられた悪意を形にするために。

「無意識のうちに結華ちゃんに近づいていたよ。自分でも制止できなかった、理性というものが完全に欠如していたんだだろうな。俺はお前に対する「羨ましい」という感情をすり替え「どうして俺じゃないんだ」と憤りを感じて結華ちゃんの前に立った。そして…「来栖貴史」だと名乗ったんだ」

「…え？」

「それも極めて冷静に、悪意を込めて」

一旦話を止めた。

彼女は突然の告白に思考がついてきていないようで、何度も瞬きをし首を傾げながら聞いていた。自分の記憶と照らし合わせているのだろう。だが、納得いかないようだ。

「そ、そんなはずは…そもそも裕臣さんがそんなことをして何になるんですか？ 私が貴史さんを嫌ったところで婚約解消になるわけでもないし…それに、今までたくさん相談に乗ってもらいました。あれは…あの優しさは、全部嘘だったんですか？」

「嘘…ではないと思うよ。それに婚約解消させるための行動でもな

い。兄さんは…結華さんが僕に想いを寄せることを阻止したんだ。自分のものにならないのなら、誰のものにもなつてほしくなくて」

そう、そして自分と彼女はお互いに「嫌われている」と思い込み、お互いを避けるようになった。

兄さんから話を聞いたとき、自分があれほど避けられている理由がわかり妙に納得した。彼女の中では最初に攻撃したのは自分のほうで、自分という存在がずっと恐かったはずだ。

もっと早くに避けられている理由を聞いていれば誤解を解く機会もあったはず。兄さんが言った、自分はそれだけ鈍感で無関心だったということだ。

「子供の頃はね、よく僕の名前を使っていたよ。外見が双子かっていうほど似てたしまわりも気が付かなかった。どれも些細なことで僕が責められることがなかったから、兄さんから聞かされるまで知らなかったけどね。今思えば、兄さんは来栖家の跡取りとして育てられ教育されてきたわけだから相当ストレスが溜まってたんだと思う。だから僕の名前を使うことで気晴らししてたんだろうね」

「そんな…」

彼女はそのまま黙ってしまった。

何かを考えているのだろうか、それとも何も考えたくないのだろうか。そんな彼女の表情を見てこのことを話して本当に良かったのだろうかと不安になった。

「それが事実なのはわかったけど…なんで今さら？　僕にどうしろって？」

なんとなく釈然としない。

自分のことなのだが、どうにも他人のことを聞かされているような感覚だ。それにあの日の事実がそうであっても、彼女が兄さんに惹かれていたこととは関係ない気がする。最初のきっかけがそうではなくても自分のことを良く想わない可能性だってある。

「結華ちゃんに、その事実を伝えて欲しい」

「なんで？ 兄さんから言えばいいだろ？」

「俺が言ったんじゃ意味がないんだ。いい加減、自覚しろ」

何を？ と聞こうとして口を噤んだ。兄さんは自分の言い分など聞かれないと言いたげにこちらを見ていた。おそらく何を言っても通らないだろう。黙って兄さんの言い分を聞くことにした。

「いくら最初に俺がお前の名前を語ったからといって、普通まった気が付かないことはないだろう。俺は結華ちゃんと接するたびにいつかこの違和感に気が付くんじゃないかって思っていた。自覚はないだろうが結華ちゃんはうすうす感づいている感じだった。だからといって俺が話しても、到底信じてもらえないんだよ」

自分が話したほうがもつと信じてもらえないんじゃないかと思っただ。だが兄さんは「何も会ってすぐに話せとは言ってない」と付け加えた。

「でもこのこと話したら彼女が悲しむかもしれないだろ？ わざわざ言う必要ないんじゃないの？」

「結華ちゃんに：最期までお前に嫌われていたと思わせたくないんだ。彼女は親の決めた相手と無理やり結婚させられるんじゃないってちゃんと自分たちの意思で一緒にいたって思ってた欲しいんだ。お前だって結華ちゃんに誤解されたままなんて嫌だろ？」

「僕は別に…」

「お前もちゃんと自分の気持ちと向き合え。俺はふたりのことを見てきたからわかる。お互いに嫌われたくないから壁を作って距離を保ってきたんだろ？ もうその必要はないと言ってるんだ。今度こそお前のことを見てもらえ。そして結華ちゃんを受け止めてやれ」

そう言っ て兄さんは自分をこの別荘へと送り出した。

自分では隠してきたつもりだった。彼女のことを想っても叶わないと決め付けていたから何も言えなかった。好きになってももらえないのならせめて嫌われればいい、無関心ほど辛いものはない。

それでも兄さんにはバレていたようだ。だからこそ徐々に罪悪感に苛まれ事実を打ち明けることになったのだろうか。

ずっと黙ったまま俯いていた彼女が不意に自分を見た。

責められるのだろうかと思っ て身構えたが、彼女は唇を震わせながら優しい言葉を発した。

驚いた、というよりも腑に落ちた、といったほうが正しいかもしれない。

かなり前から違和感を感じていた。誰に、と自問自答してもわからない。でも心のどこかが歪んだ事実を修正しようとしていたのかもしれない。

貴史さんの告白は理解するのに時間がかかった。でも「まさかそんなはずはない」という否定的な感情はさほど大きくなかった。

貴史さんにはずっと嫌われていると思っていた。だから自分の気持ちを認めるのが恐かった。完全に拒否されたら、それでもそばにいななければいけないのに、辛くなるだけだから。

どんなに嫌われていても、何があっても婚姻は交わされるだろうし、それだったらわざわざ辛い想いをしなくてもいいと思って封印した。

裕臣さんに相談しているうちに自覚させられた。私がかなり前から貴史さんに想いを寄せていたことを。だからこの別荘へ着てからもずっと彼のことが気になっていた。

余命が短いと知って真っ先に後悔した。

と、同時にすべてを諦めた。それなのに彼が現れて心が揺らいだ。

でも、今言わなければもっと後悔する。そう思って顔を上げると彼は相変わらずの無表情でこちらを見ていた。声が震えそうになるのを押さえて静かに口を動かした。

「…ありがとうございます、本当のことを言ってくれて」

私の言葉は以外だったようで、彼は少し驚いた様子で何度か瞬きをした。そして胸ポケットを探ると一枚の写真を取り出しテーブルの上に置いた。

「…これは？」

「いや、こんなにあっさり信じてもらえるなんて思ってたから…一応昔の写真を持ってきてたんだ。ってこんなものが証明になるかどうかはわからないけどね」

見てもいいですかと尋ねると、どうぞと手を差し出された。

渡された写真をよく見ると自分の記憶と重なって行くのがわかった。あの日は初めて「恋」を知った。ずっと見ていたくても叶わなかった人。

写真を裏返すと撮った日付だろうか、それと一緒に名前が記されていた。貴史、十四歳。この別荘で初めて会ったときと同じ栗色の髪と薄い緑色をした少年がそこには映っていた。

初めて会ったときから惹かれて、ずっと会いたいと思っていた。しかしそれが兄の裕臣さんだと思っていたから会うことを避けていた。これ以上想いを寄せても辛くなるだけだからと。

結納の前にも何度か来栖家に行く機会があった。それでも何かと理由をつけては断っていた。もっと早くに会っていたら自分の記憶が思い込みだったことに気が付いていたかもしれないのに。

「…あの時、あの場にいればこんな誤解は生まれなかったんですね」「仕方ないよ、僕がもっと早くに違和感に気が付いていればよかったですだけの話だし。本当に悪かったと思ってる」

「いえ、お互いさま…だと思いますから。どちらが悪いとかそういう問題ではないとわかってます」

あの、と言いかけて言葉を飲み込んだ。

事実は聞かされてわかったが、今の貴史さんはどう思ってるのだろう。このことを伝えてしばらくすると帰ってしまうのだろうか。休暇は延長してきたと言っていたがそれはいつまでなのだろう。

黙っていても解決されないことはわかっている。頭ではわかっているでもすんなり聞くことができない。

「あの…お茶でもいれてもらいましょうか」

バルコニーでひとり外を眺めているときに突然彼が現れたため、そのままになつていた。本当は別のことを言うつもりだったが、一息入れたほうが聞きやすくなるかもしれないと提案した。

ふらふらと立ち上がると彼に制された。無理しないで、と声をかけられ彼は呼び鈴を鳴らしメイドを呼びつけた。こんなこともできなくなっているのかと実感すると、急に恐くなった。

事実は聞いた。

これ以上、私は何を望むことがあるのだろうか。

そう長くない人生の中で、これ以上彼を縛り付ける権利が私にあるのだろうか。

「結華さん、どうかした？ 気分でも悪いの？」

「え？ いえ、そんなことないです…ちょっと考え事してたので」

「そう、だったらいいけど。気分が悪くないのなら、後で散歩に行きたいけど…先生、許してくれるかなあ？ 真帆さん、後で聞いてきてくれる？」

彼がそういうとメイドは頭を下げて部屋を出て行った。

ふたりきりになるとまた息が詰まりそうになる。たぶん話が戻るかもしれないと思っっているからだ。聞きたいことを口にしてみよう

と思うほど、鼓動ばかりが早くなりうまく喋れない。

しばらく沈黙が続いた。

前だったらこんなことは当たり前で、彼が何を考えているのか勘ぐることもしなかった。でも今は気になって仕方がない。その読み取れない表情の奥に何が潜んでいるのか。

意を決して口を開こうとしたとき、ドアをノックする音が聞こえてきた。相手はメイドと主治医だ。

「聞きましたよ、散歩に出かけたいとか？ 結華さん、ちょっと診察しますのでベッドへ移動してもらえますか？ 来栖さんはここでお待ちいただいて結構ですよ」

主治医の診察は簡単なものだった。わざわざ見る必要があったのだろうかというほどに。鎮痛剤の後遺症は残っているようだったが、たいして気にはならなかった。

「…もう大丈夫ですね。結華さん、さつき私に言いましたよね？ どうしても会いたい人がいるって。その気持ちを今度こそちゃんとぶつけてきてくださいね。迷っては何も得られませんよ」

見透かしているかのように主治医は語った。

そうだ、もう会えないと思ったとき、どうしても伝えたいと思っただのだ。それをちゃんと言葉にしよう。自分の気持ちに嘘をつかないように。

夕方になって向日葵畑に散歩へ出かけた。

いつもと同じように車椅子に乗って、後ろから彼に押ししてもらって。それでも昨日までとは何かが違う。会話らしいものはなかったが、彼に押ししてもらっているという安心感が私を包んでいた。

夕日に照らされた向日葵の花を見て決心が固まった。途中、どう言おうか散々迷っていたが、遠まわしな言い方をせずにまっすぐ自分の気持ちを伝えようと、太陽を指す向日葵に教えられた気がした。

「大丈夫？ 疲れてない？」

「はい。あの…貴史さん」

私を気遣って顔を覗き込んだ彼はすぐ隣にしゃがんでじっとこちらを見ていた。その瞳に吸い寄せられるように、目が離せなくなっていた。

「私…貴史さんのことが、好き、です」

ようやく言えた。

この一言を言うためにかなりの遠回りをしたと思う。あんなに恐かったのに、言ってしまったなんてことはない。彼に聞こえるのはと思うほど心臓の鼓動は大きい。なぜか気分はすっかりしていた。

彼は驚いているのだろうか。何も言わず目も逸らさずに硬直していた。あの、と言いかけたとき彼の表情が崩れた。今まで見たこともないような、少年のような笑顔だ。

「うれしいよ、結華さん。でも、参ったな…僕が先に言おうと決めてたのに先越されちゃうなんて」

「え？ それって…まさか…」

「結華さん、僕も君のことが大好きだよ。ずっと前から。この一言が言えずにずっと苦しんでいたんだけどね。まずは君に謝りたかった。そして自分の気持ちを告げようと、そう決めてここへ来たんだ」

そう言うと車椅子に座ったままの私を抱き寄せた。一瞬の出来事で何が起こったのか把握するまでに少し間があったが、彼の腕の中の心地よさに浸り目を閉じた。

「結華さん、愛してる。だから…」

もう二度と離れないで　　そう言われて我に返った。

「で、でも…私は、もう…」

「わかってる。それでも結華さんと一緒にいたいんだ」

「だって、私は…もう長くは生きられないんですよ？ それなのに…貴史さんにそばにいてもらって、私は何も返せないのに。貴方の時間を奪うだけなのに…？」

本当はそばにいて欲しい。

でも、今の私にそれを望む権利はないと知っている。そう遠くない未来に私は永遠の眠りにつく。ひとりでそのときを迎えるのだと思っていた。それなのに。

「私は…それを望んでもいいんですか？」

瞳から溢れる涙を感じ取った。

ひとりでいることが、本当は不安で仕方なかったと今さらながら気が付いた。彼は私の涙を拭いながらそっと抱きしめてくれた。

「僕のほうこそ、結華さんのそばにいていいのかって何度も聞きたかった。でも今は違うから。結華さんがどんなに嫌がっても、離れる気なんてないから。だからずっと一緒にいよう」

「…はい」

夢を見ているのかと思うほど貴史さんの腕の中は居心地が良かった。彼は抱きしめていた腕の力を緩めると私の顔をじっと見つめ頬に手を当てた。

夕日が照らす向日葵の前でそっと目を閉じると、彼の優しい想いを乗せた唇がそっと触れた。初めてのキスは私の心を静かに、確実に動かしていた。

部屋に戻ると珍しく主治医が待機していた。

朝のことがあるから今日はいつも以上に気に留めているのだろう。もう大丈夫なのに、そう言おうとしたが有無を言わさず寝室へと促された。

「いかがでしたか？」

「もう大丈夫ですよ、気分も悪くなりませんでしたし夕食も入ると思います」

それは良かったと言わんばかりに満足そうな顔をして聞いていた。主治医としては患者の体調が一番気になるところだろう。私の容態が落ち着いていることが何より安心なのだと思う。

でも、気になることがひとつだけあった。それは今使用している薬のことだ。

酷い副作用が嫌だからと、慣れた薬ばかり使用してきた。それが良くないということをも再三主治医に忠告されてきたにも関わらず。

この間、製薬会社の人に来ていたときに社で発行している雑誌を置いていった。そこには私と同じように投薬治療を行っている患者の声と称してコラムが掲載されていた。

副作用が酷く何度も止めようと思ったがそれを乗り越えて克服した人もいるという。私といえば告知されたときにすでに諦めて、主治医の勧める薬も断ってきた。ちゃんと治療していれば、もしかすると長く生きられたかもしれないのに。

「…先生、私：今さらながら後悔しています。もっと先生の言うことと、聞いていればよかったです。今になって気付いても、もう遅いですよね」

私はいつだって後悔ばかりだ。

落ち込んでいる私に、主治医は意外な言葉をかけてくれた。

「気が付いたときから前に進めますよ。今からでも遅くはないです、結華さんがその気になれば私は最善を尽くすだけです。どのくらい効果があるのかわかりません。でもしないよりしたほうが後悔も少なくて済むでしょう？ きつと来栖さんも支えになってくれますよ」

「私：もう少しだけ、がんばってみます」

そばで支えてくれる彼のために、もう少しだけ時間が欲しい。それはたぶん、生まれて初めて何かを望んだ瞬間だった。

「僕も協力するから何でも言っつてね」

部屋着に着替えリビングへ行くとすでに主治医が話していたように、彼は笑顔でそう言っつてくれた。彼は医師ではないが医療従事者だ。私の選択がどういう意味を持つか考えるまでもないのだろう。

彼の言葉が嬉しかった。向日葵畑から帰っつてきてから、私はまだ夢の中にいるようなふわふわした感覚の上に立っつている。言葉ひとつ足しただけで、世界はこつも変わるのだからと思っつほど不思議な気持ちだつた。

「じゃあ結華さん、治療方針が決まっつたらまた知らせますね。今日はさすがに疲れたでしょう？ ゆっつくり休むことをお薦めしますよ、では」

確かに、ソファに座っつているだけでも体がだるい。

それでも今すぐ眠れるほど、ぼんやりとはしてない。いや、逆に冴えているくらいだ。そんな私の状況に気が付いたのか彼は私を抱きかかえて寢室へと運んだ。

「ちよ、ちよつと貴史さん!？」

軽々と抱きかかえたと思っつたらあつという間にベッドへ下ろされた。あつけにとられるほど一瞬の出来事で思わず彼の顔を凝視した。彼は特に表情を変えずベッド脇のイスに腰かけた。

「眠れないのはわかるけど、先生もああ言っつてたことだし。大人しくベッドにいて。また無理させて倒れてほしくないからね」

「だからって、何も抱きかかえなくても…」
「そのほうが早いでしょ？ 言っても結華さん、聞いてくれなさそうだし。それにこのほうがゆっくり話ができそうだから」

横たわった私の髪をそつと撫でると優しく手を握ってくれた。その行動ひとつひとつが照れくさい。自分でも高揚しているのがわかるがようやく好きだと認識できたばかりで、まだ頭では整理できていない。手が触れるだけでもドキドキしているのに自然に振舞う彼が不思議で、少しだけ羨ましかった。

何か話したいことでもあるのだろうかと思っていたが、彼は一向に口を開かない。穏やかな表情で私のことをじっと見ている。もしかしたら私が何か言い出すのを待っているのだろうか。

聞きたいことを口に出してみようか、と思ったとき彼が「結華さん」と私のことを呼んだ。彼に神経がいついたためかすぐに「はい」と返事をする事ができた。

「僕にして欲しいことがあったら何でも言っただけ。何でもするしどこへだって連れて行くから。でもこれだけは約束して。絶対に無理しない、って。何があっても自分の体調を優先して」

「…貴史さん？」

「僕はただ、こうやって横たわっている結華さんのそばに居られるだけで幸せなんだよ。それだけは信じて」

それは、すなわち。

誰かのためにではなく、自分のために生きて欲しいということ。

残された人生をどう生きていこうかなど考えたこともなかった。ただ命の灯が消えるのを待つだけの毎日。明日、その日が来ても後悔などしないと思っ込んでいた。

それが今は少しでも長く彼と一緒にいたいと願っている。主治医に告知されたときですら思わなかった恐怖が、ここへきて初めて私の心を覆いつくしている。死ぬことが恐い、だけど私はまだ彼に本心を伝えていない。それだけでなく想いを告げただけでこれからのことを聞くことすらできない。

私はわがままを言ってもいいのだろうか。彼と共に時間を使うことを許されるのだろうか。

「…貴史さん、いつまで…いつまでここにいてくれるんですか？」

休暇を取っている彼がどのくらい滞在できるのか、それが一番気になっていった。

本当はずっとそばにいて欲しい、でもそうは言えなかった。彼のそばにいたいと望んでいるのに、だからこんな風に質問することしかできない。

恐る恐る質問をした私とは対照的に、彼は不思議そうな表情で何か考えていた。やはり聞いてはいけないことだったのだろうかと思っっていると笑顔を向けてくれた。

「ああ、そうか。僕は肝心ことが言えてなかったんだね。休暇届の延長してきたなんて言ったからちゃんと伝わらなかったんだ。厳密に言うと今休暇中っていうより停職中、って言ったほうが正しいかな。だから特に期限はないんだ」

「え？　じゃあ会社は…？　部屋で仕事をされてたんじゃ…」

「昨日まではね。仕事をする条件でここに来ることを許してもらってたから。でも状況が変わったというか…僕の気の済むまでここにいてもいいことになったから。だから結華さん、僕はもうずっと君のそばにいるから安心して」

信じ難い話だった。

彼の立場からしてそう簡単に通る話でないことくらい私でもわかる。彼が抜けることで少なからず影響のする部署だつてあるだろう。それでも彼は貫き通したということなのだろうか。そう思うと彼の優しさと安堵の気持ちからか涙が流れてきた。

「結華さん、泣かないで……」

「ごめんなさい、なんだかホツとしちゃつて……まさかそんなこと言われると思つてなくて……私、貴史さんが来るまではひとりでも構わないと思つてました。でも今は……ひとりになるのが恐いんです。だから……」

「わかつてる、わかつてるよ」

泣きながらだつたためかうまく喋れなかった。それでも彼は頬を伝う涙を拭いながら何度も頷いてくれた。その優しい手を握つていと彼の唇が私に触れた。それがあまりに激しくて息苦しくなる。その息苦しさから開放されると彼は「愛している」と小さくささやいた。そして。

「結華さん……抱いてもいい？」

声を出さずに頷くと彼はもう一度私にキスをした。何度も愛してる、とささやかれながら触れる彼の腕に抱かれて、私はひと時の幸せを手に入れた気がした。

生まれて初めて身も心も結ばれ、彼と過ごす穏やかな日々が永遠に続けばいいのにと願つた。それが叶わないことに気が付いたが打ち消すことはできなかった。

今はただ、愛しい人のそばで眠ることができればそれでいい。夢に沈むように目を閉じた。

数日後、体調が良くなった私は久しぶりに外出できた。

彼と想いを分かち合った次の日、気が緩んだのか熱を出し寝込んでしまった。幸いたいしたことはなく安静にしていればいいと言われ、退屈だったが寝室で過ごした。

もちろんその間も彼が私のそばを離れることはなく、これが夢ではないんだと実感した。

「結華さん、この道で合ってる？ さっきからずっと同じ風景が続いてるようだけど」

「大丈夫ですよ、もうちょっと行けば目的地が見えてくると思いますから」

そう。

今日はいつもの向日葵畑に散歩へ出かけてるのではない。

主治医の許可を得てちょっとしたドライブに出ている。とは言っても目的地を知っているのは私のほうだ。彼は行ったことがないのか記憶にないだけなのか、先ほどから不安そうな表情で運転している。

無理もない、別荘を出てただひたすら山道を走っている。右を見ても左を見ても同じ風景で変わり映えしない。この先に何かあるのだろうかと思っても不思議に思っても仕方ない。

寝込んでいる間、彼は私にいろいろ質問を投げかけてきた。

今までお互いのことを知らなかったのだから時間はいくらあっても足りなくて、だからこそ安静にと寝室から出なくても退屈はしなかった。

その会話の中で、幼い頃によくお祖父さまに連れて行ってもらっ

ていた場所の話になった。母がこの別荘へ連れてこなくなつてからも足を運んだ。思い出の場所と言っても過言ではないかもしれない。

体調が良くなつたら行つてみたい、と言つたのは彼のほうで私は驚いた。まさかこんな場所に興味を持つなんて思いも寄らなかつたからだ。

私との思い出を共有したいと言われ照れくさかつたが、話しているうちに私も行きたくなつたので合意した。

しばらく走ると湖が見えてきた。懐かしい記憶が徐々によみがえつてくる。窓の外を見ていると路肩に車を止めてくれた。

彼の休憩を兼ねて、ということもあつたと思うがどうやら私の思いを察してくれたほうが大きかつたようだ。助手席から車椅子に移動させると湖の周りを歩き出した。

「よく、わかりましたね」

「結華さんはすぐ表情に出るからわかりやすいよ。ちょっと散歩してみたって思ったでしょ？ それに長時間車に乗ってるのは良くないかもしれないからね。気分転換だよ」

「…貴史さんには敵わないですね」

褒めたつもりはなかつたが彼は嬉しそうな表情で私を見つめた。

まだ暑い日が続いてたがさすがに高地になると気温が下がっている。吹き抜ける風はどことなく秋の気配を感じさせていた。

車椅子を押してもらうことが当たり前になつてしまつたが、できることなら隣を歩いてみたい。そして彼と同じ目線で同じ風景を見てみたい。彼を見上げる私は本当に向日葵の花になつたような錯覚に陥つた。

「ここも思い出の場所なの？」

「そうですね、よくお祖父さまに連れてきてもらいました。目的の場所ももうすぐそこなんですよ。たぶん歩いていっても行けそうなほどだったと思います。あ、ほらあの棧橋からボートに乗せてもらったんです。懐かしい…」

棧橋の近くに一軒家と小屋が建っていた。昔はこの湖を遊覧するボートが出ていたが今はどうだろうか。仮に営業していても乗ることとは不可能かもしれないが。

近づいてみたが人の気配はなかった。手入れされている様子がないことからずいぶん前に閉鎖されたのだろう。少しがっかりしてしまった。

何の確認もせずここへ来たのを後悔し始めていた。

この先の目的地も私の記憶と違うかもしれない。もう人もいなくて荒れているかもしれない。そんなところに彼を連れて行ってもいいのだろうか。

「結華さん、ここでの思い出をもっと聞かせて。今の姿は僕には関係ないよ、ここが結華さんにとって大切な場所なら僕もそれを大切にしたい」

どうしてこの人は私を喜ばせることばかり言うのだろうか。

そんな風に優しくされたらどう返していいのかわからなくなる。黙っていると彼は隣にしゃがみ私の顔を覗き込んだ。一瞬泣きそうになったのを誤魔化して子供の頃の話をした。

自分のことながら話していて嬉しかった。自分にもこんな楽しい過去があったんだと改めて認識できたからかもしれない。

最初はボートに乗るのが恐かったこと、あの一軒家に住んでいた家族とのバーベキューパーティーや花火大会、初めて蛭を見たことなど今となっては記憶も曖昧なところが多いが、それでも楽しかった。

たことだけははつきりと覚えていた。

湖から離れて先へ進むと目的の建物が見えてきた。突然現れた建物に彼も意表をつかれたようで思わず立ち止まった。

石畳の先に立つ白い建造物。屋根の上には大きな鐘と十字架がありその存在感を表していた。

「結華さん、ここが言ってた教会なんだね？」

朽ち果てているかと思っていた教会は今もなお威厳を保っていた。そして私たちが来るのを待っていたかのように鐘が鳴り響くと彼はゆっくりと車椅子を押し歩き始めた。階段横のスロープを上がると木製の重厚な扉が私たちを出迎えてくれた。

その扉が開かれると、高い天井に備え付けられたステンドグラスから優しい光が射し込んで私たちを包み込んでくれた。

懐かしい教会の中は、まるで時間が逆戻りしたかのように私の記憶と同じだった。

幼い頃の記憶だったためどのくらい覚えているか定かではなかったが、こうして来てみるとあの頃見た情景がよみがえってくる。お祖父さまとの大切な思い出だ。

「どう？ 久しぶり来たんでしょ？」

「ええ…最後に来たのは確か、初等部に上がる前だったと思いますから。でも、あまり変わってないと思います。外もきれいに手入れされたので神父さまがいらっしやると思っんですけど。勝手に入ってよかったですか？」

「教会なんだし入っちゃいけない、なんてことないでしょ？ 神父さまには後で挨拶に行こう」

そう言うと彼はゆっくりと車椅子を押し、祭壇前で止まった。車椅子のブレーキをかけその隣のイスに座った彼はじつとマリア像を見つめた。

つられるように私の視線もマリア像に向いた。優しい表情ですべてを包み込んでくれるような温かい存在。教会という神聖な場所は心が落ち着く。とは言っても私はクリスチャンではないが。

お祖父さまも信仰があつてここへ来ていたのではない。

古くからの友人がこの神父で懐かしい昔話をするために足を運んでいた。その友人である神父もずいぶん前に他界したと聞いているから、今は誰が務めているのか知らなかった。

お祖父さまが亡くなった後、この教会との繋がりには途絶え私自身の記憶からも薄れていた。だが別荘に移り住んでしばらくすると過

去のことが徐々に思い出されてきた。この教会も訪ねたいと思っていたが今の体ではそうすることが難しいだろうと諦めていた。

何気なく言った一言を貴史さんは聞き逃さなかった。まさか現実になるとは思っておらず、今朝出かけようと言われたときは驚いた。

しばらく無言でマリア像を眺めていると扉のほうでコツンツと響く音がした。振り返ると誰かが立っていた。が、逆光のため顔ははっきりと見えなかった。

それでも服装から察することはでき、それが神父だとわかるまでそう時間はかからなかった。足音が近づいてくる中、貴史さんは立ち上がり会釈した。

「こんな山奥の教会に訪問者など…珍しいこともあるもんだ。初めて見る顔、ですか？」

「はい、来栖と申します。こちらは恋人と結華です。えっと、こちらの神父さまでよろしいですか？」

「ええそうです。山南やまなみと言います。そちらのお嬢さまは…おや？」

山南と名乗った神父は私の顔を見ると首を傾げた。だが一瞬で何か察したのか、状況を把握したようで笑みを浮かべた。私が誰だかわかったようだった。あいにく私のほうは目の前の老人に覚えがない。

「ユカさん…ああ、長谷家のお嬢さまですな。いやずいぶん大きくなられて…ここへ来ていた頃はあんなに小さかったのに。時が経つのは早いものですな。ではあなたは貴史坊ちゃんですか？ 成長したお二人に会えるなんて先代が引き合わせてくれたんでしょうなあ」

古い記憶を辿っているのだろうか、神父は目を細めながら嬉しそ

うに頷いていた。私のことはともかく彼のことで知っていることに驚いた。やはり幼い頃に来たことがあるのだろう。

神父は先代、つまりお祖父さまの友人の弟だと語った。幼い頃の私を覚えていたようでお祖父さまに連れられて来ていたのを知っていた。彼も幼い頃に三度ほど来たことがあるらしいが当の本人は記憶になかったようだ。よく覚えてなくて、と謝っていたが神父は笑顔で応えていた。

「せっかくお越しただいたんだ、お茶でもどうですか？ 教会の裏手に小さいですが私の家があるんですよ。家内が焼き菓子を作っていたので、ご案内しますよ」

「ありがとうございます。結華さん、ご馳走になるっか？」

神父の申し出に快諾した彼は私の顔を覗き込んだ。

行けばきつと懐かしい話がたくさん聞けるだろう。だが、その前にここへ来た目的を果たさなければならぬ。ここへは懐かしさから訪問しただけではなく、私の今の本心を彼に聞いてもらうため、そして第三者に証人になってももらえればと思つて連れてきてもらったのだから。

黙つたままの私を心配そうに見つめていた。一瞬考え事をしていたことに気が付いた私はすぐに笑顔を作り口を開いた。

「ありがとうございます。でも…その前に、しておきたいことがあるんです。もしよければ神父さまにもいて欲しいのですが…ご迷惑じゃないでしょうか？」

「私は一切に構いませんよ」

彼は不思議そうな顔をしていた。無理もない、前もって何も言っていないから、これから私が何をしようとしているのかわからないはずだ。

あまり力の入らない腕で車椅子を動かそうとした。途端に彼が手を差しだし後ろから押そうとする。いつもなら受け入れる行為も今だけは振りほどいた。

「貴史さんはそこに座っててください。私ひとりで祭壇の前に行きたいんです」

たった数歩、それだけ動くのにずいぶん時間がかかった気がする。慣れない動きで腕はパンパンになっていたが自力で祭壇の前にたどり着いた。

一息吐いてマリア像を眺める。そしてそのまま目を閉じて気持ちを落ち着かせた。

とても静かだった。

ステンドグラスから射し込む優しい光に包まれながら今までの人生を振り返った。と言っても二十数年、そのほとんどは記憶も曖昧な幼少期と自分を偽った思春期だ。

何度振り返っても後悔ばかりの日々。それでも僅かな希望を手にした今の私は間違いなく「幸せ」と答えることができる。愛する人に支えられ彼のそばにいられることへの充実感が私を覆いつくしていた。でもその間、何度も考えたことがある。私を見守ってくれる彼にたいして私ができること。何度考えても答えは「何もできない」だった。だったら、せめて未来は返そう、そう思った。

「マリアさま、私には愛する人がいます。今、その人と一緒にいられて本当に幸せです。できることならこの幸せが永遠に続けばいいのにと願ってしまいます。でも…それは叶いません。今がどんなに幸せでもいつか終わりがきてしまう。それは、そう遠くない未来です。マリアさまならご存知ですよ？ 私はもう長く生きられませんが、でも、その最後に私は幸せを知りました。だから…それをくれた彼に感謝しています」

私の声は静かな教会の中で響き渡っていた。神父は目を閉じて私の言うことに耳を傾けている。きっと今まで何人もの告白や懺悔を聞いてきたのだろう。その中に私も入るのだ。

背後の彼がどんな表情で聞いているのかはわからなかった。それでも私が話し終わるまでは立ち上がったたり話しかけたりしないだろうと、妙に自信があった。

「私は…後悔しています。今まで自分を偽ってきたことを、本心を

さらけ出すのが恐くて隠し続けたことを。そして生きることが放棄してしまったことを。私という人間が生きていても生きていなくても世界はそう変わりません。でも…私の周りの、ほんの小さな世界は変わってしまうんだと初めて知りました。一度生きることが放棄したのに、今はもっと生きたいと願ってしまいます。愛する人を悲しませたくない、そればかり考えてしまうんです」

泣かないと決めていたのに私の涙腺はいとも簡単に決壊した。溢れてくる涙を押さえながら呼吸を整え話そうとする。それでももうまく声にならなくてしばらく黙ったまま顔を拭いていた。

私の意志を尊重して声をかけない彼に救われた。今手を差し伸べられたらきつと何も言えなくなってしまう。それでは意味がないのだ。

彼に言っておきたかったこと。

それを告げるのはもっと先でもいいかと思っていた。でも、必ず明日が来るとは限らない。

「彼の未来が…幸せで満ち溢れていることを願います。だから、貴史さん」

振り返って彼の名前を呼んだ。突然だったからだろうか、彼は少し驚いた表情で私をじっと見ていた。間があつてから「何？」と聞き返された。

「私の最期のときは、笑っていて欲しいんです。貴方の悲しい顔を見たままいきたくないんです。わがママを言つてるとわかつています、でも…それでも泣いて欲しくないんです」

できることならその悲しみさえも早く消えてしまえばいいと思う。

彼には未来が待っている、そこに私はいないのだから。

形だけの婚約者のままなら決して思わなかった。でも今は「愛されている」という実感があるから、それを願う。

「結華さん…それは約束できないよ。それにそんな先のこと、言うて欲しくない。今は生きてるんだからその時間を大切にしよう？」

ほら、もう泣かないで」

「約束してくれなくてもいいんです。ただ、これが私の願いだって知っておいて欲しいんです」

「うん、わかった。わかったから、もういいよ」

泣きじゃくる私をそっと抱きしめてくれた。

悲しませたくないという思いと、一緒にいたいという願い。矛盾していることはわかつている。それでも私は彼から離れられない。

暖かい彼の腕の中で、時間が止まってしまえばいいのに、と叶はずのない願いを唱えた。

気分が落ち着くと彼はその腕から開放してくれた。

もうひとつ、願いがある。それは彼とそして神父に聞いてもらいたい。

「貴史さん、そして神父さま…もうひとつだけ聞いて欲しいことがあるんです」

それが叶うかどうかはわからない。

叶ったかどうかを確かめることもできない。

それでも神父は「確かに聞き入れました」と証明してくれた。それが私のたったひとつの遺言となる。

「さあ、お茶を用意しますよ。こちらへどうぞ」

神父に促され教会の裏手に回った。

木造の平屋からは紅茶のいい香りが漂っていた。ふと見ると庭園に向日葵の花が咲いていて思わず足が止まった。いつもの向日葵畑の花とは違い花も小さいし背丈も低い。

それでも風に揺れながら太陽を指していた。その花を見ていたいと申し出ると庭でお茶が飲めるようにセッティングしてくれた。

輝く太陽の下、揺れる向日葵とともにほんの少しだけ現実を忘れて未来に想いを馳せた。

私の人生は人から見れば短いのもしれない。それでも、最後だけは幸せだったと胸を張れる。だからもう後悔はしていない。

あの向日葵と同じように、太陽に恋をしてただ前だけを向いて生きていこう。

それがきつと私を愛してくれた彼の「願い」だろうから

エピソード

「ここからはひとりで向かう。君はここで待っていてくれ」

湖の辺に車を止めさせると、ひとり歩き出した。

この道をふたりで歩いたことが昨日のことのように思い出される。笑顔で思い出を話す彼女の後ろで自分はどれだけの幸せをもらったのか計り知れなかった。

あれから一年。

自分の心の整理がつかないままこの一年はあっという間に過ぎてしまった。

彼女は自分の未来が幸せに満ちているようにと願った。周りから見れば自分は「恵まれている」のだろう。だが彼女がいなくなった今、それは本当の意味で「幸せ」ではない。

彼女が願った未来を報告することはできない。それでも、今日という日はどうしてもこの場所へ足を運びたかった。

教会の前で神父は自分の訪問を待っていたかのように立っていた。ここへ来ることは事前に伝えていない。にも関わらずああして立っているところを見ると、彼もまた彼女の願いを聞き届けた証人なのだ。

「お待ちしてましたよ、来栖さま。さあ、どうぞ」

神父とふたり、聖堂内には入らずそのまま裏手に回った。

庭に現れたのはあの日と同じテーブルセットだった。そのイスに座って笑顔を向けている彼女が見えそうな気がした。時間があの日

に戻った気がして懐かしい気持ちが増してきた。

この庭には彼女の好きだったひまわりの花が咲いていた。彼女とよく散歩に行ったひまわり畑は、今年はもう花はなかった。あの夏だけ特別に用意された場所だったのだ。

ひまわりの正面のイスに座ると、神父は用意していたものを持って庭に出てきた。

「よくあの宗仁さんが許してくれましたね」

「そうですね、しかしこれが本人の希望ですから無下に断れなかったんですよ」

そう言う小さなガラス瓶を自分の前に置いた。

彼女に会えた気がして涙が出そうになった。

彼女は遺言として遺骨の一部を散骨して欲しいと言った。

葬儀は長谷家本家で行われ埋葬も本家のしきたりにそって行われるだろうと言っていた。だが「それじゃあ窮屈でしょ？」と一部でいいから好きな場所に葬って欲しいと願ったのだ。

元々この地ならどこでもいいと言っていたのだが、この教会の裏手にひまわりが咲いていると知った彼女は神父に申し出た。迷惑でなければこのひまわりの咲く場所に散骨して欲しい、と。

神父は二つ返事で承諾した。一周忌に本家から遺骨を分けてもらいそれを散布する、それが彼女の遺言となり神父は証人となった。

長谷家の当主がそれを簡単に許すだろうかと思っただけで危惧していたが取り越し苦労だったようだ。

ビンのふたを開けると白く輝く粉が風に乗って舞い散った。

これで彼女は満足したのだろうか。だが、自分の心には引っかか

ることがひとつあった。

「結華さん、約束を守れなくてごめん」

最期するとき、自分は泣きながら無理に笑顔を作っていた。

苦しそうに息をする彼女はそんな自分を見て微かに口を動かした。うつすらと目を開けながら確かに「ありがとう」と言った彼女の最期は満足そうだった。

そして、どうしても彼女に言えなかったことがある。父から出された条件についてだ。

「最後まで言えなくてごめん。でも、結華さん…僕はずっと君の事を…」

言おうとしたその瞬間、強い風が吹いて視界を遮られた。

そつと目を開けるとひまわりの花がゆらゆらと動いていた。そして…

『いいの、貴方はこれからの未来を生きて…』

彼女の言葉が聞こえた気がした。

きつとこれからもひまわりの花を見るたびに君の事を思い出すだろう。

ほんのひと時、君と過ごした幸せな日々を決して忘れることはない。

愛している、今もたったひとり、君だけを

れて・完結】

【向日葵は太陽に魅せら

エピソード（後書き）

本編はこれで完結になります。

最後まで読んでいただきありがとうございます。

『私、大きくなったらあなたの奥さんになるのよ、よろしくね』

幼い頃、父に言われたことを鵜呑みにして決定したわけでもないのに相手にそう告げた。

彼は「何言ってるんだ？」と言わんばかりに怪訝な表情をしていたが特に気にならなかった。栗色の髪に緑色の瞳。ただ見ているだけで私は幸せだった。だから婚約者候補に挙がったと聞いたときは有頂天になっていた。

それなのに、父が会社に残したのは多額の負債だった。

その瞬間、私の環境は百八十度変わり、もちろん彼との縁談話も頓挫した。何でも叶えてくれた父は株主総会を前に失踪した。残された母とふたりの兄、そして私は家も財産も奪われた。辛うじて成人していた上の兄は会社に残ることができたが、新入社員同然の扱いだっただ。私たちを養うために必死に働いてくれた。

自立して兄をサポートできるようにと国立大学の薬学部を卒業し、新薬開発部門に配属された私はただただ会社を取り戻すためだけに働いた。それが彼を取り戻す一番の近道だと信じていたから。

もちろん彼にはもう決まった婚約者がいることは知っていた。それでも、そんなことで諦められるわけがなかった。婚約中ならどうとでもなる、それを糧に彼との接点を探し続けた。

「ねえ、知ってる？ 来栖さんって婚約解消したんだって」

「え？ 今、何て...？」

「だからあ、来栖さん、下の貴史さんよ。何でも相手方から解消したいって言うてきたらしいわよ？ 詳しい理由まではわからないみ

ただいだけど、噂はかなり広がってるわよ。それにすでに後釜を狙ってる人もいるんだって。なんだ、やっぱり由紀恵、知らなかったのね？ 系列の会社だからつきり耳に入ってるのかと思ってた」

はつきり言って寝耳に水だった。

来栖グループの傘下に入ってるとはいえ、彼の情報はなかなか入ってこない。兄の裕臣さんのことなら何かと話題にも上がるが、次男の先行きなど興味のない人間のほうが多いのだ。

だからなかなか接点を見出せないでいた。二人の兄は幹部にまで昇格していたが、私は未だに一研究員に過ぎなかった。だが、このとき確かに野心に火がついた。

「全然知らなかったわ…それにしても相変わらず湊は情報みなてが早いわね、何？ もしかして狙ってるの？」

「まさかあ、うちはライバル会社よ？ いくら相手が魅力的でもさすがに許してはもらえないわ。それにあの家つて上の裕臣さんもまだ結婚してないんでしょ？ 相手に悪いとか思わないのかしらね、言いたくはないけど貴史さんのことだつて実際のところはどっちが悪いのかわからないでしょ？ あたしならもつと妥当なところで手を打つわ」

湊の実家は総合病院を経営している。確かにライバルと言えばそうだ。だがその規模の違いから彼女が相手に指名されることはないだろう。来栖家はライバル会社だろうが利益が見込めそうなら取り込むくらいのこととする。

彼女は眼中にないとして、当面彼の候補に拳がりそうな令嬢たちの状況を把握しなければならぬと思つた。いや、その前に私の立場を考えなければならぬ。

彼女はその後、まったく違う話を始めたが私はそれどころではな

かった。彼女の話に相槌を打ってはいたものの、会話のほとんどは記憶に残っていない。ただただ彼のことだけを考えていた。一度は閉ざされた道、今度こそ彼にたどり着いてみせる。それも自分の力で。

「かず兄？ 話があるんだけど…今いい？」

自宅に戻ると休日ということもあって上の兄、一樹かずきは自分の書齋にいた。仕事をしているのかと思いつきドア越しに声をかけてみたが、珍しく中には下の兄、尚樹なむきもいてふたりで何か話しているようだった。

私が入っても問題ないのだろうか、と思いながら待っていると尚樹がドアを開けてくれた。

「珍しいね、由紀恵が訪ねてくるなんて。まあちょうど良かった、話したいことがあったんだ。座って」

「私に話し？ 何、仕事のこと？」

「相変わらず仕事にしか興味ないんだな、まあ由紀恵らしいけど」

クスクスと笑いながら尚樹が横から口を挟んだ。二人の話が終わったから私は招き入れられたと思っていたがそうではないのだろうか。それとも尚樹にも関係ある話なのだろうか。

先に私の用件を聞かれたが後でいいと伝えると途端にふたりの表情が変わった。

「由紀恵：お前、今欲しいものがあるだろうか？」

とつさには理解できなかった。

何のことを言っているのだろう、今まで兄に何かを強請ったことはないように思う。が、自分がここに何をしにきたのか思い出した

時点で検討がついた。

実はそのことで来たと言え、「やっぱりな」と尚樹が納得していた。と、いうことは湊から聞いた情報はまだ新しいものなのだ。兄たちの情報ルートは定かではないが、湊の言っていたことが嘘ではなかったと証明されたようなものだった。

「そろそろいい時期だろう…タキザワ製薬は来栖グループから独立するつもりだ」

現在、タキザワ製薬は来栖グループの傘下にある。

二十年以上前、父が負債を出して傾いていた会社の救済を申し出たのが来栖コーポレーションだった。まだ幼かった私はその意味すらわからなかったが、吸収合併を条件に資金援助を申し出てくれたそうだが自力で立て直したかった叔父は譲らなかつたという。それで折れた先方は傘下に入ることを提示したらしい。そのままではタキザワ製薬が欲しがつたのかと疑問だったが、自分が研究者となつてそれも納得できた。

父の理念だつたのか新薬開発には特別に力を入れていた。当然、その設備も膨大なものだ。当時、ここまで設備が整つた会社はなかつたそうだから、おそらくは来栖コーポレーションもそこに目をつけたのだろう。後で知つた話だが、当時はタキザワ製薬を吸収しようという働きは他の会社でもあつたそうだ。

「叔父さんが、そう言つてるの？」

「いや、役員会で持ち上がった話だ。叔父はもつと早くに独立を希望していたが、いろいろ面倒だね。先方に世話になつている分、そう簡単に提案できる問題でもない。だから時期を待っていたんだ」「今がその時期なの？」

なぜ「今」なのか検討がつかなかつた。

新薬の開発についてはかなり前から業績は上げているし、経営状態だつて悪くないはずだ。確かに叔父が早くから独立したいと言つていたのも頷ける。でも先送りにされた、では今回は誰に決定権があるのだろうか？

そこまで考えて、ある結論に到達した。まさか、とは思つがそれ以外に考えられない。

「かず兄、まさか…」

「さすがに由紀恵は察しいいね、そのまさか、だ」

世代交代、といえはそれまでなのかもしれない。

叔父は父の後を引き継ぎ会社を立て直すことに尽力した。その功績は称えられるものだろう。だが一方で叔父がいるがために来栖グループから抜けられないのも事実なのだ。

トップが替われば当然考え方も変わる。独立を提示するのに舞台を整えたいというわけだ。

「じゃあ、次の代表取締役は誰が…？ まさかとは思っけど」

「そうだよ、兄さんがその座につくことになりそうだ。まだ決定じゃないけどな」

「ああ、次の役員会で叔父には退任してもらおう予定だ。他の役員たちも同意見だから反対数は出ないだろう。株主からも委任状をもらってるから、総会では独立に関する話を進めていく。だから由紀恵にもそのつもりでいてほしいんだ」

そこまで話が進んでいることに驚いた。

兄ふたりはそういう場所に立っているのだ。自分とは全然違う世界にいるような気がして寂しくなった。兄を、会社を少しでも支えられるようにと研究に取り組んできたのに。

「そこでだ…由紀恵、お前上に立つ覚悟はあるか？」

予想外の台詞に思考がついていかなかった。

ただの研究者である私が上に立つ？ それはどういう立場なんだろう？

だが、迷いはなかった。湊から彼の破談を聞いた時点でそれは必

然的だった気がするからだ。

「…はい。兄さんたちの役に立てるなら」

「そうか、まあそれが「欲しいもの」を手に入れる最善策だろうからね。次の役員会、由紀恵にも参加してもらおうからそのつもりでいてくれ。俺からの話はこれだけだ」

そう言って解散となった。

突然自分の置かれている状況が変わったことに驚いたが、二十年前の、あの日に比べれば良い変化だ。彼に近づいた気がして嬉しかった。

翌週。

最上階の会議室で行われた役員会に私も出席した。初めてのことで不安だったが尚樹が隣に座っていてくれたこともあり緊張は次第にほぐれた。

叔父の退任話が持ち上がると場の雰囲気が変わったが、叔父は特に表情を崩さず事務的に「次の世代に期待している」と語った。会社のために尽くした叔父は、やはり会社のことを考えて去っていくのだと思うと言葉では足りないほど感謝していた。

会長には現副社長の大石氏が、社長に一樹が任命された。尚樹は常務に昇格し私は研究開発本部の部長に任命された。他の部署も新しい人事が任命され新しいスタートが切られた。

後は来栖グループから独立するだけだ。一企業として成せば彼と同じ場所に立てる。彼が他に相手を決めてしまう前に何としてでも自分がその座に着かなければ、そう考えていた。

それから間もなくして、私は意外な人物から呼び出しを受けた。

それは一樹の耳にも入っているらしく、戸惑っている私に「仕事

の話だ」と背中を押してくれた。

タキザワ製薬とは比べ物にならないほど立派なビル。その最上階にほどなく近い場所に案内された。ここが来栖コーポレーションの中心、いわば核の部分かと思いつながら足を踏み入れた。

中には彼によく似た、だが彼よりも冷たい表情をした男性が人形のように隙のない笑顔で待っていた。子供の頃に何度か会っているが、相変わらず完璧すぎて恐い。

「よく来てくれたね、まあ立ってないでどうぞ」

来栖家の次期当主、裕臣だ。立場の違いからもう会うことはないだろうと思っていた人。この人に会えたということは、私は確実に彼に近づいていると確信が持てた。

「はい？ えっと…それはどういう意味でしょう？」

裕臣との対面はまったく予期していなかった話題が中心で、話を理解するのに少々手間取った。

どうやら貴史の元婚約者である長谷結華は末期のガンらしい。本人は治療を拒んでいるらしいがそんなことは許されるはずもなく、長谷家の当主は頭を悩ませているらしい。

そんな中当の本人は別荘で残りの人生を過ごしたいと提案したそう。当主としては来栖コーポレーションが経営する総合病院に入院させるつもりが娘のわがままに振り回された。なんとか治療を条件に別荘行きを承諾したものの、さて治療をどうするかといった問題が浮上した。

そこでまたまた来栖コーポレーションの出番だ。

医師と看護師、そして医療道具一式を別荘へ設置し治療できるようセッティングした。すべての準備が整い彼女はいよいよ家を出るらしいのだ。

そこまでの話は自分には関係のない話だと思い聞いていた。だが、彼は私に担当してもらいたいと申し出たのだ。

「そのまま、なんだけどね。彼女は治療する条件をのんだが、本当に応じるかどうかはわからないそうだ。抗がん剤の副作用は強く出るものがあるから本人が拒否すれば投与し続けることは難しいだろう？ だからなるべく副作用の少ない薬を使って欲しいというのが当主の言い分だ。それに、彼女が末期ガン患者だということを隠しておきたいらしい。そういう意味で彼女を担当する人間は信頼できる者に、というのもあるね。君なら薬の知識も豊富だし、口は堅い

「だろっから安心して任せられると思ったんだ」

「どうして私が、と思ったが表情には出さないようにした。」

彼女には何の非がないのはわかっている。が、彼の婚約者だったというだけで嫌悪感が増す。それなのに担当になれという裕臣の考えがわからない。それなら口の堅い営業担当をつけさせる。

その思惑が読み取られたのか、裕臣は冷ややかな笑みを浮かべて「断る権利はないと思うが」と言い放った。

「…どういうことですか？」

「いろいろ聞いてはいるが、タキザワ製薬はまだ来栖グループの傘下にある。だからこれは命令だと思ってくれて構わないよ？ それにこのことに関しては一樹社長にはもう通してある。君の一存ではどうにもならないよ。ああ、それと…貴史に会う機会だと思ってくれていい」

思いがけず彼の名前が出てきて明らかに動揺した。

「これが彼に会う機会とはどういうことなんだろう？ 元婚約者の担当をすることと彼にどんな接点があるんだろう、もしかして彼もその別荘とやらに出向くのだろうか。だったら余計に断りたい。」

「あの…貴史さんも、その別荘へ行かれるんですか？ 破談になったというのには？」

「いや、あいつはまだ何も知らない。行くことになるかもしれないが、今のところはなんとも言えないんだ。そもそも貴史は彼女が末期ガンだということすら知らないからね」

意外だった。

彼が知らないことを裕臣が知っているということにも驚いたが、彼はそもそも破談の理由すら聞かされていないらしい。そもそもが

形だけの婚約者であったため、そこまで関心がないのだという。

私の記憶にある彼とはかなり違っていた。そこまで相手に関心を持ってない人ではなかったはずだし、いくら家同士で決められた相手だからと言って、そこまで嫌う必要があるとは思えなかったからだ。

何かあるのか、それが結論だった。

だが、それ以上踏み入ったことは聞きだせず、疑問が残るままビールを後にした。

彼女の担当に指名されたと報告すると、一樹はただ頷いて聞いていただけだった。知っていたのだから反応がないのも無理はない。今後のスケジュールを確認していると不意に質問された。

「由紀恵…お前、愛がなくても結婚できるか？」

「かず兄？ 何、急に…」

「ああ、違うか…相手にお前を想う愛情がなくても、と言ったほうが正しいかもしれないね。どうなんだ？ 一方的に想いを寄せているだけの相手と結婚できるのか？」

それが彼のことを指しているのだとすぐにわかった。

何を今さら、というのが素直な感想だ。子供の頃、彼の婚約者候補に挙がったときから相手の気持ちなんて期待していなかった。本人の意思は聞き入れられない世界、親の、家の都合で婚姻が結ばれていく閉鎖的な環境の中で、相手に愛情など期待してはいけなかった。

自分が想いを寄せているだけで十分幸せだった。私は自分の愛する人と一緒にいられるのだからそれ以上何を望むことがあるのか。自分本意で相手のことを考えていないと言われればそれまでだが、まわりにはどちらにも愛情のない婚約が成された例も聞かされていたから、それに比べればまだ恵まれたほうだと言い聞かせていた。

「私…もう愛だの恋だの、そんなものに夢見る歳じゃないわよ？
ただ彼を手に入れたいだけ。そのためならどんなことでもするわ」

彼が誰を想っているようが、誰も想っていないからうが関係ない。

ただ私のそばにいてくれればそれでいい。一度は切れたと思った
ふたりの糸は、今度は強引にでも結んでみせる。それが彼の本意で
はなくても。

彼との再会を果たしたのは皮肉にも彼女の別荘であった。

まさか私に会うと思っていなかった彼は、いぶん驚いていたが、さらっと受け流していた。彼はまだ知らないことが多い。すべては仕組みられた上でのことだというのに、それすら気が付いていないのだから。

警告のつもりだった。彼女を引き合いに出せばここから去るという選択をしてくれないだろうか、淡い期待を寄せた。だが、逆効果だったようで再会したあの日以来、彼が実家に戻ったと知らされることはなかった。

そのときに覚悟した。彼の心は決して自分のものになることはない。

「なかなか、話が進まないな」

「無理もないだろう？ 二十年以上融資し続けてきた会社だ、そう簡単に手放すようなことはしないだろう。焦ることはない、そのうち突破口が見つかるさ」

「兄さんは呑気なんだよ、今のところ向こうの条件とこっちの条件が合わないじゃないか。せつかく新体制になったのに、それに、美咲さんのところだっていつまでも黙っていないだろう？」

来栖グループからの独立は思ったよりも時間がかかっていた。一樹の言うとおり、そう簡単に手放せるくらいならとつくに見限られているだろう。今まで、いや今でも傘下に置いているということはグループにとって利益があるということなのだ。

そして尚樹の言う「美咲さんのところ」とは一樹の妻・美咲み咲の実家である。旧姓、今泉美咲は旧財閥系の家系の令嬢で、独立した後資金面は彼女の実家が全面的にサポートしてくれるらしい。新体

制、そして今泉家のバックアップがあるからこそ、今独立を目指しているのだ。

「まあ、いざとなれば由紀恵がいる」

その言葉の意味を、私は数日後に知ることになる。

しばらくして、動きがあった。来栖コーポレーション側から条件の提示があり一樹に呼び出された。どうやら会社を通してではなく、来栖家から直に申し出が来たらしい。内容を聞かされて驚いたが、私が最後の手段と言った一樹の言葉の意味が納得できた。

「近々、先方がお前に会いたいと言ってくるだろう。顔合わせだと思っただけいい、ただ本人は来ないようだ。まだ知らせていないということらしいからね」

「何も知らないってこと？ そう……今度も彼は親の言うことに逆らえないのね」

「ああ、でもそれを由紀恵が気にすることはない。かえって好都合だろう？ しつかり頼むね」

やっと、彼に繋がる糸を掴んだ気がして嬉しかった。彼の意味は尊重されないことになるのだろうがそれでも構わなかった。どんなに嫌われてもどんなに無関心でも、私は彼のそばにいられる。それだけで十分、欲しいものは手に入ったも同然なのだから。

きっと私は結華に敵わない。死んでいく人間に勝てるものなんているはずもない。きれいな思い出だけを残して去っていくのだから彼は一生、彼女との幸せだった日々だけを胸に刻んで生きていくのだと思う。他の誰にも心を開かず、そのうち何に対して想いを寄せていたのかもあやふやになる記憶だけを頼りに。

それでも。

彼の隣に立っているのは私。

この先も生きて、彼の未来を見ることが出来る。それだけが唯一の優越感だ。

来栖家の当主との対面は翌々日に場が設けられた。

そこにいたのは彼の両親と裕臣、そしてこちら側は私とふたりの兄。一般的には主役が抜けている奇妙な集會に違和感を感じながら一樹は話し始めた。

「わざわざお越しいただいてありがとうございます。ところで…肝心のご本人がいらっしやらないようですが、話を進めさせていただいてもよろしいのですか？」

「ええ、構いませんよ。弟には事後報告でも問題ありませんから。

今日是由紀恵さんの意思を伺いに来たんですから、ご心配なく」

「それはよかった。そう聞いてうちの由紀恵も安心してますよ」

一樹と裕臣は似たような、冷たい笑顔で話し始めた。どちらも腹の探り合い、といったところだろうか。うかつなことを言っただけ足を取られては元も子もない。私は黙ってそのやり取りを聞いていた。

本来ならこれは「政略結婚」というものだ。タキザワ製薬を来栖グループから独立させることを条件に私は「人質」として来栖家に嫁ぐ。血縁関係を結んでしまえば下手なことはしないだろう、というのが先方の読みだ。

経営陣が変わればそれも意味を成さなくなるが、現段階ではそれは考え難いことなのだろう。だからこそ先方は条件として掲示してきたのだ。

そしてこれを「政略結婚」だと認識するのは彼、貴史だけなのだ。

私は合意の上、もつと言えば自ら望んだことと言える。先方もそんなことは百も承知なのだろう。

私の意見を聞かれた。迷うことなく答えることができる。

「私に異議はありません」

彼はこの話をどのように聞かされるのだろうか。

きっと今の彼にはそれを判断する思考力はないだろう。それでも構わない。

こうして私は、彼の「二番目の婚約者」となった。

彼の心は手に入らない、それを不幸だと言う人もいる。だが私にとっては幸せ以外の何物でもない。彼が他の人との思い出に浸っていても、そのすべてを私は愛していい。

もう、誰にも邪魔はさせない

私が愛した人は、私ではない別の人を見ていた。

最初から手に入らない彼の心。それなら誰にも心を開いて欲しくなかった。それなのに彼はある少女にあっけなく心を奪われた。その日から私の心に何かが棲みついた。

それは、もしかしたら嫉妬という名の悪意、だったのかもしれない……

「聞きましたよ、また結婚式が延期になったそうですね？ 汐梨さま」

彼の専務就任パーティーと、言ってもごく身内での食事会だけに出かけるため馴染みの美容室で髪をセットしてもらっているときのこと。どこから仕入れた情報なのか、彼女は半分は興味本位に、そして半分は心配を匂わせる言い方で聞いてきた。本当のことだし隠すことでもないのだから「そうよ」と軽く答えてみた。

あっさり認めたことが意外だったのか、鏡に映った彼女は「あれ？」というような表情をした。私にとってはたいして気にならない事実でも、他の人にとってはそうではないのかもしれない。

「何？ 私、変なこと言った？」

「いえ…気にされてないんですか？ これで二回目ですよ？」

「いいのよ、結婚式の時期なんて気にしてないわ。それに彼は忙しいんだもの、待ってあげることも大切でしょ。彼を相手にいちいちそんなことで沈んでいるほど暇じゃないわ」

彼女の言つとおり、結婚式が延期になったのは二回目。一回目は私から延期を申し出た。理由はなんてことない、私の子供っぽいわがママが原因だ。彼があの子女に心を奪われたと知り彼を困らせたかったのだ。あの時は私も大学を卒業したばかりで、大騒ぎすることじゃないと思っていた。

両親には理由を告げることなく「今はイヤ」と駄々を捏ねた。子供の頃から甘やかされて育った私のわがママはあっさり承諾され、思惑通り結婚式を延期することに成功した。但し、彼の家にどう説明したかまでは知らないけれど。

そして今回。

私の年齢を考えて、子供を作るならそろそろ式を挙げて一緒に暮らしたほうがいいのでは、と両家から提案されこの春、挙式をする予定だった。けれど彼が専務に昇格することになり膨大な業務に追われる中まとまった休みが取れないという理由で、彼のほうから延期を申し出されたのだ。

たぶん本当の理由は他にある。それでも聞き出すようなことはせず黙って承諾した。一回目のことがあったためか両親も渋々了承した。

「次のご予定は？ もうお決まりですか？」

「一応ね、秋になったら仕事が落ち着くだろうからその予定よ。日程が決まれば連絡するわ。私の希望は変わらないからそのつもりでいて」

彼女は「わかりました」と短く答え、セットを仕上げると外まで私を見送った。

外で待機していた車に乗り込むと行き先を告げるまでもなく、運転手は黙って領き車を走らせた。

パーティー会場は来栖家の別邸で行われる予定になっていた。

エントランスを抜け大広間へ向かうと予想以上に人が集まっていた。驚いた。けれどこんなことでいちいち困惑していられない。元々は少数で行うはずだったものでも、話は広がりそれなりのパーティーになることなど決して珍しくないからだ。

広間の入り口付近で周りを見渡していると、すぐに彼が気が付きエスコートしてくれた。その隣を優雅に歩いていく。これが偽りの笑顔だなんて気が付く人はいないだろう。そう、彼ですら。

「遅かったね、道路が混んでたのかな？ もう少し待って来ないよ。うだつたら連絡しようと思ってたんだ」

「ええ、美容院から来たからちよつと混んでたわ。おじさま達は？ ご挨拶しなくっちゃ」

「向こうで会長たちと話しているよ、行こうか」

会長は彼の祖父に当たるが、彼は一度として「祖父」という代名詞は使わない。それは父親に対してもそうで会社での立場が優先されるためか役職名を口にすることが当たり前になっていた。その流れか、まだ入籍をしていないためか、私も「義父」とはなかなか呼べず未だにおじさまとしか呼べないでいる。

近づいた一族の中に彼の弟がつまらなそうな顔をして立っていた。話に加わるわけでもなく離れるわけでもなくだ。いつもは隣に婚約者がいたが今日はひとりで立っていた。

「どうしたのだろう？ そう思ったが先に挨拶する人間がいる。そう考え義弟の前を通り過ぎ頭を下げた。」

「おじさま、遅くなりました。本当ならわたくしがお迎えしなければならぬ立場なのに、申し訳ないですわ」

「ああ、汐梨さん。いやいや今日は私が開催したのだからね、ゆつくり楽しんでくれていいんだよ。裕臣が不甲斐ないばかりに汐

梨さんには迷惑をかけるね」

「いえ、わたしは裕臣さんについていくだけですから、ねえ？」

表面上の挨拶を黙って聞いていた彼は、私に同意を求められても顔色ひとつ変えずにつこりと微笑んだ。すべてが虚構の上に成り立っている関係だ、誰もが本心を隠している。溜め息が出そうになるのを抑えてその場を立ち去ろうとした。他にも挨拶をする人は数え切れないほどいる。

だが、ふと視界に入った義弟の態度に不自然さを感じ、思わず口走った。

「裕臣さん、今日は貴史さんのお相手…なんて言ったかしら、ユカさん？ 彼女は来ていないのかしら」

「ああ…彼女か。汐梨には言っていなかったかな、貴史のことは、破談になったんだ」

「…え？」

まさかそんなことがあるはずがないと思っていたからだろうか。一瞬彼の言っていることが現実ではないような気がした。

「どうして言ってくれなかったの？」

パーティーが終わった後、すぐに彼とふたりきりになった私は攻め立てるように問いただした。実のところ、そのことが気になっていてパーティーの間も心ここに在らずだったのだ。

他の誰が破談になるのが興味はないし関係のない話で片付けられるが、今回ばかりはそうもいかない。義弟だから、ではない。長谷結華という女性がフリーになったことが腹立たしいのだ。自分たちよりも先に入籍してもらいたかったというのに一体何があったのというのだろう。どんな事情があるにせよこんな形で報告されたことに苛立っていた。

「すまない、折を見て話そうと思っていたんだ。良い話ならまだしも悪い話だからね、言うのが遅くなって本当に悪いと思ってる」

「もう少しで本人に尋ねるところだったのよ？ほんと、恥かくところだったわ」

八つ当たりもいいとこだ。それでも彼は黙って私の言い分を聞いていた。

彼が彼女、結華に心を奪われたと知ったのは割と早い時期だったように思う。当時高等部上がる頃だったと思うが珍しく彼が弟の話をしていた。何かいいことでもあったの、と聞くと許婚が決まったのだと答えた。噂では滝澤家の末娘が候補に上がっていると聞いていたためそこに落ちついたのかと思っていたが、会社云々の件で流れたらしい。

家柄だけで嫁ぐ私にはその辺りの情報に疎い。良かったわねと話

を切り上げようとしたとき、彼が写真を見せたことで驚いた。

はっきり言って彼は人に興味を持たない。もっと言えばその人個人には関心がないのだ。彼にとつて肝心なのは自分にとつてその人がどのくらいの価値を持っているのか、それに限る。嫌な言い方をすればどのくらい利用価値があるのか、それが基準になっているのだ。

だから、そんな彼が弟の相手に関心を持つてしていると知って意外な感じがした。自分の義妹となると話は別なのだろうか、一瞬彼の人間性に期待した。

だが、その写真を見ている彼の顔は今まで私が見たことのないような表情をしていた。私にも向けない優しい笑顔、そして時折悲しそうな、苦しそうな表情を見せた。

もしかして、彼女に恋をしてるの…？

それが私の直感だった。いや、まさかと否定してみたものの一度持った疑問はそう簡単に消えてはくれなかった。それからというもの、彼は時折嬉しそうな顔をして彼女の写真を見ていた。いくら私が世間知らずでも彼の心境の変化に気が付かないほど鈍感ではない。ほどなくして彼の本心を知ってしまった私は、彼を愛せなくなつた。

「それで？ 破談だなんて、よくおじさまが許したわね。まさか貴史さんに落ち度があつたのかしら？」

「いや、そういう訳じゃないんだ。まあ縁がなかったってことだよ。なにそれ、ずいぶん勝手な理由ね。だったら私たちもとつくに破談になっていいはずよ？ 二回も結婚式を延期してるんだから」

「なに言ってるんだ。それとこれとは話が違つたろう？ さあそんな顔しないで…せつかくのキレイな顔が台無しだよ」

そう言つて彼は頬に手を添えキスをしてきた。
もう何も言わさないとつもりなんだろう。まあ、いい。破談になつた理由はどこからでも収集できるだろう。彼が言わないなら自分で調べるまでだ。そんなことを考えながらその夜は彼に抱かれた。

数日後、友人とランチをしているとニコリ笑つて頭を下げる女性と目が合った。誰だつたか思い出そうと記憶を巡らせていると、隣に座つていた香純かすみのほうが私よりも早く気が付いた。

「長谷先輩、お久しぶりです。いつ戻つてきたんですか？」

「もう「長谷」じゃないわ、昔のクセが抜けないのね。先週ねこつちに戻つてきたの。今日は時間があつたから久しぶりに来てみたのよ。ふたりとも元気そうね」

香純は「そうでしたね」と言いながら近況を聞いていた。

結華の姉、長谷京華はせきょうか 今は鷹取京華たかとりきょうかだが は私たちの先輩だった人で今はロスに住んでいるらしい。学生時代は交流があつたが卒業後は疎遠になつていた。といつても、香純はたまに連絡を取つていようだ。彼女の妹が私の義妹になつていたというのに疎遠だなんて奇妙な話だが。

「こつちに戻つてくるなんて珍しいですよね？ 何かあつたんですか？ ああ、もしかして妹さんの結婚式とか？」

「それならいいんだけど…残念ながら別の用なの。まあ妹のことは変わりないけど」

一瞬、彼女の表情が曇つたのを見逃さなかつた。

ちらつと私の顔を見て「あなたは知つてるわよね」と言われた気

がした。気が付かないフリをしてやり過ごしたが、彼女が去った後もそれがずっと頭に残っていた。

おそらく破談の理由は結華のほうにあるのだ。わざわざ嫁いだ姉が帰ってくる理由、それを考えていたが思い当たるようなことは浮かんでこなかった。

「やっぱりあの噂、本当なのね」

そんなことをぼんやり考えているとき、香純が不意に尋ねてきた。だが、その意味が理解できず何の話をしているのだろうと首を傾げると「ごまかしてもダメよ」と言われた。そして彼女は私の知らない事実を淡々と話し始めた。

「香純、それどこから聞いた話なの？」

「え？ 結構噂になってるわよ、なんでもタキザワ製薬と口裏合わせて治療してるって話じゃない？」

どうやらそのタキザワ製薬に勤めている友人の情報だということからただの噂とは言い難い。長谷家の末娘の治療状況など、一介の社員に伝わるはずもないのだから。

彼が言葉を濁した理由がわかった気がした。さすがに思いを寄せた女性が「末期がん」だなんて言いたくなかったのだろう。彼はこの事実をどう受け止めたのだろうか。弟のものにならない安堵か、それとも彼女がいなくなることへの絶望か。

どちらにしても私には関係のない話だった。

義妹になっていれば知らん顔もできないが、婚約中でしかもそれが破談になったというのなら接点がないにも等しい。

彼の心にはまだ結華が棲みついているだろうが、二人であったり、嬉しそうに彼女の話をする彼の姿を見なくてよくなるのかと思うと、かえって気分は良いほうだった。

「申し訳ございません、只今専務は来客中でして…お会いいただくことはできません」

挙式の日程と会場の確認をするために彼と会う約束をしていた。そのために会社まで来たというのに会えないと言われ「はい、そうですか」と帰るわけにはいかない。

他に予定はいれないうと念を押していたし、急な会議なら秘書がこんな言い方をするはずがない。もしかして、と思うより早く、秘書の制止も聞かず専務室へ繋がる扉に手をかけていた。

「あら、失礼」

「し、汐梨…ノックもなしで入ってくるなんて非常識じゃないか」

「そう？ したつもりだったけど、お話に夢中で聞こえなかっただけじゃないかしら」

彼の前に座っている「彼女」にちらつと視線を向けた。居心地の悪そうな顔をして座っている。私と目が合うと「お久しぶりです」と儂げな笑顔を見せながら頭を下げた。

その姿が妙に腹立たしく感じる。彼女は枯れることなく、美しいまま落ちるのかと思うとひとときわ苛立ちが募ってきた。けれどそんな思いは微塵も見せずにこっこりと笑ってやり過ごす。

「お久しぶりね、結華さん。急用だったのかしら？ 今日裕臣さんと約束していたの、よろしければ席を外してくださいさらないかしら？」

「汐梨、そんな言い方ないだろう」

「…いえ、いいんです。裕臣さん、お忙しいのにありがとうございます」

彼女は深々と頭を下げると専務室を出ていった。

そんな彼女を外まで見送りに行った彼のこと気が入らず、ソファで待っている間もイライラしていた。大人げないことをしているのは百も承知だ。だが、そんな理性が利かないほど私の心には黒い渦が巻いていた。

しばらくして戻ってきた彼の顔は「いつも通り」完璧に作られた表情だった。何を考えているのか読み取れない、相手の警戒心を解

く微笑みで私に近づいてきた。

「悪かったね、汐梨。先に君と約束していたというのに、気を悪くしないでくれ」

「…いいのよ」

「そうか、じゃあ行こうか」

そのさわやかな笑顔とは裏腹に、瞳は鋭く光っていた。どうやら私は彼の機嫌を損ねたらしい。何も言えないまま披露宴会場となるロイヤルホテルへと連れて行かれた。

彼は滅多に感情をあらわにしないが、私の前では別だ。いや、本心を隠したままだから本当の意味での感情かどうかは怪しいが、それなりに喜怒哀楽を表現する。その中でも手が付けられないのが「怒」だ。彼の場合、静かに感情を震わせているため治まるタイミングがつかみづらい。

こうして瞳の奥が鋭く刺さるような視線を送っている間は逆らわないほうが身のためだ。ただ彼の怒りの感情が消化されることを待つことが最善の選択だ。

でも、つまらない。

ホテルの総支配人と何人かのスタッフが会場を案内している間、彼は私に冷たい視線を向けたままだった。周りから見ればごく普通のカップルに見えるかもしれない。でも本人たちの間には見えない壁がある。それはこの先も超えることはできない。

でもそれは何も私だけに限った話ではないと思っていた。所詮は両家の間で取り決められた縁談、相思相愛を求めるほうが困難だろう。そんなことを考えながら偽の笑顔を浮かべながら彼の後ろを歩いて歩いた。

「日取りはいかがなさいますか？ 十月下旬か十一月上旬でしたらこちらの会場でご利用できますが」

「ああ、そうだね。そのくらいだと都合がつけやすいかな、汐梨のほうはどうだ？」

「え？ ええ、わたくしは構いませんわ。あなたの予定にあわせますから決めていただいでよろしくてよ」

「そういうことだ、支配人。よろしく頼むよ」

私の返答はどうやら満点だったようで彼の表情も幾分か和らいでいた。

今度こそ何があっても挙式は決行されるだろう。それまでに彼の心から「結華」を追い出さなくては。そうでなければ私は彼を愛せない。

予定された日時を確認しながらよほど花嫁の思考とは程遠い、黒い渦の深くに呑みこまれていった。

挙式、披露宴の日時を決めてからと言うもの、何かと邪魔が入り彼と会えない日々が続いていた。

と言っても、あれから結華が彼に会いに来たという話は聞いていないし多忙な彼がわざわざ彼女に会いに行っている可能性も少ないだろう。ただ、それに反して弟の貴史と会う回数が増えているのがなんとなく気になる。ふたりで何を話しているのだろう、情報が欲しいがふたりの会話が漏れてくるはずもなく苛立ちばかりが募っていた。

そろそろ披露宴の招待者を決めてもらわないと。

一度目、そして二度目は招待状を出す前に延期が決定した。そのため招待者リストの最終確認をするのは今回が初めてだ。私が確認できるのは自分の友人だけ、こちら側からの招待のうち半数以上は父の知り合いと言ってもいいだろう。

リストを持って父の書斎に向かうことに決めた。だが、なんとなくその足は重い。きつとまた、早く花嫁姿を見たいだの、孫の顔を見るのが先送りになっただのと小言を聞かされることになるに違いない。はあ、と溜め息を吐きながら長い廊下を歩いた。

「お父さま、今よろしいですか？」

「ああ、入りなさい」

「あら、お仕事中だったんですね。お邪魔してよろしいのですか？」
「構わないよ、たいした仕事じゃない。今は汐梨の話のほうが重要だろう、披露宴の日時が決まったそうじゃないか。いや結構、結構」

父はいつになく上機嫌だった。これで招待者リストの確認を願

いすればさらに機嫌は良くなるだろう。だが、それに反して私の心は重い。いつそ彼との婚約を破棄したいと言えればどんなに楽だろうか。今の彼は私が「愛した彼」とは遠くかけ離れている。なら私が変わらなければいけないのだろうか。いつまで経っても、答えは出ない。」

「それってさ、マリッジブルーじゃない？」

香純にそれらしいことを話すと特に驚いた様子もなくあっけらかんと答えた。

相談する相手を間違えたかとも思ったが、友人の中でも一番近況を知っているし何より話しやすい。学生時代からずっと私と彼のことの成り行きを見てきたから、もっと違う反応があるかと期待したが見当外れだったようだ。

「そういうことじゃ、ないのよ」

「そうね、私もそう思ってたわ。拳式が近くなると、この人でいいのかなあって思っちゃうわけ。ほら、自分の意思とは別に周りが動いたりするじゃない？ 段取りばかり決まっていっちゃってこっちは全然ついていけないのよ。それに相手は結構無関心だったりするでしょ？ だから余計に不安になったりするのよね。でも大丈夫、そんなのすぐに忘れちゃうから」

「香純、あんなに幸せそうな顔してたのにそんなこと思った時期があつたの？ なんだか意外ね」

「まあ花嫁なら誰でも通る道ね」

そう言っただけで香純はクスクスと笑った。

彼女はもちろん親の決めた相手と結婚したわけだが、どういうわ

けがお互いに恋愛感情を抱き、おまけに子供ができたと予定より早く挙式に至った。

私たちと同じように不満を抱えながら結婚するものだと思い込んでいたためかなり意表をつかれたが、それも香純らしいと心から祝福した。

「汐梨の場合、昔っから片思いだもんね。あたしなんかよりずっと不安が大きいかもしれないわね」

「…まあ、そうね」

「でも結婚して何年か経つと、大恋愛した夫婦ですら冷めちゃうんだから割り切っちゃったほうが気が楽かもしれないわよ？ 最初っから冷静なほうが穏便に過ごせるかもしれないでしょ」

「何？ 経験談なの？」

「まさかあ、聞いた話よ。あたしたちはまだラブラブなんだから」

すっかり惚気られて反論するのがバカバカしくなってきた。

香純の言うとおり、私はずっと彼に片思いをしてきた。それはもう過去形であって現在進行形ではない。それでも彼女はまだそう思っているようだが。

学生時代のまま片想いのほうがずっと楽だったように思う。それなら自分の気持ちだけで相手と一緒にいられるし、あの頃の気持ちのままなら彼の心なんて気にならないからだ。でも、だからといってあの頃に戻ることはできない。

香純たちのように、何でも打ち明けることができれば状況は変わるかもしれないが、彼は決して本心を口にしない。だから自分だけが取り乱しているようで余計に気分が悪くなる。

はあ、と溜め息を吐くと「元気出して」と励まされてしまった。仕方がないのでその場は無理やり笑顔を作って話を切り替えることにした。

店を出て歩いていると見覚えのある車にすれ違った。

あれは確か貴史の愛車だった気がする。平日のこんな時間にすれ違うのは不自然な気がした。気のせいかと首を傾げたが、数メートル後方で停車し中から出てきたのは紛れもなく貴史本人だった。

こんなところで何してるのかしら…？

仕事中に外出してきた、という感じでもなさそうでどちらかと言うとオフのような格好だ。そのまま見ていたが私のことには気が付かずビルの中へと消えていった。

しばらく監視してみようと思ったが一緒にいる香純がそれを許さずはすもなく、ほどなくしてその場から離れることになった。だがその後何かが引つかかって彼と貴史の顔がぐるぐると頭の中を回っていた。

「どうしたんだい？ ぼんやりして。何か考え事でも？」

そう言われてハッと我に返った。

食事中にも関わらず意識は別のところに向いていて、気が付けばずいぶんナイフとフォークを持ったまま微動だにしていなかったらしい。彼の声で呼び戻されたはいいが、言い訳が思いつかない。ひとまず笑顔を作って「いえ、なんでも」とごまかしてみたが、果たしてうまくいったかどうかは不明だ。

「披露宴のことは全部夕梨に任せきりだからね、疲れてるんだろう。もう少しで仕事のほうも落ち着くだろうから、それまで我慢してほしい。時間が取れるようになれば俺も手伝うよ」

「ええ、でも無理しないで。いいのよ、どうせ私は特にすることもないんだし。自分の拳式だもの、毎日楽しくて仕方ないくらいよ。」

そうそう、今日は衣装合わせのときの写真を見てもらおうと思って…これなんだけど」

「それなら後でゆっくり見せてもらおうよ。ほら、料理が冷めてしまおうよ」

珍しく仕事終わりに食事をしようと誘われた。着いた場所はいつも通りロイヤルホテルの最上階にあるレストラン「ラ・ルナルージュ」だ。何も言わなくてもワインと料理が運ばれてきて食事が終わればロイヤルスイートルームへ戻る。もう何度も繰り返したいいつものパターンだった。

彼から誘われることは滅多にない。今日はいつもと違った彼の姿が見られるかと期待して来たがどうやら見当違いに終わりそうだ。披露宴の話にしても表面上取り繕った感じで、本心では興味がない

のだろう。食事を楽しむ気分になれず結局ほとんど残してしまった。

部屋に戻って夜景を眺めているとバスルームから無防備な格好で出てくる彼の姿が目に入った。上半身は裸で髪もまだ濡れている。私がベッドルームにいるのが意外だったのか、すぐに表情を変えて柔らかい笑顔を向けた。

相変わらず卑怯だな…。

たぶん彼に言い寄られて落ちない女性はいないだろう。それほど彼は完璧で隙がない。無造作に揺れる濡れた髪さえも彼の美しさを引き立てる。デスクワーク中心なのに引き締まった体はどこで手に入れるのだろうか。それでも「美しい」という感想と「愛しい」という感情は結びつかない。

「向こうで待ってるよ」

扉の向こうにあるリビングルームに向かう彼の背中を確認して、バスルームへと入っていった。

ひとりでウイスキーを飲みながら何を考えているのだろう。私のことでないのは確かだろう。いつか、いつの日か私のことを思って考えてくれるのだろうか。そんな期待をした自分の想いを払拭しようと頭からシャワーを浴びた。

「そういえば、この間…貴史さんを見たわ」

「…どこで？」

「中央通りで。珍しくラフな格好だったから見間違えたかと思ったけど、確かに貴史さんだったわ」

ワインを飲んでいた彼の表情がほんの少し曇ったのを見逃さなかった。

もしかするとまずいことを言ったのだろうか。そう思い様子を窺

「ついていると「人違いだろう」と短い返事が聞こえてきた。見間違いでないことは私が一番知っている。だが、彼が違つと言つならそういうことにはしておかないといけなのだろう。」

「それより、さっき言っていた写真見せてくれないのか？」

「あ、そうね。ちょっと待ってて」

この話は終わりだと言わんばかりに切り替えされた。

仕方なくかばんに入っているデジカメを持って彼の隣に座る。ふたりきりのときにこうやって並んで座ることが少ないため距離感に困る。ぴったり引っ付くわけでもなく、半身程度の間を空けてしまった。

不自然だな…。

そう思いながら距離を詰めることもできず、衣装合わせで着た着物やドレスの写真を見せた。感想は聞くまでもない、きつとありきたりな「キレイ」とか「似合っている」とかそんなところだろう。

「いいんじゃないかな」

「あなたの衣装のこともあるから、そろそろ決めないといけないわね。衣装合わせには行けそうかしら？」

「俺の分は夕梨が合わせて選んでくれていい」

「そうはいかないわ、サイズは合わせてもらわないと。ある程度は用意しておくから、ね？」

「…そうだな。スケジュールを調整するよ」

期待はできないと思いつながらカメラをテーブルの上に置いた。

彼と目が合った次の瞬間、抱きかかえられてベッドへと運ばれる。特に驚きもしなければ抵抗もしない。横たわった私のバスローブを剥がすと首筋にキスされた。

冷たい視線。それを見るのがイヤで目を閉じた。そしてそのまま

夜が過ぎるのを待った。

朝、目が覚めるとベッドに彼の姿はなかった。

時刻は九時を少しまわっている、もう出社したのだろう。起こしてくれてもいいのに、そう思いながらバスルームに向かった。起こすも何も、夫となる彼より先に起きて見送らなければならない立場になるというのに情けない話だ。きつとまだ彼の妻になるという自覚が足りないのだろう。

シャワーを頭から浴びながらぼんやりしていると涙が溢れてきた。

こんなところで泣いても仕方ないのに。

もう愛していないと思っていた。

私を見てくれない彼に募る想いは断ち切れたんだと思い込んでいた。

でも違っていた。私の心の奥底には彼を慕う愛情と言う重い感情が根強く残っていた。簡単に消し去ることはできず、光の当たらない闇の中でじつと静かに留まっていた。

それなのにもう我慢できなくなって溢れ出てきてしまった。鏡に映る自分の顔は別人のように冷静さを失っている。

こんなことでしか意思表示できないなんて…。

致命傷にならないことは十分承知している。ただこうすることでしか自分を保てなかったんだとも思う。しばらくシャワーに滲む血を見ていたが、ゆっくりと目を閉じた。

目を開けると白い天井が見えた。

まだ頭がぼんやりしてここがどこだか理解するのに時間がかかった。部屋の中がやけに明るい、もう一度目を閉じて整理しようとしたとき、誰かが覗き込んだ。

「お目覚めですか？ 汐梨お嬢さま」

燕尾服に身を包んだ男性は飽きるほど見た自分の執事だった。ということはここは自分の部屋か。いつの間に戻ってきたのだろう。そもそもロイヤルホテルにいたはずの私は確かバスルームで…。

ああ、そうだ。思い出した。

何かとても投げやりな気分になって思わず手首にカミソリを当てたのだ。あれくらいで気を失うと思っていなかったが甘く見ていたらしい。執事に気付かれないよう手首に触れると包帯を巻いた感触が確認された。幸い傷口は痛むことなく軽症だったことを示している。

おそらくホテル従業員か家の者が発見したのだろう。だとすれば彼の耳に入っただろうか。こんなバカなことをする女だと思っていなかったと幻滅されるのではないだろうか。

それでもいいと思っただけだ。

きっと彼が望むような完璧な女性を演じていることに疲れてしまったのだと思う。どうすれば本当の自分を見てもらえるのかわからず出口のない迷路をずっとグルグル回っていたのだ。

「…児嶋、いつからここに？」

「お嬢さまが十時ごろお戻りになられましたのでその後です。しか

し、体調が優れないのでしたらお呼びいただければいものを…裕臣さまがそばにいらつしゃったから良かったようなものです。あまり無理はなさらないでくださいませ」

「…え？ 何の話？」

「覚えてらつしゃらないんですか？ バスルームで倒れられていたんですよ、軽い貧血だそうです。倒れた拍子に手首を切られたそうです。大事に至らなくてようございました。後で裕臣さまにお礼を申し上げなければなりませんね」

「どういうこと…？」

倒れた私を発見したのは彼だと言つのだろうか。でも確かに彼は出社していたはず、あれは私の思い違いだったのだろうか。少し部屋から出ていただけでシャワーをしている最中に戻ってきたのだろうか。

それにしても発見したのは彼だとして、どうして自ら手首を切つたことは伏せられているのだろう。家の者に心配させないため？ それとも自分の立場を守るため？

「さあ、もう少しお休みくださいませ。今はお体を大事にしていただかないといけませんからね。後で奥さまがいらつしゃいますからそれまでゆっくりなさってください」

「お母さまが？ どうして？」

「奥さまからお話があるとしか聞いておりません。では」

濁した言い方が気になったが問いただす前に執事は部屋を後にした。

母が私の部屋を訪ねるのは珍しいことだ。話があるときは私が呼ばれる立場にあるためこの部屋を訪れるのは執事がメイドかのどちらかだ。彼だつてここに来たことはない。

嫌な予感がする…。

そう思うと同時に彼の顔が浮かんだ。児嶋が知らないだけで、もしくは隠している可能性も否定できないが、彼は両親には話したのかもしれない。と、なると母は説教に来るのか。彼はこんな私にはもう用がないのかもしれない。予想していたこととはいえ現実味を帯びてくると急に恐くなった。

すべて忘れてしまいたいとベッドに潜る。静かな部屋でいつしか眠りについた。

目が覚めたとき泣いていることに気が付いた。夢を見て泣くなんて初めてのことでどうしていいのかわからない。あまりに懐かしい夢を見たから余計に動揺したのかもしれない。

幼い頃の彼と私。今と違って純粋で相手のことを疑うなど知らなかった無垢な時代。あの頃に戻れたなら、私は幼い私になんて言うのだろうか。きっと未来が決まっても告げることができないだろう。結局「今」という未来を選択したのは自分なのだから。

「…マリッジブルーにしては重症だわ」

ベッドから起き上がろうとしたが眩暈がして再び横になった。

軽い貧血だと言っていたが本当にそうなのだろうか。まさか何か重い病気にかかったという可能性があるのだろうか。そこまで思っ
て結華のことが思い出された。

自分だけは大丈夫だと、誰もが漠然と自信を持っている中彼女は病に侵された。私も心のどこかで自分には関係のない話だと信じていた。でも今はその自信が揺らぐ。

不安に押し潰されそうになり体を抱え込んだ。その時、扉をノックする音が聞こえてきて体がビクツと揺れた。

「汐梨、入るわよ」

「…お母さま、今起きます」

「いいのよ、そのままです。無理に起きる必要はないわ。それにしてもあなたには驚かされてばかりね。結婚したいと言ってみたかと思えば延期したいと言っし、日時が決まったかと思えば今回のこと。あまり私たちを困らせないでちょうだい」

返事はできなかった。

やはり彼から母の耳に入ったのだろう。今回ばかりは庇ってはくれないだろう。それでも言い訳をする気にはなれなかった。黙って母の説教を聞くつもりだった。だが、母の口からは予想していなかったことを告げられた。

「でも今回はおめでたいほうだから責められないわ。お父さまは怒っていたけど産まれてくる子どもに罪はないものね、しばらくは安静にしておくのよ」

頭は真っ白で何も考えられなかった。

母の突然の告白に、とても自分のことを言われているという実感はなくまだ夢の続きを見ているのかと思うほど現実離れをしていた。

子ども…？

私のお腹の中に、赤ちゃんがいるの…？

いつか、彼の家に嫁ぐのだから跡取りを産むのは当然のことだと覚悟していたが、まさかこのタイミングで妊娠するなど思ってもいなかった。なぜ今なのだろう、彼の心は私のことを見ていないというのに。

こんな状態で子どもなんて産めない。生まれてきてもきつと幸せにしてあげられない。そう思うと涙が流れてきた。

「汐梨、どうしたの？ 気分でも悪いの？」

「ううん、そうじゃないの…そんなんじゃないよ…」

「何か不安なことや心配事があるのなら言ってもいいのよ。あなたはわがままなくせに意地っ張りだから肝心なことは何も話してくれないわね。でももう子どもじゃないのよ、母親になるんだから強くなるためにも自分に素直になっ」

そう言うと母は私を優しく抱きしめてくれた。

子どものように泣く私を母は黙って見守ってくれた。自分がかんなんにも愛されているなんてどうして今まで気がつかなかったんだろうと思うほど優しい表情だった。

涙が治まるとすっきりしたのか思いの内を母に告げていた。彼と結婚することへの不安、自分の立場への葛藤、そして妊娠の事実へ

の困惑。

「…まるで、若い頃の私を見ているようだわ」

すべてを聞き終えた後、母は静かに口を動かした。

こんな告白をしても何も変わらないと思っていたのに、母は私に同調してくれた。意外だった。いや、意外だったというのは違うかもしれない。正しくは「知らなかった」だ。

「今と違って、私たちの時代はもつと閉鎖的だったわ。自分の気持ちを伝えることなんて許されなかったもの。だからお父さまと結婚すると決まったとき、あなたと同じように不安を抱いたわ。でもお父さまはあの通り寡黙な人だから相談できないでしょう？ だからひとりで抱え込んでずいぶん悩んだわ。でもね、後になってお父さまに話したとき「なんでもつと早くに話してくれなかったんだ」って怒られたの。驚いたわ、まさか私のことをそんな風に想ってくれてたなんて想像もしていなかったから」

当時のことを思い出しているのかその顔には笑みが浮かんでいた。あのお父さまにそんな一面があったなんて驚きを隠せなかった。でも、と思う。結局のところ両親は心のどこかで繋がっていたということ、その事実があったからこそ思いやる台詞が出てくるのだ。私と彼の関係とは根本的に違う。

「でも…私と裕臣さんは、そうはなれないわ」

「汐梨、そうじゃないのよ。私たちの相手が子供の頃に決められる本当の理由を考えてちょうだい。昔はね猶予なんてなかったの、嫁ぐ先が決まればすぐにその家に出されたわ。だからお互い相手のことなんて顔も知らない状態だったのよ。でもね、それじゃあダメなの。政略結婚が避けて通れない道なら、せめてお互いをよく知って

心を開いて欲しいの。そして想い合って欲しいの。それができないのなら結婚してもうまくはいかないわ」

私はずっと彼のことが好きだった。

それが親の決めた政略結婚でもいいと思えるほど。それなのに、諦めた私の結論は間違いだったのだろうか。愛してもらえないからなんて、望んでばかりでは何も手に入らないと知っていたはずなのに。

長い間一緒にいて、心を開いていなかったのは私のほうだったのだろうか。どうせ彼は私に心を開かないと決め付けて、わがままばかりを押し付けて本当の気持ちを封印してきた。それでも彼は嫌な顔をしなかった。それすら造られたものだと思っていたが実はそうではなかったのだろうか。

「…興味のない人と結婚しようなんて人、滅多にいないのよ。だからあなたも恐がらないで裕臣さんにぶつかってごらんなさい。きっと何かが変わるから」

何かが心の中にすとんと落ちた。

自分の気持ちなんて、決して誰にもわかってもらえないと思い込んでいたのに、実はこんなにも近くに理解者がいたことを知った。今までひとり悩み抱え込んでいたことがバカらしくなるほど、気分はすっきりしていた。

最初からぶつかっていればよかったんだ。

失うものなんて何もなかったのに、何に怯えていたんだろう？でも今なら、守りたいもののためにぶつかることもできるだろう。自分が少しでも強くなるために。

「じゃあ、邪魔しちゃいけないからいくわ。後はあなたたちふたりでも大丈夫よね？」

「…え？」

母が立ち上がると同時に視界に入ってきたのは彼の姿だった。いつもと変わらない完璧な表情の彼。でも、何か違って見えるのは気のせいだろうか。

母は笑顔で去っていき、入れ違うように彼がベッド脇に座る。いつからそこにいたのだろうか。詮索しようとして止めた。気になるのであれば聞けばいいだけのことなのだから。

どこから話そうかと迷っている和不意に彼の口が動いた。おおよそ彼の台詞とは思えないほど優しい言葉だった。

「…汐梨、さみしい想いをさせてごめん。これからは何でも話そう、何でも聞くから。汐梨のすべてを俺が受け止めるから」

十月末。

空は澄み渡り頬を撫でる風が心地よい温度で思わずポーっとしてしまう。

夢の中にいるような感覚に浸っていると、お腹を少し蹴られて我に返った。今日は私と彼が世間的に夫婦と認められる日。安定期に入ってはいるが少し動くと疲れてしまうため、彼の言葉に甘えて座って待っていた。

「汐梨、大丈夫か？ 無理しないでいいから気分が悪くなったら言うんだぞ？」

「ええ…今はすごく落ち着いてるわ。披露宴、もう少しで始まるでしょ？ それまで休んでるから心配しないで」

「そうか、俺はもう少し挨拶してくるから大人しく待ってるんだぞ。じゃあ児嶋さん、よろしくお願いします」

紋付袴姿の彼は児嶋に頭を下げると慌しく控え室を後にした。

一部始終を見ていた児嶋が必死で笑いをこらえている。無理もない、数ヶ月前の彼とはまるで別人だ。最近ようやく慣れてきたところだが、今日の格好が格好だけに笑ってしまうのだろう。

その気持ちがわからないでもないため同じようにクスクスと笑ってしまった。

あの日。

彼はただひたすらに謝っていた。それは私にとっては意外なことではな謝られているのか見当もつかなかった。そして彼は言った、私に愛されることがないと思っていて、と。

私は幼い頃からずっと彼のことが好きだったのにそれは伝わらな

かつたらしい。実際言葉にしたことはないのだから無理もないかもしれないが、態度でわからなかったのだらうかと思つた。彼はまったく気が付かなかつただけ言い、私も幼い頃の記憶を手繰り寄せた。

いつも一緒にいた。

それはいつの日か結婚すると決まっていたから。

それが根付いてしまいお互いの本当の気持ちに触れることができなかつたのだと思う。そんな中で彼は一人の少女と出会つた。今思えばあれは「恋」ではなく「幻想」だつたと振り返つた。

何かに心を奪われた幻想を胸に、いつの日か愛されることを期待する。そんな偽りの世界に彼は長年浸つていたと語つた。その少女が実際には婚約者であつた貴史を愛していたと気が付き、彼の夢はそこで現実に引き戻されたのだ。

だが、引き戻された私との空間もすでに偽りのもので、真実を見出せないまま迷い込んだ彼は私との仲を修復することに頭を悩ませた。出口の見えない迷路を彷徨つていたのは私だけではなかつたということだ。

想いは告げないと相手には伝わらない、それを改めて痛感させられた。

『汐梨が倒れているのを見て、初めていなくなることへの恐さを知つたんだ』

そう言われて思わず涙が溢れた。

嬉しいとか悲しいとか、そんな感情よりも違う何かを感じた。おそらく自分も感じていた不安で自ら手首を切つたにも関わらず、そのことにより彼を失うんだと思うと急に恐くなった。

人は失って初めて大切な存在に気が付くらしい。私たちは幸い、取り戻すことができた。だからこそ二度と手放さないために背伸びはしないと決めたのだ。

「汐梨さま、そろそろ披露宴が始まります」

「わかったわ」

そう返事をするとい嶋がとっさに手を差し出し、私が立ち上がりやすいようにサポートする。その手を見ながら大事なことを忘れていたことに気が付いた。

「い嶋：これまでわがままな私に付き添ってくれてありがとう。今日から来栖汐梨になるけれど、これから私を支えてちょうだいね」
「お嬢さま、いえ、もう若奥さま、とお呼びするべきですね。わたくしは生涯汐梨さまだけに仕える身でございます。お礼の言葉はわたくしがお勤めを全うしたときでようございますのに」

「いいのよ、言っておきたかったです」

「ありがたく頂戴いたします」

い嶋は深々と頭を下げた。

色内掛けに着替えた私は控え室を出た。外には彼が待っていて私の手はい嶋から彼へと渡される。後ろから「いつてらっしゃいませ」と声をかけられると少し緊張していた気持ちは落ち着いてきた。

長い廊下を彼と歩いていると不思議な気持ちになる。

ほんの数ヶ月前まではふたりの距離感が掴めず、どこかよそよそしい雰囲気があったというのに今はどうだろう。彼の横にびったりと寄り添っていることが心地よい。

黙って歩いているだけの時間でさえ幸せなんだと知ることができた。私たちはまだ始まったばかり。これからきっともっと多くのこ

とを知るようになるだろう。

披露宴会場の扉の前に着くと係りに案内されながら立ち位置につく。

「ねえ、裕臣さん…私たち、世界で一番幸せな家庭を作っていきましようね」

そう、私たちが知ったばかりの愛に溢れた家庭を。

彼を顔を覗き込むと笑顔を返してくれた。そして「当たり前だ」と言いながらそつとキスをしてくれた。その直後、目の前の扉が開く。

ふたり同時に歩き始めた。きっとこれからの人生もこうやって一緒に歩いていくのだろう。そのたびにこうやって笑顔でいられるように心から願った。

あとがき

最後まで「向日葵は太陽に魅せられて」と読んでいただきありがとうございます。
とっごくざいます。

当初、短編のつもりで書き始めたんですが不意に男性視点を書きたくなつて三十話を超える長編になってしまいました。おまけに番外編まで掲載したので予定を大幅に越してしまいました。

更新のたびにたくさんの方に訪問していただき、本当に感謝しています。

元々は「愛しい人と向日葵の花を見る」というイメージがありまして、それからできた話です。ひまわりの花言葉は「あこがれ」だそうです。太陽に恋するイメージが大きいですね。ひまわりが太陽を連想されることもあつてか、まさに夏の花ですね。

主人公でもある結華と貴史。ふたりはまさにひまわりと太陽のよきな関係かなあと。お互いに憧れを抱いていて、おまけにお互いが届かない存在だと思っいて。

かなりもどかしい感じがしたんではないでしょうか。

誰もが暖かい気持ちになるハッピーエンドにはなりませんでしたが、誰かを大切に想う気持ちはためらわずに伝えて欲しい、そういう願いを込めて書きました。

拙い文章でしたが、ほんの少しでも共感できる部分があればいいなあと思っています。

立花 美月

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7965v/>

向日葵は太陽に魅せられて

2011年11月23日23時55分発行